

授 業 科 目	教 養 演 習		単位数	1	担当教員	小堀 哲郎 他
講 義 の 内 容	この授業は、広い意味での「教養」を身につけるためのものであり、大きくわけて「身体」や「生命」についての理解を深め、「生活常識」を身につけることを学んでもらう。 保育者は、子どもの生命の大切さを教え、子どもたちの生活や行動の模範となることが求められる仕事である。そのためには、まず、自分自身の身体や生命を大切にし、美しい立ち居振る舞いや言葉遣いで日常生活を送るよう努める必要がある。このことを真剣に受け止めた上で受講してもらいたいと思う。					
到 達 目 標	①若い女性として自分の身体や生命についての理解を深めること。 ②社会人としてのマナーや礼儀作法を身につけること。					
授 業 計 画	第 1 回	授業内容や評価方法等のガイダンス				
	第 2 回	人間のからだのつくり				
	第 3 回	女性ライフサイクルと体の変化				
	第 4 回	月経について				
	第 5 回	妊娠・出産について				
	第 6 回	性感染症と健康への影響				
	第 7 回	女性の病気について				
	第 8 回	命を守ること				
	第 9 回	社会人としての基本マナー①：立ち居振る舞いの基本				
	第 10 回	社会人としての基本マナー②：職場のルールとマナー				
	第 11 回	訪問と対応のマナー、もてなしのマナー				
	第 12 回	言葉遣いと人間関係のマナー				
	第 13 回	電話・手紙・文書マナー				
	第 14 回	食事のマナー				
	第 15 回	まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 授業で学んだことは確実に理解し、自分の知識・技術として身につけること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 西山：小テストまたはレポート（８０％）、授業態度（２０％） 鯛谷・堀内：授業態度（１００％） この二つの評価を合計して評価する。					
教 科 書	『新生活教養』（近喰晴子他、建帛社）					
参 考 文 献						
注 意 事 項	授業は、第 2 週～第 8 週（担当：西山）はクラスごとに行い、第 9 週～第 15 週（西山・堀内）はクラスを 2 つにわけた少人数グループで行う。 卒業および資格取得のための必修科目なので、全員が履修すること。					

授 業 科 目	基 礎 演 習		単位数	1	担当教員	宮内・中村・清水
講 義 の 内 容	保育者になるために必要な専門科目を十分に理解し、効果的な学習をするための基礎となる力を身につけるための授業である。1 クラス 20 名程度とし、演習形式で「文章表現」「プレゼンテーション」「算数・数学」「時事問題」の基礎を学ぶ。保育者として必要とされる能力であり、実習にも役立つので、積極的に参加すること。					
到 達 目 標	①実習日誌や指導案作成に必要な文章力を身につける。 ②子どもたちの前でわかりやすく説明できる表現力の基礎を培う。 ③専門科目の学習の準備としての数的処理能力と時事問題の知識を身につける。					
授 業 計 画	第 1 回	文章表現①：良い文章と悪い文章・主語と述語の配置				
	第 2 回	文章表現②：センテンスの区切り方・修飾語と被修飾語の配置				
	第 3 回	文章表現③：敬語の使い方・丁寧語の使い方				
	第 4 回	文章表現④：語彙の習得				
	第 5 回	文章表現⑤：漢字を学ぶ				
	第 6 回	文章表現⑥：文書マナー①				
	第 7 回	文章表現⑦：文書マナー②				
	第 8 回	プレゼンテーション①：自分を知ろう				
	第 9 回	プレゼンテーション②：自分を表現しよう				
	第 10 回	プレゼンテーション③：どんな保育者をめざすか				
	第 11 回	最近の出来事① 計算練習 保育に関する知識①				
	第 12 回	最近の出来事② 文章題練習 保育に関する知識②				
	第 13 回	最近の出来事③ 文章題練習 保育に関する知識③				
	第 14 回	最近の出来事④ 過去問演習 保育に関する知識④				
	第 15 回	授業の振り返りとまとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習：	各担当教員の指示に従って予習・準備を行うこと。			復 習：	各担当教員が授業中に指示する。
成 績 評 価 の 方 法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、授業態度（５０％）					
教 科 書	特になし					
参 考 文 献	授業注意に適宜指示する					
注 意 事 項	各クラスを 2 グループに分け、1 つのグループは上記授業計画の第 1 週目の授業内容から始め、もう 1 つのグループは第 8 週目の授業内容からスタートする形で進める。卒業及び資格必修科目なので、全員が履修すること。					

授 業 科 目	日 本 国 憲 法	単位数	2	担当教員	平田 陽一
講 義 の 内 容	私達の国家は市民の良識により公正な社会を作ることを目指しており、この目的を実現するために考え出された法が憲法である。この視点から憲法の基本的な考え方を説明する。				
到 達 目 標	① 憲法が制定された目的を理解すること ② 憲法が前提としている「自律した市民」としての自覚が持てるようになること ③ 自己の判断により国の政策を選択できるようになること				
授 業 計 画	第 1 回	憲法について（憲法は政府の守るべき法であること）			
	第 2 回	近代立憲主義（憲法が政治権力の濫用を防止するための法であること）			
	第 3 回	近代国家と憲法（政府の役割が国民の人権の保障であること）			
	第 4 回	平和主義（国際紛争を平和的手段で解決するということ）			
	第 5 回	国民主権主義（国家の政策は国民が決めるということ）			
	第 6 回	人権尊重主義（政府は国民の人権を侵害してはならないということ）			
	第 7 回	権力分立主義（政治権力の濫用を防止するため分割するということ）			
	第 8 回	人権（人間が人間として生まれながらに当然有する権利であること）			
	第 9 回	自由権（政府の人権侵害からの国民の自由について）			
	第 10 回	社会権（国民の人権を実現するために政府のなすべきことについて）			
	第 11 回	参政権など（国民の意思の表明などについて）			
	第 12 回	立法機関（国会の役割について）			
	第 13 回	行政機関（内閣の役割について）			
	第 14 回	司法機関（裁判所の役割について）			
	第 15 回	憲法の現代的諸問題			
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 予習は困難と思われるので、特に必要としない。		復 習： 単なる復習ではなく、基本的な問題を心に留めて考え続けることが望まれる。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（60％）、授業態度（40％）				
教 科 書	『現代社会の法と民法』（小野幸二編著、八千代出版）				
参 考 文 献					
注 意 事 項	一般教養として憲法を勉強するという意識ではなく、よい社会は自分達で作るという積極的な心構えで勉強すること。				

授 業 科 目	体 育 実 技		単位数	1	担当教員	塩崎 みづほ
講 義 の 内 容	本講義では、生涯にわたって運動・スポーツと親しむための基礎的技能の習得、正しい知識、実践方法について学ぶとともに、運動・スポーツを通して他者との関り方について考えることをねらいとする。さらに、将来幼児教育者として適切に動け、子どもを援助指導できるように、学生の運動に関する資質の向上を図る。					
到 達 目 標	① 運動・スポーツに親しむための基礎的技能の習得 ② 自己の身体に関心をもち、健康の維持・向上を実践していく知識・方法の習得 ③ 運動・スポーツを通して協調性・社会性を養う ④ 幼児教育者として必要な身体運動に関する基本的な知識と技能の習得					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション 次にあげる3つのコースから選択できる。(第10時間までは共通) 1) 平常コース 2) スケート教室(9月上旬、3日間) 3) スキー教室(3月中旬以降予定3泊4日) 上記コースの説明 履修方法、受講上の注意事項等について説明	第 14 回	ソフトバレーボール②		
			第 15 回	バドミントン①		
			第 16 回	バドミントン②		
	第 2 回	身体ほぐし、心ほぐし 豆袋を使って遊ぶ	第 17 回	卓球①		
	第 3 回	リズムカルに動く「ダンス」①	第 18 回	卓球②		
	第 4 回	リズムカルに動く「ダンス」② ー友達と関わってー	第 19 回	バレーボール①		
	第 5 回	リズムカルに動く「ダンス」③ ー動きの発見ー	第 20 回	バレーボール②		
	第 6 回	リズムカルに動く「ダンス」④ ー作品を創るー	第 21 回	縄跳び		
	第 7 回	リズムカルに動く「ダンス」⑤ ー発表会ー	第 22 回	幼児体操を考えよう①		
	第 8 回	ドッチボール	第 23 回	幼児体操を考えよう②		
	第 9 回	ポートボール				
	第 10 回	バスケットボール①				
	第 11 回	バスケットボール②				
	第 12 回	フリスビー、リングボールを作って遊ぼう				
	第 13 回	ソフトバレーボール①				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： ストレッチ、簡単な運動を毎日実践する		復習： 授業内に行った幼児体操の動きをノートに記録し、動きの復習をする ルールについて復習し記憶する			
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（20％）、課題（10％）、作品（10％）、発表（10％）、実技（20％） 授業態度（30％）					
教 科 書	『子どもの運動・表現遊び』（宮下恭子編、大学図書出版）					
参 考 文 献	『保育の中の運動あそび』（石井美晴編、萌文書林） 『幼児の動きづくり』（桐生良夫編、杏林書院） 『0歳からはじめるうごきづくり』（太田昌秀他著、幻冬舎ルネサンス）					
注 意 事 項	実技の時は、必ず指定の運動着を着用して受講すること 出席を重視する 意欲をもって積極的に取り組む姿勢を評価する ＊2）スケート、3）スキーコースに係る各諸費用については、全額学生負担となる。					

授 業 科 目	体 育 実 技		単位数	1	担当教員	岡 芳 郎
講 義 の 内 容	本講義では、身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体の保持増進に努めることによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に授業を実施する。					
到 達 目 標	1）運動・スポーツを通して主体性・協調性・社会性・道徳性などを養う。 2）幼児教育者として必要な身体運動に関する基本的な知識と技能を習得し、自ら動ける身体を作り、体力の維持増強を図る。 3）幼児教育者として適切に動け、子どもを援助指導できるように学生の運動に関する資質の向上を図る。					
授 業 計 画	第 1 回	授業ガイダンス 履修方法、受講上の注意事項についての説明		第 16 回	軽スポーツ① (フリスビー・フラフープを使って)	
	第 2 回	からだほぐし① (なわとび・ボールを使って)		第 17 回	軽スポーツ② (フリスビー・フラフープを使って)	
	第 3 回	からだほぐし② (なわとび・ボールを使って)		第 18 回	卓球① (各種ストロークの練習 簡易ゲーム)	
	第 4 回	バドミントン① (各種ストロークの練習 簡易ゲーム)		第 19 回	卓球② (A・Bブロック総当たり リーグ戦)	
	第 5 回	バドミントン② (ダブルスゲーム リーグ戦)		第 20 回	テニス① (各種ストロークの練習 簡易ゲーム)	
	第 6 回	バドミントン③ (ダブルスゲーム リーグ戦)		第 21 回	テニス② (各種ストロークの練習 簡易ゲーム)	
	第 7 回	バスケットボール① (パス・ドリブル・シュート練習 簡易ゲーム)		第 22 回	ドッチボール① (クラス内対抗マッチ)	
	第 8 回	バスケットボール② (A・Bブロック総当たり リーグ戦)		第 23 回	ドッチボール② (クラス内対抗マッチ)	
	第 9 回	バスケットボール③ (A・Bブロック総当たり リーグ戦)		第 24 回		
	第 10 回	ソフトバレーボール① (パス・アタック・サーブ練習 簡易ゲーム)		第 25 回		
	第 11 回	ソフトバレーボール② (A・Bブロック総当たり リーグ戦)		第 26 回		
	第 12 回	ソフトバレーボール③ (A・Bブロック総当たり リーグ戦)		第 27 回		
	第 13 回	フットサル① (パス・ドリブル・シュート練習 簡易ゲーム)		第 28 回		
	第 14 回	フットサル② (A・Bブロック総当たり リーグ戦)		第 29 回		
	第 15 回	フットサル③ (A・Bブロック総当たり リーグ戦)		第 30 回		
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 授業で実施する競技について基本技術やルールについて把握しておくこと。			復習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（１０％）、課題（２０％）、実技（３０％）、授業態度（４０％）					
教 科 書	適宜プリントを配布する。					
参 考 文 献						
注 意 事 項	授業は３つのコースから選択できる。（１．平常コース ２．スケート教室 ３．スキー教室） ※スケート・スキー教室にかかる各諸費用については全額学生負担となる。 指定された体操着を着用すること。 シューズは体育館用・外用を準備すること。 ※欠席回数が全授業の３分の１を超えた場合は評価の対象外となる。					

授 業 科 目	体 育 講 義		単位数	1	担当教員	塩崎 みづほ
講 義 の 内 容	健康や運動に関する情報があふれている現代社会。それらに対応していく力をつけることが望まれるだろう。よって、本講義では健康・運動・体力について正しい知識を学び、自ら健康の維持増進の方法を考え、実践していく力を養うことがねらいである。					
到 達 目 標	到達目標は、①健康に関する正しい知識を学び、健康的なライフスタイルを目指せるようにする、②幼児期、学童期、青年期の発達と運動の関係について学ぶ、③将来幼児教育者とし自己の健康管理、子どもたちの健康・運動の援助指導を適切に行えるよう基礎的知識を習得する、である。					
授 業 計 画	第 1 回	受講上の留意事項について 人間の健康と運動				
	第 2 回	体力について 体力概念、体力低下について考える				
	第 3 回	幼児期・学童期・青年期の発達の特徴と運動				
	第 4 回	トレーニングの基礎理論				
	第 5 回	私たちの心と身体 心身の発達の特徴				
	第 6 回	青年期の性と S T D				
	第 7 回	応急手当の基礎知識				
	第 8 回	現代社会と運動遊びの意義について まとめ				
	第 9 回					
	第 10 回					
	第 11 回					
	第 12 回					
	第 13 回					
	第 14 回					
	第 15 回					
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 次時の授業に関連する箇所の教科書、配布プリントを熟読してくる。			復 習： 小テストの内容について、配布プリント、教科書を見てしっかり覚えてくる。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、レポート（１０％）、課題（１０％）、授業態度（３０％）					
教 科 書	『子どもの運動・表現遊び』（宮下恭子編、大学図書出版）、					
参 考 文 献	『健康づくりのための運動科学』（鵜木秀夫編、化学同人）、					
注 意 事 項	11 月から実施する					

授 業 科 目	体 育 講 義		単位数	1	担当教員	岡 芳 郎
講 義 の 内 容	本講義では、「健康」「運動」「スポーツ」の実践の基盤となる理論的な事柄について理解を深めていくことを目的に、健康・体力・運動について正しい知識を学び、健康的なライフスタイルを目指せるようにする。 また、さまざまな生活習慣病について学び、運動・栄養・休養との関係について考えていく。					
到 達 目 標	1）健康とは何かについて考える。 2）生活習慣病とその対策について理解する。 3）自らの健康の保持増進方法を考え、実践できるようにする。					
授 業 計 画	第 1 回	授業ガイダンス 性格について（性格の形成・性格の分類・性格検査）				
	第 2 回	血液について（血液の役割・血液の成分・血液型の比率） 血液型の遺伝システム 輸血について				
	第 3 回	人体のしくみ （各器官系の働きについて）				
	第 4 回	運動器系の構造と働き （骨格系・筋肉系・関節の働きについて）				
	第 5 回	神経系の構造と働き （脳の構造・機能 右脳左脳の働きについて）				
	第 6 回	体力・運動能力の定義 （種類・構造・基本的な体力要素について）				
	第 7 回	健康の定義・健康の考え方 （食事・運動・休養との関係について）				
	第 8 回	生活習慣病と健康 （体型・体格の 3 要素 標準体重・BMI について）				
	第 9 回					
	第 10 回					
	第 11 回					
	第 12 回					
	第 13 回					
	第 14 回					
	第 15 回					
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 授業で扱うテーマに関連する記事（雑誌・新聞等）をスクラップする。			復習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、レポート（１０％）、課題（１０％）、授業態度（３０％）					
教 科 書	適宜プリントを配布する。					
参 考 文 献						
注 意 事 項	授業開始は１１月からである。 授業中の飲食禁止。 授業中の携帯電話の使用禁止。 ※欠席回数が全授業の３分の１を超えた場合は評価の対象外となる。					

授 業 科 目	宗 教 と 文 化		単位数	2	担当教員	宮内 淳平
講 義 の 内 容	私達は常日頃いろいろな宗教とふれ合っている。本講義では、日常生活に横たわっている宗教に関する主要なテーマを取りあげ、それらの宗教行事に流れる思想・文化等多角的に検討し、日本人と文化について考えてみる。また、それぞれのテーマの中で、具体的に日本の民族宗教である神道、中国の民族宗教である道教・儒教等にもふれ、民間伝承宗教行事の具体例をも取りあげ、死生観を含み宗教の役割及び機能について総合的に考えてみる。					
到 達 目 標	・ 宗教とは何かということについての基礎的な知識を得それらの知見や考え方を理解する。 ・ 世界で起きている宗教に関する諸問題について理解し、それらについて考える能力を身につける。 ・ 上記のような知識と理解に基づいて、感謝の気持ちと思いやりの心を身につけ、幼児教育者としての心豊かな宗教情操を身につけ、宗教は文化の重要な一要素であることを学ぶ。					
授 業 計 画	第 1 回	日常の宗教的考えについて				
	第 2 回	日本人の宗教に対する考えと信仰の自由について				
	第 3 回	宗教の誕生と起源				
	第 4 回	原始宗教とアニミズム・シャーマニズム・トーテミズム				
	第 5 回	宗教の定義・宗教の分類				
	第 6 回	宗教儀礼と通過儀礼				
	第 7 回	日本神話の歴史と神道について				
	第 8 回	呪術と祈りについて				
	第 9 回	生活の中の宗教と民間信仰				
	第 10 回	天の思想と中国民族宗教及び儒教について				
	第 11 回	中国道教について生活				
	第 12 回	日本人の死生観『地藏十王経』についてⅠ				
	第 13 回	日本人の死生観『地藏十王経』についてⅡ				
	第 14 回	宗教と科学の関係について及び現代社会のでの宗教問題について				
	第 15 回	現代社会と宗教と生き甲斐について				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： レジュメを配布するので必ず事前に読んで授業を受けること。			復習： レジュメをよく読み、わからないことは次回に質問する。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題（70％）、授業態度（30％）					
教 科 書	レジュメを配布予定。					
参 考 文 献						
注 意 事 項						

授 業 科 目	現 代 社 会 事 情		単位数	2	担当教員	松木 久子
講 義 の 内 容	日々さまざまな問題が起きている現代社会ですが、一見、無関係と思われるようなことでも実は大いに関係があり、自分の将来が左右される問題であるかもしれません。そこで一般常識として知らなければならない時事問題を理解する力を養い、日本の政治・社会問題・国際問題等に関する事柄について、十分な理解力をつけていくことを目指し、さらにこれからの日本や世界のあり方を考えられるよう指導します。					
到 達 目 標	現代社会の問題に対して、自分の考えが述べられるように理解力を高め、発表できるようにする。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション：履修上の注意、講義内容の概要等				
	第 2 回	社会(1)：司法制度改革				
	第 3 回	社会(2)：格差・少子高齢化社会				
	第 4 回	社会(3)：年金問題、医療保険改正				
	第 5 回	政治(1)：与党と野党				
	第 6 回	政治(2)：憲法改正論				
	第 7 回	政治(3)：選挙制度				
	第 8 回	経済(1)：消費税率引き上げ問題				
	第 9 回	経済(2)：株価動向				
	第 10 回	国際(1)：北朝鮮問題				
	第 11 回	国際(2)：アメリカ大統領選挙				
	第 12 回	国際(3)：国際連合と国際機関				
	第 13 回	地球温暖化問題(1)				
	第 14 回	地球温暖化問題(2)				
	第 15 回	これまでのまとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：新聞・雑誌の記事や参考文献に目を通し理解しておく。			復習：自分の考えを発表できるようにしておく。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験：実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（４０％）、発表（３０％）、授業態度（３０％）					
教 科 書	特に指定はしません。					
参 考 文 献	授業中に適宜、必要なプリント・資料等を配布します。					
注 意 事 項	授業形態は講義が中心となりますが、発表や映像鑑賞を取り入れたりしながら、弾力的に展開していこうと思います。日頃から身の回りの出来事に興味・関心をもち、毎日一回は新聞に目を通し、ニュースに耳を傾けてください。図書館等を利用して、自ら積極的に調べることを通して、主体的に学ぶ態度を養ってください。					

授 業 科 目	エ コ ロ ジ ー 入 門		単位数	2	担当教員	中村 陽一
講 義 の 内 容	エコロジー（ecology）は「生態学」と訳され、本来は「生物と環境の関わりを研究する学問」であるが、地球環境問題が深刻化する中、人間と自然との共存を目指す思想や活動を表す言葉として使われるようになった。本講では、人間活動が地球環境に及ぼした影響を歴史的に検証し、環境問題の現状をエコロジーの視点から学ぶ。					
到 達 目 標	1．人類が地球環境に与えてきた影響について、エコロジーの視点から理解する。 2．現在の地球環境問題について、その概要を知り説明できる。 3．地球環境問題について問題意識を持ち、自分の意見を述べることができる。					
授 業 計 画	第 1 週	エコロジー（生態学）とは何かーその思想と歴史、地球環境問題の概要				
	第 2 週	エコロジーから見た世界史①ーイースター島の悲劇				
	第 3 週	エコロジーから見た世界史②ー古代文明と森林破壊				
	第 4 週	エコロジーから見た世界史③ー西欧文明と環境破壊				
	第 5 週	エコロジーから見た日本史①ー持続可能な社会だった江戸時代				
	第 6 週	エコロジーから見た日本史②ーエコロジーから見た伊勢神宮の式年遷宮				
	第 7 週	エコロジーから見た日本史③ー公害問題と環境問題				
	第 8 週	環境問題の現状①ー地球温暖化の現状				
	第 9 週	環境問題の現状②ー温暖化は何をもたらすか				
	第 10 週	環境問題の現状③ーヒートアイランド現象				
	第 11 週	環境問題の現状④ーオゾン層破壊				
	第 12 週	環境問題の現状⑤ー生物種の絶滅				
	第 13 週	再生可能エネルギーとエコロジー①ー太陽光発電と風力発電				
	第 14 週	再生可能エネルギーとエコロジー②ー地熱発電とバイオマス利用				
	第 15 週	地球の未来はどうかー限界に達した地球環境				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 授業の終わりに次回の内容と予習の方法について伝える。			復習： 授業中に示す重要事項を中心に復習すること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（70％）、授業態度（30％）					
教 科 書	なし					
参 考 文 献	必要に応じて紹介する。					
注 意 事 項						

授 業 科 目	情 報 機 器 操 作		単位数	2	担当教員	金 宰 郁
講 義 の 内 容	教育に関連する文書業務・情報交換・情報収集等は、コンピュータによりその多くが行われていると考えられます。本科目では、幼児教育を行う方法の上での技術として、情報機器を利用するには、どのような考え方でどのような情報機器を用いて行うことが最も適切なのかについて理解を図ります。					
到 達 目 標	情報分野の基本的なスキルであるコンピュータリテラシーを身につけ、コンピュータを使いこなせることを到達目標としています。 1) ワードプロソフト「Word」の習得によりそれぞれの文書作成に対応 2) プレゼンテーションソフトの習得により卒論に対応 3) 情報処理検定及びワープロ検定試験への資格証取得					
授 業 計 画	第 1 回	この授業科目に関するガイダンスおよび自己紹介文作成・提出				
	第 2 回	Windows の基本操作(1)：OS, GUI など				
	第 3 回	Windows の基本操作(2)：ファイル管理, 種類, 文書の保存・読み込み, その他				
	第 4 回	絵の作成の基礎：絵描きソフト（ペイント）による文化表現関連課題の作成および提出				
	第 5 回	日本語ワードプロソフト「Word」の基礎(1)：文書形式, 文書のコピー・移動・削除の関連課題の作成および提出				
	第 6 回	日本語ワードプロソフト「Word」の基礎(2)：文字サイズの変更, 文字揃えなどの関連課題の作成および提出				
	第 7 回	日本語ワードプロソフト「Word」の基礎(3)：均等割付・段組, 縦書き文字などの関連課題の作成および提出				
	第 8 回	日本語ワードプロソフト「Word」の基礎(4)：表作成と編集①の関連課題の作成および提出				
	第 9 回	日本語ワードプロソフト「Word」の応用：表作成と編集②の関連課題の作成および提出				
	第 10 回	日本語ワードプロソフト「Word」の応用：クリップアート, ワードアートの関連課題作成, 及び提出				
	第 11 回	日本語ワードプロソフト「Word」の応用：図形描画の関連課題作成, 及び提出				
	第 12 回	日本語ワードプロソフト「Word」の応用：段組み, ドロップキャップ, ページ罫線の関連課題作成, 及び提出				
	第 13 回	プレゼンテーション「PowerPoint」 1：発表の構成とスライド, オブジェクトの編集, その他				
	第 14 回	プレゼンテーション「PowerPoint」 2：発表の準備, その他				
	第 15 回	プレゼンテーション発表：グループごとに PowerPoint で 1 つの作品を作り, 発表				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： ワードプロソフトの基礎知識（定義）を事前に調べてから、教科書の例題および課題を解いてみる。			復習： 教科書の例題および当日の課題をもう一度解いてみて確認する。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題（40％）、作品（20％）、発表（10％）、授業態度（30％）					
教 科 書	『文科系学生のための情報活用』（立野貴之、共立出版）					
参 考 文 献	『知りたい操作がすぐわかる Word2013 全機能 Bible』（西上原裕明、技術評論社）					
注 意 事 項	出席時間数が授業時間数の 3 分の 2 以上であり、かつ、課題、最終作品、発表、平常点等の成績を総合して合格と判断された場合、所定の単位が与えられます。					

授 業 科 目	情 報 機 器 操 作	単 位 数	2	担 当 教 員	榎 本 功 子
講 義 の 内 容	パソコンの基本的な操作方法と、よく使われるアプリケーションソフトの使い方は、社会人として必要不可欠なものである。幼児教育の現場においても、園だよりやクラスだよりなど、さまざまな印刷物を作成したり、教育上必要な情報収集などのスキルが求められる。本講ではまず、コンピューターのしくみ、コンピューター用語の解説、アプリケーションソフト（ワード、エクセル、インターネットエクスプローラー、メールソフトなど）について解説し、パソコンの基本的な操作法を学ぶ。次いで、ワードによるさまざまな文書の作成法を習得する。				
到 達 目 標	ワードの機能を使って、さまざまな文書を作成できるようにする。				
授 業 計 画	第 1 回	コンピューターのしくみ コンピューター用語の解説 アプリケーションソフトの解説（ワード、エクセル、インターネットエクスプローラー、メールソフト）			
	第 2 回	ワードの使い方 文字の入力、簡単な文章の作り方、整え方			
	第 3 回	ワードによる文書作成① 文字の設定			
	第 4 回	ワードによる文書作成② ワードアート			
	第 5 回	ワードによる文書作成③ ページ設定			
	第 6 回	ワードによる文書作成④ ハガキの設定			
	第 7 回	ワードによる文書作成⑤ 表の作り方			
	第 8 回	インターネットの使い方①「行き先を調べる」「路線を調べる」「地図を見る」			
	第 9 回	インターネットの使い方②「保育に使える素材を探し、保存する」			
	第 10 回	インターネットの使い方③ 素材を使って文書を作成する			
	第 11 回	メールの送受信とメールの書き方、写真の添付			
	第 12 回	多くの人に、一斉にメールを出す（メルマガ、お知らせメール）			
	第 13 回	ウィルスの予防と対策			
	第 14 回	クリスマスカードの作成			
	第 15 回	ポスターを作る			
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 実践的な授業なので、未経験者も経験者も、スキルアップを目指して積極的に取り組むこと。授業に出席することで、特に予習の必要はない。			復習：	覚えたことを繰り返し復習することは、スキルアップにつながることで、おすすめします。
成 績 評 価 の 方 法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題（８０％）、授業態度（２０％）				
教 科 書	とくになし。 授業に合わせた課題を教師パソコンに表示する。				
参 考 文 献	必要に応じて随時紹介する。				
注 意 事 項	授業に出席すること。				

授 業 科 目	英 語（１）		単位数	2	担当教員	中島 尚樹
講 義 の 内 容	この授業は、実践的な英語力の基礎を身につけるためのものです。日常生活の身近な話題に関して英語で理解、表現できるように、基本的な文法、語彙の学習から読解、リスニング、英作文に至るまでの発信型の練習をしていきます。また、月の名前の由来など文化的な話題や英語の素朴な疑問などにも触れたいと思っています。					
到 達 目 標	1年間の学習を通して、英語で簡単なコミュニケーションができるようになるのが目標ですが、具体的には、(1)BE 動詞の構文(現在と過去)を使えるようにする、(2)一般動詞の構文(現在と過去)を使えるようにする、そして、(3)日常生活の出来事を言い表すのに必要な基本的な語彙を身につけることです。					
授 業 計 画	第 1 回	授業説明		第 16 回	Unit7 今英語を勉強しています(聞き取り・文法) 現在進行形	
	第 2 回	Unit 1 日本から来ました(聞き取り・文法) Be 動詞の構文		第 17 回	Unit7 今英語を勉強しています(読解・作文) 現在進行形	
	第 3 回	Unit 1 日本から来ました(読解・作文) Be 動詞の構文		第 18 回	Unit7 今英語を勉強しています 過去進行形	
	第 4 回	Unit 2 あなたの兄弟ですか？(聞き取り・文法) Be 動詞の疑問文		第 19 回	Unit 8 2年間英語を勉強しました(聞き取り・文法) 一般動詞の過去形(規則動詞)	
	第 5 回	Unit 2 あなたの兄弟ですか？(読解・作文) Be 動詞の疑問文		第 20 回	Unit 8 2年間英語を勉強しました(読解・作文) 一般動詞の過去形(規則動詞)	
	第 6 回	Unit 3 去年アメリカにいました(聞き取り・文法) Be 動詞の過去形		第 21 回	Unit 9 家族で沖縄に行きました(聞き取り・文法) 一般動詞の過去形(不規則動詞)	
	第 7 回	Unit 3 去年アメリカにいました(読解・作文) Be 動詞の過去形		第 22 回	Unit 9 家族で沖縄に行きました(読解・作文) 一般動詞の過去形(不規則動詞)	
	第 8 回	Unit 4 壁にポスターがあります(聞き取り・文法) 存在を表す there 構文		第 23 回	まとめ：一般動詞の過去形 文法問題の練習と英作文	
	第 9 回	Unit 4 壁にポスターがあります(読解・作文) 存在を表す there 構文		第 24 回	Unit 10 今年の夏何をしますか？(聞き取り・文法) 未来を表す表現	
	第 10 回	まとめ：Be 動詞の現在形と過去形 文法問題の練習と英作文		第 25 回	Unit 10 今年の夏何をしますか？(読解・作文) 未来を表す表現	
	第 11 回	Unit 5 家で映画を見ます(聞き取り・文法) 一般動詞の現在形		第 26 回	Unit 11 だれと一緒にいきますか？(聞き取り・文法) 疑問詞の疑問文	
	第 12 回	Unit 5 家で映画を見ます(読解・作文) 一般動詞の現在形		第 27 回	Unit 11 だれと一緒にいきますか？(読解・作文) 疑問詞の疑問文	
	第 13 回	Unit 6 日曜日は早く起きますか？(聞き取り・文法) 一般動詞の現在形(疑問文)		第 28 回	Unit 12 赤ワインを一本ください(聞き取り・文法) 数量の表し方	
	第 14 回	Unit 6 日曜日は早く起きますか？(読解・作文) 一般動詞の現在形(疑問文)		第 29 回	Unit 12 赤ワインを一本ください(読解・作文) 数量の表し方	
	第 15 回	まとめ：一般動詞の現在形 文法問題の練習と英作文		第 30 回	まとめ：未来表現・疑問詞・数量表現 文法問題の練習と英作文	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 聞き取りの苦手な人には、テキストにCDが付いているので事前に一人でやってみることを勧めます。家でなら何度でもゆっくり聞き返すことができます。			復 習： 授業で出てきた構文がすべて理解できたか、どうか、また出てきた単語の意味がすべて分かるか、どうかを毎回確認すること。課題として出された英作文をやること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（70％）、課題（20％）、授業態度（10％）					
教 科 書	『Can-Do English 』（妻鳥千鶴子・松井こずえ・稲盛泰代 著、桐原書店）					
参 考 文 献						
注 意 事 項	この授業は英語で発信できる(英文が作れる)ようになるための総合的な授業で、読解を主とした授業ではありません。理解するだけでなく、英語が書けて、話せるようになるためには、その課で学んだ構文を毎回確実に覚えていくことが最も重要です。少しずつでもいいので、テキストとプリントに出てくる単語や例文を毎回必ず覚えていってください。当然のことながら、試験の結果はそういった努力に大きく左右されます。					

授 業 科 目	英 語（１）		単位数	2	担当教員	須釜 幸男
講 義 の 内 容	「英語とコンピュータが出来れば食いつぶぐれない」という台詞が一昔前によく語られましたが、グローバル化時代に入って、より切実なものになってきました。これからは一先ず、英語に対する得意・不得意、好き・嫌いは脇に置いておきましょう。この授業で、皆さんが英語に関わり親しみながら、そのイロハを体得していきましょう。					
到 達 目 標	到達目標は①「会話に花咲かせるためにも、英語圏の文化に注目」し、時事英語や映画（通販ブーム、個人情報漏洩、医療不信、民営化、派遣村、スマホ文化、格差社会、現代アート、税負担、仕事と家庭の両立、幸せのあり方など）を題材にします。②「社会トレンドを先取りしながら、あなたの好感度を高める」がゴールです。また仕事で必要な③「TOEIC®の基礎や効率的学習方法」についても、丁寧に解説していきます。					
授 業 計 画	第 1 回	前期ガイダンス		第 16 回	後期ガイダンス	
	第 2 回	TOEIC® Part 1 の解説・演習（基礎編）		第 17 回	TOEIC® Part 1 の解説・演習（応用編）	
	第 3 回	TOEIC® Part 2 の解説・演習（基礎編）		第 18 回	TOEIC® Part 2 の解説・演習（応用編）	
	第 4 回	TOEIC® Part 3 の解説・演習（基礎編）		第 19 回	TOEIC® Part 3 の解説・演習（応用編）	
	第 5 回	TOEIC® Part 4 の解説・演習（基礎編）		第 20 回	TOEIC® Part 4 の解説・演習（応用編）	
	第 6 回	TOEIC® Part 5 の解説・演習（基礎編）		第 21 回	TOEIC® Part 5 の解説・演習（応用編）	
	第 7 回	TOEIC® Part 6 の解説・演習（基礎編）		第 22 回	TOEIC® Part 6 の解説・演習（応用編）	
	第 8 回	TOEIC® Part 7 の解説・演習（基礎編）		第 23 回	TOEIC® Part 7 の解説・演習（応用編）	
	第 9 回	前期 上半期のまとめ		第 24 回	後期 上半期のまとめ	
	第 10 回	時事英語 ①		第 25 回	時事英語 ⑤	
	第 11 回	時事英語 ②		第 26 回	時事英語 ⑥	
	第 12 回	時事英語 ③		第 27 回	時事英語 ⑦	
	第 13 回	時事英語 ④		第 28 回	時事英語 ⑧	
	第 14 回	前期 下半期のまとめ		第 29 回	後期 下半期のまとめ	
	第 15 回	前期授業全体のまとめ		第 30 回	後期授業全体のまとめ	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： ・既習文法や語彙を確認・理解 ・既習テーマに関する新聞や雑誌をチェック ・これまでの学習範囲との位置付け ・自分の社会観や時代感覚を形成・展開		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 筆記試験（５０％）、授業態度（５０％） （注）単元の終了ごとに小テストをおこなう。					
教 科 書						
参 考 文 献						
注 意 事 項	英語力は授業だけでは向上しませんので、日頃からの意欲的な学習を期待します。また、何も文法や会話ばかりが英語力だとは限りません。例えば、英語圏の文化や歴史を知るのも、立派な英語力向上です。英語が苦手な人は、映画や旅行、食事、ファッション、海外事情といった側面からのアプローチをお勧めします。インターネットを存分に駆使して、海外の新しい情報を収集し、日本と海外の文化の違いに触れてみて下さい。					

授 業 科 目	英 語（２）		単位数	2	担当教員	須釜 幸男
講 義 の 内 容	英語（２）では、既習の英語（１）の基礎を土台にして、使える英語や英語文化を学んでいきます。そこで、皆さんが専門とする保育や子どもにテーマを合わせ、文学や映画、アニメーション、時事問題、会話などから英語を学習していきます。尚、受講に際しては、英語が苦手だから、不得意だからと心配することはありません。					
到 達 目 標	この授業の到達目標は①「国際化時代の保育士に求められる英語の素養や国際感覚の体得」で、②「堅苦しい英語ではなく、これまで身に付けてきた知恵や常識などをフルに活用」し、③「親しみながら英語を習得」していきます。					
授 業 計 画	第 1 回	前期ガイダンス		第 16 回	後期ガイダンス	
	第 2 回	幼児向け文学に触れる：欧州（基礎編）		第 17 回	幼児向け文学に触れる：欧州（応用編）	
	第 3 回	幼児向け文学に触れる：米国（基礎編）		第 18 回	幼児向け文学に触れる：米国（応用編）	
	第 4 回	幼児向け文学に触れる：日本（基礎編）		第 19 回	幼児向け文学に触れる：日本（応用編）	
	第 5 回	幼児向け映画を鑑賞する：欧州（基礎編）		第 20 回	幼児向け映画を鑑賞する：欧州（応用編）	
	第 6 回	幼児向け映画を鑑賞する：米国（基礎編）		第 21 回	幼児向け映画を鑑賞する：米国（応用編）	
	第 7 回	幼児向け映画を鑑賞する：日本（基礎編）		第 22 回	幼児向け映画を鑑賞する：日本（応用編）	
	第 8 回	まとめ		第 23 回	まとめ	
	第 9 回	保育をめぐる海外事情を知る：欧州（基礎編）		第 24 回	保育をめぐる海外事情を知る：欧州（応用編）	
	第 10 回	保育をめぐる海外事情を知る：米国（基礎編）		第 25 回	保育をめぐる海外事情を知る：米国（応用編）	
	第 11 回	保育をめぐる海外事情を知る：日本（基礎編）		第 26 回	保育をめぐる海外事情を知る：日本（応用編）	
	第 12 回	保育・子どもに用いる会話①（基礎編）		第 27 回	保育・子どもに用いる会話④（応用編）	
	第 13 回	保育・子どもに用いる会話②（基礎編）		第 28 回	保育・子どもに用いる会話⑤（応用編）	
	第 14 回	保育・子どもに用いる会話③（基礎編）		第 29 回	保育・子どもに用いる会話⑥（応用編）	
	第 15 回	まとめ		第 30 回	まとめ	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： ・既習文法や語彙を確認・理解 ・既習テーマに関する新聞や雑誌をチェック ・これまでの学習範囲との位置付け ・自分の社会観や時代感覚を形成・展開		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 筆記試験（５０％）、授業態度（５０％） （注）単元の終了ごとに小テストをおこなう。					
教 科 書						
参 考 文 献						
注 意 事 項	英語力は授業だけでは向上しませんので、日頃からの意欲的な学習を期待します。また、何も文法や会話ばかりが英語力だとは限りません。例えば、英語圏の文化や歴史を知るのも、立派な英語力向上です。英語が苦手な人は、映画や旅行、食事、ファッション、海外事情といった側面からのアプローチをお勧めします。インターネットを存分に駆使して、海外の新しい情報を収集し、日本と海外の文化に違いに触れてみて下さい。					

授 業 科 目	音 楽（１）基 礎 音 楽		単位数	2	担当教員	平島 美保
講 義 の 内 容	幼児教育者としての必要な音楽の基礎知識を学ぶと共に、こどもたちに音楽を体験させるために必要な技術を身に付ける。机上における学習だけでなく「ダルクローズリトミック」という手法を持ちながら、音楽の諸要素を体得する。また、音楽は楽しいという気持ちをこどもたちに伝えることが出来る心やスキルの研究を行う。					
到 達 目 標	・音楽理論を学び、音楽をより深く理解し、自分の音楽作りに役立たせる。 ・歌唱を通してブレスを意識しフレーズを感じ表現する力を培う。 ・こどもたちが歌いやすい伴奏法を身に付ける。 ・出来る出来ないの追求ではなく、それぞれの課題に向き合いチャレンジしながら自分を表現する「心」と「身体」作り。					
授 業 計 画	第 1 回	楽譜の読み方① 楽典を中心に 「譜表等」			第 16 回	メロディの即興奏① 「黒鍵 5 音階」を用いて
	第 2 回	楽譜の読み方② 楽典を中心に 「音階等」			第 17 回	メロディの即興奏② 「全音音階」を用いて
	第 3 回	楽譜の読み方③ リズムを中心に 「音符、休符等」			第 18 回	長 3 和音と短 3 和音について
	第 4 回	楽譜の読み方④ リズムを中心に 「パターン等」			第 19 回	コードネームについて
	第 5 回	楽譜の読み方⑤ リズムを中心に「拍の分割等」			第 20 回	主要 3 和音の中の I・V(7) について
	第 6 回	保育現場の歌唱について① 「拍子と指揮(1)」			第 21 回	主要 3 和音の中の I、V(7)を用いた簡単な伴奏法
	第 7 回	保育現場の歌唱について② 「拍子と指揮(2)」			第 22 回	主要 3 和音の中の I、V(7)を用いた伴奏法の発表
	第 8 回	保育現場の歌唱について③ 「ブレス、強弱について」			第 23 回	主要 3 和音について② I・IV・V(7)
	第 9 回	調と音階について①			第 24 回	主要 3 和音について① I・IV・V(7)を用いた簡単な伴奏法
	第 10 回	調と音階について②			第 25 回	主要 3 和音を用いた伴奏法の発表
	第 11 回	絵譜の作成と打楽器による表現①			第 26 回	伴奏形について
	第 12 回	絵譜の作成と打楽器による表現②			第 27 回	様々な伴奏形を生かした伴奏法について
	第 13 回	グループによる簡単な合奏の創作①			第 28 回	主要 3 和音を用いたメロディの即興奏①
	第 14 回	グループによる簡単な合奏の創作②			第 29 回	主要 3 和音を用いたメロディの即興奏の発表
	第 15 回	創作した合奏の発表とディスカッション			第 30 回	まとめ
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 特に指示がない限り、予習をする必要はありませんが、シラバスを参考にしてテキストを読んでおくことは大切です。			復習： 授業で行ったことは課題があってもなくても、必ず復習してください。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 発表（50％）、実技（30％）、授業態度（20％）					
教 科 書	『知っておきたいおとなのための音楽知識』（カワイ出版）					
参 考 文 献	必要に応じて資料を配布します。					
注 意 事 項	授業は積み重ねによる内容で行います。授業内で把握できなかったことはそのままにしないようにしましょう。質問を歓迎します。 授業では5線ノートを使用します。準備して臨んでください。					

授 業 科 目	図 画 工 作		単位数	2	担当教員	小口 偉
講 義 の 内 容	乳幼児期の造形的表現方法は、発達段階を踏まえ、適切な素材提供をすることが、活動に広がりとお行きをもたらす。子どもの活動をもとにした活動体験をすることから、「素材、道具について」の造形的側面と、「乳幼児の表現活動について」の心身の発達における側面から、造形を通した表現について理解、関心を深める。					
到 達 目 標	保育所、幼稚園における造形的表現活動を援助していくための視点と方法を身につけ、子どもたちと豊かな触れ合いが出来る保育者となる基礎をつくる。 ① 子どもたちの表現活動の意義をとらえる。 ② 年齢やクラス編成ごとに変化する活動内容を理解し、適切な環境づくりをするための基礎を養う。 ③ 子どもたちと活動が楽しめる技術、視点、方法を身につける。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション 授業の内容説明			第 16 回	表現について 1 「モチーフを探そう」 表現のきっかけとなる装置をつくる
	第 2 回	素材体験 1 紙について			第 17 回	表現について 2 「具体化しよう」 テーマや想いを形や色に置き換える
	第 3 回	素材体験 2 絵具について			第 18 回	表現について 3 「発表会」 テーマをもとに何をつくったか発表
	第 4 回	素材体験 3 クレヨン、パスについて			第 19 回	合同制作について 個人制作と合同的制作の違いと意義ついて学ぶ
	第 5 回	素材体験 4 粘土について			第 20 回	紙版画 1 版づくり
	第 6 回	道具体験 1 ハサミについて			第 21 回	紙版画 2 印刷
	第 7 回	道具体験 2 ステープラーについて			第 22 回	ポップアップカード 1
	第 8 回	テープ、のり、などの接着について			第 23 回	ポップアップカード 2
	第 9 回	応用 1 構成遊びについて 色画用紙での構成遊び			第 24 回	工作 2 まわるおもちゃ
	第 10 回	応用 2 与えられたきっかけから画面構成			第 25 回	工作 3 風で遊ぶおもちゃ
	第 11 回	応用 3 立体の扱いについて「紙立体」			第 26 回	工作 4 いらないばあ
	第 12 回	応用 4 モチーフを描く			第 27 回	正月遊び カルタ、たこづくり
	第 13 回	色彩について			第 28 回	共同制作について
	第 14 回	工作 1 動かして遊ぶおもちゃ			第 29 回	乳幼児期の造形表現について
	第 15 回	様々な技法遊び			第 30 回	まとめ 授業の振り返り、レポート作成
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：子どもの造形的表現に関心を向ける。 身の回りの自然や造形物に関心を向ける。			復習：授業中の制作物について振り返り、ねらいや制作手順に関することなどをノートにまとめておく。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（20％）、作品（40％）、授業態度（40％）					
教 科 書	『楽しい造形表現』（子ども造形表現研究会、圭文社）					
参 考 文 献	『保育園・幼稚園の造形あそび』（鮫島良一・馬場千晶、成美堂出版）、 『造形と子ども子どもの造形表現ドキュメント』（加藤裕之・鮫島良一・菅原順一、すずき出版）					
注 意 事 項	出来映えは重視しません。誠実に、積極的に取り組むこと。 ※ 作品制作に関わる道具、材料費は個人負担です。（年間3500円） ※ スケッチブック、色画用紙、絵具、筆、パレットは上記代金の中から学校で一括購入します。					

授 業 科 目	図 画 工 作		単位数	2	担当教員	市瀬 恭子	
講 義 の 内 容	子どもたちの造形活動を理解し、支援するために必要な造形の基礎技能の習得を目的とする。						
到 達 目 標	１．造形活動を通して感性を磨き、創造活動への関心を深める。 ２．美しさやよさを大切にする気持ち、自発的に取り組む態度を培う。 ３．子ども一人ひとりの表現をしっかりと受け止められる保育者になるための実践力を身につける。						
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション (授業の主旨説明、自己紹介カードの作成)			第 16 回	工芸、工作 立体表現（彫塑について）	
	第 2 回	デザイン レタリングの基礎、活用			第 17 回	紙粘土工作 1	
	第 3 回	描く表現の基礎 (形のとらえ方、描画材料)			第 18 回	紙粘土工作 2	
	第 4 回	描く表現の基礎 (鉛筆デッサン)			第 19 回	紙粘土工作 3	
	第 5 回	描く表現の基礎 (クレヨン画)			第 20 回	紙粘土工作 4	
	第 6 回	デザイン いろいろな技法 1			第 21 回	紙工作 ポップアップカード 1 しゅくみ	
	第 7 回	デザイン いろいろな技法 2			第 22 回	紙工作 ポップアップカード 2 せいぞく	
	第 8 回	デザイン 技法のまとめ 活用方法			第 23 回	紙工作 ポップアップカード 3 せいぞく	
	第 9 回	色彩について 色の混合 色相環			第 24 回	紙工作 ポップアップカード 4 せいぞく	
	第 10 回	色彩について 絵の具を使って			第 25 回	グループ制作 壁面構成 1	
	第 11 回	観察して描く 1			第 26 回	グループ制作 壁面構成 2	
	第 12 回	観察して描く 2			第 27 回	グループ制作 壁面構成 3	
	第 13 回	観察して描く 3			第 28 回	造形あそび	
	第 14 回	身近なものに描く 石ころアート 1			第 29 回	造形あそび	
	第 15 回	身近なものに描く 石ころアート 2			第 30 回	まとめと自己評価	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 次回の画材準備、 制作のイメージを組み立てる				復習：		
成績評価の 方 法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（３０％）、作品（２０％）、授業態度（５０％）						
教 科 書	『楽しい造形表現』（子ども造形表現研究会、圭文社）						
参 考 文 献	『幼稚園教育要領、保育指針』（チャイルド社）						
注 意 事 項	作品重視ではなく、美術が好きになれるよう、分かりやすく、楽しく、身の回りのおもしろさに気づくような授業展開を考えています。自発的、誠実に授業に取り組む態度を望みます。 ※制作に関する用具や材料費は個人負担です。						

授 業 科 目	幼 児 体 育		単位数	2	担当教員	茗井 香保里
講 義 の 内 容	人生の土台づくりにあたる幼児期に、正しい動き方を身につけたり、運動することの楽しさを味わわせたりすることは、幼児の運動経験や健康生活を豊かに充実させることはもとより、これからの超高齢社会を健康に且つ高い質を保って生活するための基礎となる。それらをふまえ、本講義では、幼児の発育発達の特性と幼児の動きづくりと運動あそびの重要性を理解することを目的とする。					
到 達 目 標	・ 様々な遊具の特性を知り、それらを活用した運動遊びが実践できるようにする ・ 巧技台の特性を理解し正しい動き方を身に付ける ・ 目的にあった運動遊びや身体表現活動を開発できるようにする					
授 業 計 画	第 1 回	基本の運動			第 16 回	自分の体を知る
	第 2 回	簡単なルールのある運動あそび			第 17 回	心と身体の解放
	第 3 回	フープを使った運動あそび			第 18 回	「曲線」の身体表現
	第 4 回	短縄を使った運動あそび			第 19 回	「直線」の身体表現
	第 5 回	長縄を使った運動あそび			第 20 回	「曲線」＋「直線」の身体表現
	第 6 回	ボールを使った運動あそび			第 21 回	働く乗り物
	第 7 回	生活用品を使った運動あそび			第 22 回	はらぺこあおむし
	第 8 回	マットを使った運動あそび			第 23 回	「生涯健康」と運動遊び
	第 9 回	文献を使って運動遊びを調べる			第 24 回	「生涯健康」と運動遊び
	第 10 回	簡単なルールのある運動あそび を創る			第 25 回	作品の創作（１） 動き
	第 11 回	フープを使った運動あそびを創る 短縄を使った運動あそびを創る			第 26 回	作品の創作（２） 衣装
	第 12 回	長縄を使った運動あそびを創る ボールを使った運動あそびを創る			第 27 回	作品の創作（３） 音
	第 13 回	マットを使った運動あそびを創る 生活用品を使った運動あそびを創る			第 28 回	作品を演じるとは、作品を観るとは
	第 14 回	「生涯健康」と運動遊び			第 29 回	作品発表会
	第 15 回	まとめ			第 30 回	まとめ
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 教科書をしっかり読むこと。また、「運動遊び」を実践し、その体験からオリジナルな「運動遊び」の創作を行うので、運動遊びに関する文献を読んでおくこと。				復習：	
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（３０％）、課題（３０％）、授業態度（４０％）					
教 科 書	『生涯健康をめざした運動あそび』（茗井香保里、推敲舎）					
参 考 文 献	『子どもの運動・表現あそび～動きを通して育む心とからだ～』（宮下恭子他、大学図書出版）					
注 意 事 項	出席重視。 体操着を着用のこと。フード付上着、ジーンズパンツなどは避けて下さい。 運動靴をはき、裸足、スリッパ履きでは、受講しないこと。 意欲、関心、はプラスポイントとする。					

授 業 科 目	社 会 福 祉		単位数	2	担当教員	志濃原 亜美
講 義 の 内 容	この授業では、福祉専門職である保育士が学ぶべき社会福祉の基礎的な知識を習得することをねらいとする。子どもの福祉のみならず、現代社会のニーズに即したあらゆる人々のウェルビーイング（福祉）をいかに実現させるかという視点に立ち広い視野で社会福祉について学ぶ。					
到 達 目 標	保育をめぐる課題だけではなく、広い視点での人間の生活課題を学び、子どもと保護者の直面する生活課題について理解するとともに、それらを解決していく方法についての基礎を知る。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション				
	第 2 回	保育と社会福祉				
	第 3 回	社会福祉の概念				
	第 4 回	社会保障制度①				
	第 5 回	社会保障制度②				
	第 6 回	社会福祉の法制度（高齢者福祉を中心に）				
	第 7 回	社会福祉の法制度（障害者福祉を中心に）				
	第 8 回	社会福祉の実施機関と行財政				
	第 9 回	中間レポート				
	第 10 回	社会福祉の専門職と倫理				
	第 11 回	ソーシャルワークの意味と方法				
	第 12 回	福祉サービスの利用支援と第三者評価				
	第 13 回	権利擁護と苦情解決				
	第 14 回	障害者（V T R）				
	第 15 回	まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 次回学ぶ箇所について、教科書を読んでおく。			復習： 授業の中で、理解が難しかったものについて、教科書等で確認すること。 その他、指定する。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 筆記試験（50％）、レポート（30％）、課題（10％）、授業態度（10％） （必要に応じて小テストを行う）					
教 科 書	『保育と社会福祉』（橋本好市・宮田徹編集、(株)みらい）					
参 考 文 献	適宜紹介する					
注 意 事 項	新聞やニュースなどを通じて社会福祉に関心を持つこと。 教員が作成したプリントを整理するためのファイルを用意しておくこと。					

授 業 科 目	社 会 福 祉		単位数	2	担当教員	大澤 朋子
講 義 の 内 容	現代社会に生きる私たちは生活上の様々な問題を抱えるが、その解決手段のひとつに社会福祉がある。具体的な現代の課題を取り上げながら、社会福祉はどのようにその解決に取り組んでいるのかを学ぶとともに、保育士としてどのような支援ができるのかを学ぶ。					
到 達 目 標	保育士として身につけるべき社会福祉の基礎的な知識・ソーシャルワークの視点を習得する。					
授 業 計 画	第 1 回	社会福祉をとりまく環境				
	第 2 回	社会福祉の考え方				
	第 3 回	社会福祉の歴史				
	第 4 回	社会福祉のしくみ				
	第 5 回	社会福祉サービス利用のしくみ				
	第 6 回	社会福祉の機関と施設				
	第 7 回	社会保障				
	第 8 回	高齢者福祉				
	第 9 回	障害福祉				
	第 10 回	地域福祉				
	第 11 回	利用者保護				
	第 12 回	社会福祉援助技術				
	第 13 回	社会福祉の担い手				
	第 14 回	他分野との連携・これからの保育士				
	第 15 回	まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 授業で学んだ現代社会の問題を、実際に新聞等から情報収集し、社会問題に対する関心を持ち続けること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（70％）、レポート（20％）、授業態度（10％）					
教 科 書	『新・プリマーズ／保育／福祉 社会福祉 第3版』（石田慎二・山縣文治、ミネルヴァ書房）					
参 考 文 献						
注 意 事 項						

授 業 科 目	児 童 家 庭 福 祉		単位数	2	担当教員	志濃原 亜美
講 義 の 内 容	児童家庭福祉の歴史的変遷と現代社会における児童家庭福祉の意義を理解する。そのうえで、児童家庭福祉の制度や実施体系など具体的なことを学ぶ。 また、少子化・母子保健・児童虐待・社会的養護・障害のある児童の対応などをはじめとする児童家庭福祉の現状と課題について理解し、特に児童家庭福祉と保育の関連性や児童の権利擁護などについて理解を深める。					
到 達 目 標	児童に関する法や施設など基本的なことを理解する。また、児童をとりまく問題についての理解を深め、それらの早期発見の方法や解決への道筋を知る。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション				
	第 2 回	児童家庭福祉に関する法律①				
	第 3 回	児童家庭福祉に関する法律②				
	第 4 回	児童に関する権利指導の流れ				
	第 5 回	児童虐待（V T R）				
	第 6 回	児童家庭福祉の行政機関				
	第 7 回	児童家庭福祉専門職としての保育士				
	第 8 回	児童福祉施設及び里親の概要①				
	第 9 回	児童福祉施設及び里親の概要②				
	第 10 回	中間レポート				
	第 11 回	児童家庭福祉の歴史①				
	第 12 回	児童家庭福祉の歴史②（V T R）				
	第 13 回	これからの児童家庭福祉				
	第 14 回	里親（V T R）				
	第 15 回	まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 指定する。			復習： 授業の中で、理解が難しかったものについて、教科書等で確認すること。 その他、指定する。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 筆記試験（50％）、レポート（30％）、課題（10％）、授業態度（10％） （必要に応じて小テストを行う）					
教 科 書	『新 保育ライブラリ 児童家庭福祉』（北大路書房）					
参 考 文 献	『最新保育資料集 2015』（ミネルヴァ書房）					
注 意 事 項	普段から新聞・ニュースその他のメディアを通して児童家庭福祉の問題や課題について関心をもつこと。 教員が作成したプリントを整理するためのファイルを用意しておくこと。					

授 業 科 目	児 童 家 庭 福 祉	単 位 数	2	担 当 教 員	大澤 朋子
講 義 の 内 容	現代の子どもをとりまく環境を踏まえ、児童の家庭を含めて支援する児童家庭福祉の意義や歴史、制度の体系、具体的活動を学ぶ。社会福祉の諸制度と関連付けながら、児童家庭福祉の意義、保育士に期待される役割等について学ぶ。				
到 達 目 標	保育士としての業務のうち、とくに家庭支援・保護者支援についての基本的な知識と視点を身につける。				
授 業 計 画	第 1 回	児童家庭福祉の理念と概念			
	第 2 回	家庭をとりまく状況			
	第 3 回	社会的養護			
	第 4 回	児童福祉施設の役割と機能			
	第 5 回	保育問題と保育サービス			
	第 6 回	子育て支援			
	第 7 回	児童家庭福祉の法制度と行政のしくみ			
	第 8 回	児童家庭福祉の財政と実施機関			
	第 9 回	児童家庭福祉の専門職			
	第 10 回	児童家庭福祉の歴史			
	第 11 回	健全育成サービスと母子保健サービス			
	第 12 回	障害児福祉と少年非行への対応			
	第 13 回	児童家庭福祉でのソーシャルワークとネットワーク			
	第 14 回	世界の児童家庭福祉			
	第 15 回	まとめ			
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習：	常に変動する保育制度に対応するため、日頃からニュース等での情報の補足を心掛けること。
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（70％）、レポート（20％）、授業態度（10％）				
教 科 書	『シードブック 子ども家庭福祉 第2版』（浅井春夫編著、建帛社）				
参 考 文 献					
注 意 事 項					

授 業 科 目	音 楽 I（ピ ア ノ）		単位数	2	担当教員	高崎和子・大輪公亮 他
講 義 の 内 容	この授業では、幼児教育または保育の現場で必要となる基本的なピアノの演奏技術と表現力を習得する。					
到 達 目 標	1.後期試験で、練習曲 25 番以降またはそのレベルに準ずる曲を 1 曲演奏する。 2.後期試験で、童謡曲集から 3 曲を提出し当日指定された 1 曲を演奏する。 3.上記 1.2.をクリアした者に単位が与えられる（1 年で単位修得できない者は再履修する）。 4.童謡は数曲～10 曲程、学習することが望ましい。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション		第 16 回	曲目番号 15～17	
	第 2 回	曲目番号 1		第 17 回	〃 18～20（童謡テキスト併用）	
	第 3 回	〃 2		第 18 回	〃 21～23（童謡テキスト併用）	
	第 4 回	〃 3		第 19 回	〃 24～26（童謡テキスト併用）	
	第 5 回	〃 4		第 20 回	〃 27～29（童謡テキスト併用）	
	第 6 回	〃 5		第 21 回	〃 30～32（童謡テキスト併用）	
	第 7 回	〃 6		第 22 回	〃 33～35（童謡テキスト併用）	
	第 8 回	〃 7		第 23 回	〃 36～38（童謡テキスト併用）	
	第 9 回	〃 8		第 24 回	〃 39～41（童謡テキスト併用）	
	第 10 回	〃 9		第 25 回	〃 42～44（童謡テキスト併用）	
	第 11 回	〃 10		第 26 回	〃 45～48（童謡テキスト併用）	
	第 12 回	〃 11		第 27 回	追加曲 1	
	第 13 回	〃 12		第 28 回	追加曲 2, 3	
	第 14 回	〃 13		第 29 回	追加曲 4, 5	
	第 15 回	〃 14		第 30 回	テストのリハーサル	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 一定の拍子を取りながらの練習曲のリズム打ち（片手ずつ～両手）を鍵盤外で行う。一定の拍子を取りながらのドレミ読みを行う。			復習： 学習曲の再練習。なるべく鍵盤を見ずに出されている音と楽譜が一致しているかどうかを確認しながら遅いテンポ（1 拍＝60 以下）で弾く。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 実技（80％）、授業態度（20％）					
教 科 書	『幼稚園教諭・保育士を目指す人のための新しいピアノ教則本』（田口・高崎・大輪編、カワイ出版） 『実用こどものうた』（田口・高崎編、カワイ出版）					
参 考 文 献	授業内で指示					
注 意 事 項	個人レッスンが原則である。与えられた課題を次のレッスンまでに十分練習しておくこと。 学生の進度に応じて後期は童謡曲集を併用する。1 年間で終了不可な学生は 2 年次に残りを続けて履修する。					

授 業 科 目	音 楽 II（ピ ア ノ）		単位数	2	担当教員	高崎和子・大輪公彦 他
講 義 の 内 容	音楽Ⅰ（ピアノ）で習得したピアノの基本奏法の上に、更に高度な演奏技術と応用力を身につける。 授業では、童謡をはじめ保育の現場で役に立つレパートリーを学びまた、コードネームの学習も通して歌や合奏のピアノ伴奏が余裕を持ってできるよう、主に『実用こどものうた』をベースに授業を進めていく。					
到 達 目 標	1. テキスト中、使用頻度の高い楽曲から学習することが望ましい。 2. 後期試験ではテキスト中から 5 曲を提出し、中 1 曲を各自選択、2 曲は試験官が指定し、全 3 曲を暗譜で弾き歌いする。 3. 声楽の試験ではないので、伴奏の技能を高め、試験に臨むことが望ましい。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション		第 16 回	『実用こどものうた』 p35-37	
	第 2 回	『実用こどものうた』 P8-9		第 17 回	『実用こどものうた』 p38-40	
	第 3 回	『実用こどものうた』 p10-11		第 18 回	『実用こどものうた』 p41-43	
	第 4 回	『実用こどものうた』 p12-13		第 19 回	『実用こどものうた』 p44-46	
	第 5 回	『実用こどものうた』 p14-15		第 20 回	『実用こどものうた』 p47-49	
	第 6 回	『実用こどものうた』 p16-17		第 21 回	『実用こどものうた』 p50-52	
	第 7 回	『実用こどものうた』 p18-19		第 22 回	『実用こどものうた』 p53-55	
	第 8 回	『実用こどものうた』 p20-21		第 23 回	『実用こどものうた』 p56-58	
	第 9 回	『実用こどものうた』 p22-23		第 24 回	『実用こどものうた』 p59-61	
	第 10 回	『実用こどものうた』 p24-25		第 25 回	『実用こどものうた』 p62-64	
	第 11 回	『実用こどものうた』 p25-26		第 26 回	『実用こどものうた』 p65-67	
	第 12 回	『実用こどものうた』 p27-28		第 27 回	『実用こどものうた』 p68-70	
	第 13 回	『実用こどものうた』 p29-30		第 28 回	『実用こどものうた』 p71 及び他楽曲の復習	
	第 14 回	『実用こどものうた』 p31-32		第 29 回	『実用こどものうた』 前後期の復習	
	第 15 回	『実用こどものうた』 p33-34(まとめ)		第 30 回	試験のリハーサル	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 各楽曲の旋律線及び伴奏パートのリズム打ち及びドレミによる声楽パートの歌唱練習。			復習： 声楽パートの旋律を書き取る練習を行うことが望ましい。 伴奏パート、特にへ音記号が確実に読め、鍵盤と一致しているかを確認しながら再練習。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 実技（80％）、授業態度（20％）					
教 科 書	『実用こどものうた』（田口・高崎編、カワイ出版）					
参 考 文 献	授業内で指示					
注 意 事 項	電子キーボードでの演習が中心となるため、毎日の練習の積み重ねが上達のポイントとなる。コードネーム等に関する参考文献は、その場に応じてサブテキストとしてコピーを配布する。 授業中の私語・飲食は厳しく注意する。キーボードの上に飲食物を置かないこと。これらの注意に従わない者は学生証を提示の上、退室を命ずることがある。					

授 業 科 目	国 語 教 育		単位数	2	担当教員	秋山 智美
講 義 の 内 容	幼児のことばの能力や想像力、情緒や道徳といったものは初等国語教育で培われる。近年、国語力が低下しているといわれているが、幼児期から国語に触れる機会をできるだけ多く作ることが大切である。よって、保育に携わる者は幼児に対して適切な方法で、自然と国語力が身につくように支援することが重要である。 本講義では、具体的な事例を挙げて幼児に対してどのような国語教育をすべきか、またどのような支援や教材が望ましいかを考える。加えて、小学校国語教育についても触れる。					
到 達 目 標	1. 保育者として、国語教育の知識を確かなものとする。 2. 国語教育が幼児に与える意義、効果を考え、望ましい発達にはどのような教材がよいか計画、実践する。 3. 授業を通じ、保育者として常に自己研鑽する姿勢を身につける。					
授 業 計 画	第 1 回	国語教育の理論①				
	第 2 回	国語教育の理論②				
	第 3 回	国語教育の理論③				
	第 4 回	国語教育の実践①				
	第 5 回	国語教育の実践②				
	第 6 回	国語教育の実践③				
	第 7 回	演習①(読み・書き)				
	第 8 回	演習②(読み・書き)				
	第 9 回	演習③(読み・書き)				
	第 10 回	演習④(読み・書き)				
	第 11 回	教材研究①(製作)				
	第 12 回	教材研究②(製作)				
	第 13 回	教材研究③(製作)				
	第 14 回	教材研究(グループ発表)				
	第 15 回	海外の教育事例				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 教科書を一読する。			復習： 授業後、翌週の授業までに課題を提出し、演習した知識を再確認する。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題（３０％）、作品（３０％）、発表（３０％）、授業態度（１０％）					
教 科 書	『学生のための文章表現法』（秋山 智美、八千代出版）					
参 考 文 献	『小学校学習指導要領』（文部科学省、財務省印刷局） ※その他、授業内で必要に応じて適宜、紹介する。					
注 意 事 項	講義のほか、受講者自身で教材研究（絵本や紙芝居の制作）をおこなう。 ⇒各自、必要な道具(画用紙や色ペン)を準備しておいてほしい。					

授 業 科 目	数 量 教 育		単位数	2	担当教員	中村 陽一
講 義 の 内 容	幼児の数に対する感覚は、日常生活の体験を通じて培われる。そのため、幼児が生活体験の中から、自然に数に対する興味や関心・感覚が身につくような環境構成と援助が必要である。本講は、幼児の興味や関心を引き出すための保育者の役割について考える。小学校算数科の概要と、幼児教育との連続性についても学ぶ。					
到 達 目 標	1．子どもがどうやって数を知り興味を持つかを理解する。 2．子どもが生活のなかで数的感覚を身につけるための、適切な環境設定について理解する。 3．小学校算数科の概要を学び、数に対する学び連続性の大切さを理解する。					
授 業 計 画	第 1 週	子どもと数量環境－幼稚園教育要領に示されている数量と図形の取り扱い				
	第 2 週	保育内容と数量教育－保育内容における数量教育の位置づけ				
	第 3 週	子どもと数量理解①－子どもは数をどのように覚えるか				
	第 4 週	子どもと数量理解②－子どもが生活で出会う数と種類				
	第 5 週	子どもの生活と遊びのなかの数①－3 歳児の事例				
	第 6 週	子どもの生活と遊びのなかの数②－4 歳児の事例				
	第 7 週	子どもの生活と遊びのなかの数③－5 歳児の事例				
	第 8 週	小学校算数科の目標と内容①－第 1 学年				
	第 9 週	小学校算数科の目標と内容②－第 2 学年				
	第 10 週	小学校算数科の目標と内容③－第 3 学年				
	第 11 週	小学校算数科の目標と内容④－第 4 学年				
	第 12 週	小学校算数科の目標と内容⑤－第 5 学年				
	第 13 週	小学校算数科の目標と内容⑥－第 6 学年				
	第 14 週	子どもの学びの連続性・幼児の数量教育と小学校算数科教育の連続性について				
	第 15 週	授業の振り返りとまとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 授業の終わりに次回の内容と予習の方法について伝える。			復 習： 授業中に示す重要事項中心に復習すること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（70％）、授業態度（30％）					
教 科 書	『幼稚園教育要領・保育所保育指針（原本）』（文部科学省・厚生労働省、チャイルド本社） 『幼稚園教育要領解説』（文部科学省、フレーベル館） 『保育所保育指針解説書』（厚生労働省、フレーベル館） 『小学校学習指導要領』（文部科学省、東京書籍）					
参 考 文 献	必要に応じて紹介する。					
注 意 事 項						

授 業 科 目	数 量 教 育		単位数	2	担当教員	星野 治
講 義 の 内 容	この授業では、身の回りのあらゆる事象を「数」・「量」・「形」の観点から見つめ直すことを通して、「数」・「量」・「形」の意味するものや、「数」・「量」・「形」の取り扱いかたを、改めて確認します。					
到 達 目 標	・私たちの社会は、「数」・「量」・「形」を抜きにしては成り立たないことを、再確認していただきます。 ・子供たちが幼少時から「数」・「量」・「形」に慣れ親しんでいくことは、彼らの社会感覚の形成過程に際して重要な鍵の一つとなるであろうことを、各人なりに理解していただきます。 ・幼児の将来の学校活動（例：算数授業への参加など）や社会活動（例：買い物など）に無理なく結び付けられるような、数量教育指導のありかたを考えていただきます。					
授 業 計 画	第 1 回	数の面白さ・不思議さ “数” のもつ魅力を概観します。				
	第 2 回	言葉としての数 “数” が言葉の一種であることを再確認します。				
	第 3 回	数の種類 実際に使われている、いろいろな“数”を概観します。				
	第 4 回	数量と図形との関係 “かず” と “かたち” との対応を概観します。				
	第 5 回	生活の中の数・量・形 日常の諸活動の中に登場する“数”を概観します。				
	第 6 回	遊びの中の数・量・形① いろいろな遊びの中に垣間見られる“数”を概観します。				
	第 7 回	数・量に関する先人の知恵① 実用されている様々な“単位”の意味を概観します。				
	第 8 回	数・量に関する先人の知恵② これまでに考案されてきた、実用的な数値処理手法について概観します。				
	第 9 回	文芸作品の中の数・量・形① “数”の観点から、往年の名作（主に文章作品）を鑑賞し直します。				
	第 10 回	文芸作品の中の数・量・形② “数”の観点から、往年の名作（主に映画作品）を鑑賞し直します。				
	第 11 回	小・中学校の算数・数学① 文部科学省の学習指導要領のうち、小学校の算数に関する内容を概観します。				
	第 12 回	小・中学校の算数・数学② 文部科学省の学習指導要領のうち、中学校の数学に関する内容を概観します。				
	第 13 回	遊びの中の数・量・形② 数遊びそのものを通して、“数”の面白さを概観します。				
	第 14 回	幼児教育における数・量・形 未就学児にとって必要な“数”とは何かを、改めて見直します。				
	第 15 回	全体のまとめ 「数」・「量」・「形」に対する教育のありかたを、各自なりに整理します。				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 予習が必要とされる事項については、担当教員がそのつど説明します。			復習： 復習が必要とされる事項については、担当教員がそのつど説明します。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（８０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書						
参 考 文 献	『幼稚園教育要領』（文部科学省）、『小学校学習指導要領』（文部科学省）、『中学校学習指導要領』（文部科学省）					
注 意 事 項	・授業は講義形式ですが、解題一辺倒だけではなく、算数（・数学）に関する話題や文芸作品についても取り扱います。 ・小学校レベルの算数問題は、一見単純そうですが、いざ解こうとすると手こずることが多いものです。決して油断しないでください。 ・他の授業で使用する教科書や参考文献を、この授業でも使用する場合があります。 ・この授業で取り扱う話題は、数学上の話題とは異なり、解答が一つだけであるとは限りません。また、個々の話題の内容を理解するには、幅広い背景知識が求められます。“自分自身ならばこう考える”という能動的な態度で、授業に参加してください。					

授 業 科 目	子 ど も の 食 と 栄 養		単位数	2	担当教員	平山素子・堀美稚
講 義 の 内 容	子どもを取り巻く食環境を把握し、胎児期から思春期の発育発達と栄養・食事との関係を理解する。子ども一人ひとりの心理状態や食事の摂取状況を観察し、適切な食事の提供と介助、さらには食生活のあり方について援助できる力を身につけることを目的とする。					
到 達 目 標	子どもの発育・発達と食生活・栄養について理解する 月年齢に見合った適切な食事提供と介助を行う力を身につける 自分自身の望ましい食生活の構築に取り組む					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション、調理室の使い方			第 16 回	調理実習・・・離乳期④
	第 2 回	子どもの発育・発達と栄養			第 17 回	保育現場における食事の様子（ビデオ）を通して考える
	第 3 回	授乳期の栄養① 母乳栄養			第 18 回	幼児期の栄養①成長と食事・栄養
	第 4 回	授乳期の栄養② 人工栄養			第 19 回	幼児期の栄養②保護者・保育士の悩みを通して考える
	第 5 回	調理実習・・・授乳期①			第 20 回	児童福祉施設の食事と栄養
	第 6 回	調理実習・・・授乳期②			第 21 回	調理実習・・・幼児食（弁当）①
	第 7 回	離乳の必要性について			第 22 回	調理実習・・・幼児食（弁当）②
	第 8 回	離乳期の栄養①（5,6 か月頃）			第 23 回	体調不良時の食事と栄養
	第 9 回	離乳期の栄養②（7,8 か月頃）			第 24 回	障害児の食事と栄養
	第 10 回	食物アレルギーについて			第 25 回	調理実習・・・幼児食（行事食）①
	第 11 回	調理実習・・・離乳期①			第 26 回	調理実習・・・幼児食（行事食）②
	第 12 回	調理実習・・・離乳期②			第 27 回	学童期の食事と栄養
	第 13 回	離乳期の栄養③（9～11 か月頃）			第 28 回	妊娠・授乳期の食事と栄養
	第 14 回	離乳期の栄養④（12～18 か月頃）			第 29 回	食事のマナー・箸の使い方等について
	第 15 回	調理実習・・・離乳期③			第 30 回	食べることの意義と栄養・食品の知識
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 教科書に目を通す			復習： 調理実習毎に以下をレポート作成し提出する ・調理実習の結果・考察をまとめる ・講義内容をまとめる ・テーマについて調べる		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（60％）、授業態度（40％）					
教 科 書	『子どもの食と栄養』（岡崎光子 編、光生館）					
参 考 文 献	『子どもの食事』（根岸宏邦 著、中央公論新社） 『新版 子どもの食生活・栄養・食育・保育-』（上田玲子 編、ななみ書房）					
注 意 事 項	授業を通して、自分自身の望ましい食生活の構築にも取り組んで欲しい。					

授 業 科 目	食 教 育 論		単位数	2	担当教員	平山 素子
講 義 の 内 容	保育園、幼稚園において積極的に食教育を行うことが求められている。食の営みは生きる力であり、子ども達の食生活を健康的に演出できるかどうかは、大人の意識にかかっている。 子ども達に基本的な食知識を伝え、様々な体験保育を行うための技術を身につけることを目的とする。 加えて、保護者へのアプローチの方法を学ぶ。					
到 達 目 標	子どもを取り巻く食を含めた生活環境を把握する。 子どもに、食の知識を伝える技術、実践するための技能を獲得する。 保護者に、食の重要性を伝え、実践を促すための方法を学ぶ。					
授 業 計 画	第 1 回	食教育の目的と必要性				
	第 2 回	食教育の方法				
	第 3 回	小児期の食をめぐる問題を考える		1. 食物アレルギー		
	第 4 回	2. 欠食				
	第 5 回	3. 孤食				
	第 6 回	4. 食習慣				
	第 7 回	5. 歯磨きと虫歯				
	第 8 回	6. 咀嚼				
	第 9 回	子どもの発達に即した食教育を考える		1. 食のマナー		
	第 10 回	2. 食と栄養の知識				
	第 11 回	3. 偏食				
	第 12 回	4. 調理保育				
	第 13 回	保護者への啓発の方法				
	第 14 回	媒体作成－給食便り				
	第 15 回	工場見学 または 調理実習				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 前もって授業内容を予告するので、テーマについて調べ、自分の考えをまとめておく			復習： 課題（給食便り作成）に向けて、授業内容について考察し、資料を集める		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題（60％）、授業態度（40％）					
教 科 書						
参 考 文 献	『子どもの食事』（根岸宏邦著、中央公論新社）					
注 意 事 項	授業の中で随時ディスカッションを行うので、積極的に参加して欲しい。					

授 業 科 目	子 ど も の 保 健 Ⅱ	単位数	1	担当教員	両角 理恵
講 義 の 内 容	乳幼児期は発育・発達の著しい時期であるため、日々の保育や栄養のあり方が子どもの心身の健康に大きな影響を与える。子どもの保健Ⅰで学んだ理論や知識をもとに、実際の保育現場や家庭での育児や看護に必要な実践的技術の習得を行い、保育者の重要な資質である子どもの心身の健康状態を判断できる力の育成をめざしたい。また不慮の事故や子どもの緊急症状に対する対処方法、応急手当、健康教育などの実践能力も養いたい。さらに子どもだけではなく、保育者自身の健康管理についても配慮できる力を身につけさせる。				
到 達 目 標	子どもの保健Ⅰで学んだ知識を基礎とし、グループ演習を通して実践の場で役立てる応用力や技術を身につけることができる。				
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション、子どもの養護と教育①（だっこ・おんぶ・寝かせ方）			
	第 2 回	子どもの養護と教育②（排泄）			
	第 3 回	子どもの養護と教育③（衣服の着脱・沐浴）			
	第 4 回	子どもの生活習慣①（睡眠・排泄）			
	第 5 回	子どもの生活習慣②（清潔）			
	第 6 回	子どもの発育・発達の観察と評価①			
	第 7 回	子どもの発育・発達の観察と評価②			
	第 8 回	子どもの発育・発達の観察と評価③			
	第 9 回	体調不良の子どもへの対応①			
	第 10 回	体調不良の子どもへの対応②			
	第 11 回	体調不良の子どもへの対応③、子どもと薬			
	第 12 回	個別の配慮が必要な子どもへの援助			
	第 13 回	子どもの心と体の健康づくりのために（保健計画・保健だより・健康教育）			
	第 14 回	園での安全対策と望ましい保育環境			
	第 15 回	保育における応急手当			
授 業 に 対 する 予 習 ・ 復 習	予 習： 授業計画を参考に教科書で内容を確認しておくこと。			復 習： 配布資料を熟読すること。配布プリントで習得した知識を確認すること。	
成績評価の 方 法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 筆記試験（３０％）、課題（４０％）、実技（２０％）、授業態度（１０％）				
教 科 書	『これだけはおさえたい！保育者のための子どもの保健Ⅱ』（鈴木美枝子編著、創成社）				
参 考 文 献					
注 意 事 項	・原則として全回出席すること。 ・筆記用具、提示された教材は忘れずに持参すること。 ・グループ演習は、メンバー同士で協力し全員が積極的に演習に取り組むこと。				

授 業 科 目	家 庭 支 援 論		単位数	2	担当教員	北澤 明子
講 義 の 内 容	家族、家庭のあり方が変化し、多様化した現在、保育者は家庭や地域と連携しながら、子育てを支援していくことが求められている。本講では、子育てにおける「家庭支援」の背景や目的、方法について講義及びグループワーク等を通して学ぶとともに家族、家庭のあり方や保育者として必要な家庭支援について考えていく。					
到 達 目 標	① 家族の意義とその機能について理解する。 ② 現在の子育て家庭を取り巻く環境について理解する。 ③ 子育て支援の公的根拠や支援政策について理解する。 ④ 子育て支援の実際について理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーションー授業の進め方・参考文献の紹介等ー				
	第 2 回	家庭の意義と機能				
	第 3 回	子育て家庭の歴史				
	第 4 回	現代家族をめぐる子育て環境				
	第 5 回	子育て家庭支援の必要性				
	第 6 回	子育て支援の法的根拠				
	第 7 回	わが国の子育て支援政策				
	第 8 回	保育の場における相談・援助について				
	第 9 回	子育て支援サービスの種類と役割				
	第 10 回	子育て支援の実際①ー保育所・幼稚園における子育て支援の取り組みー				
	第 11 回	子育て支援の実際②ー地域子育て支援センターにおける子育て支援の取り組みー				
	第 12 回	子育て支援の実際③ー諸外国の子育て支援、その他多様な子育て支援の場についてー				
	第 13 回	子育て支援の実際④ー子育て支援の実際を企画するー				
	第 14 回	企画発表・相談事例検討				
	第 15 回	まとめと振り返り				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 出された課題は授業の予習・復習をかねるので真摯に取り組むこと。			復習： 授業で配布された資料を整理し、前回の授業内容を復習すること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（70％）、レポート（10％）、課題（10％）、授業態度（10％）					
教 科 書	適宜必要な資料を配布する。					
参 考 文 献	『子どもを知る 家庭支援論【新版】』（小田豊 他編、北大路書房）					
注 意 事 項	適宜、必要な資料を授業内に配布するので、配布された資料はファイリングして毎回授業に持参するようにすること。					

授 業 科 目	相 談 援 助		単位数	1	担当教員	小室 泰治
講 義 の 内 容	相談援助において必要な方法や技術を学び、援助者としての自己への理解を深め、保育現場において相談援助の理論や方法を活用できる技術を身につけることをねらいとし、具体的展開について演習を交えながら解説する。					
到 達 目 標	1 相談援助の意義、機能、対象を説明することができる。 2 相談援助の方法、技術を説明することができる。 3 地域にある社会資源や活用を説明することができる。					
授 業 計 画	第 1 回	相談援助とは何かについて学ぶ 保育実践の中でなぜ相談援助が必要になったのかを理解する				
	第 2 回	相談援助の理論と歴史の変遷 相談援助の定義と理論を理解する				
	第 3 回	相談援助の基本的枠組み 相談援助には、直接援助技術、間接援助技術があることを理解する				
	第 4 回	相談援助の理念と価値 バイステックの援助関係を成立させるための 7 つの原則を学ぶ				
	第 5 回	相談援助の展開過程 面接の開始から問題解決の終結までの過程を学ぶ				
	第 6 回	相談援助を行う上での倫理 専門職としての倫理綱領を学ぶ				
	第 7 回	保育現場における直接援助技術の実際 保育現場での面接やグループワークの方法について事例をとおして修得する				
	第 8 回	保育所におけるコミュニティーワーク 地域に根ざした保育所のあり方を探求する				
	第 9 回	地域にある社会資源 事例をとおして地域にある社会資源の活用について学ぶ				
	第 10 回	事例研究 グループワーク 相談事例をとおして、傾聴や受容の仕方を学ぶ				
	第 11 回	事例研究 グループワーク 相談事例をとおして、傾聴や受容の仕方を学ぶ				
	第 12 回	事例研究 グループワーク 相談事例をとおして、傾聴や受容の仕方を学ぶ				
	第 13 回	自己覚知とスーパービジョン 援助者の自己覚知を育てるための方法としてのスーパービジョンを学ぶ				
	第 14 回	相談援助における課題				
	第 15 回	まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 日ごろからニュースや新聞報道に目をとおり、子育ての悩みや地域の課題について考えておくこと。			復習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、課題（２０％）、発表（２０％）、授業態度（１０％）					
教 科 書	『子どもたちの生活を支える相談援助』（小野澤昇・田中利則・大塚良一編著、ミネルヴァ書房.2015 年）					
参 考 文 献	『ケースワークの原則』（F・P バイステック著、誠信書房）					
注 意 事 項						

授 業 科 目	相 談 援 助		単位数	1	担当教員	齋藤 新一
講 義 の 内 容	相談援助を行なう上で必要なソーシャルワーク(ケースワーク・グループワーク)について学ぶ。具体的には、保育とソーシャルワークのかかわり、対人援助の方向性を示す価値、クライアントとの援助関係の形成を図るバイスティックの7原則、相談援助の各展開過程の内容、相談援助面接方法(ロールプレイ)、グループの人と人との相互作用の働きによって個人の課題解決を図るグループワーク、総合的事例分析により実践的相談援助の実際等について学習していく。					
到 達 目 標	・ 相談援助の意義と機能について理解する。 ・ 相談援助の原理・原則について理解する。 ・ 相談援助の展開過程について理解する。 ・ 個別援助技術と集団援助技術について理解する。					
授 業 計 画	第1回	相談援助の意義と機能				
	第2回	相談援助とソーシャルワーク				
	第3回	相談援助の価値と倫理				
	第4回	相談援助の原理・原則①				
	第5回	相談援助の原理・原則②				
	第6回	個別援助技術の定義と原則①				
	第7回	個別援助技術の定義と原則②				
	第8回	相談援助の展開過程				
	第9回	相談援助の展開過程の事例演習				
	第10回	相談援助の面接技法①				
	第11回	相談援助の面接技法②				
	第12回	個別援助技術の総合事例分析				
	第13回	集団援助技術の定義と原則①				
	第14回	集団援助技術の定義と原則②				
	第15回	相談援助に於けるリスクマネジメント				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 現在の社会の中で起きている、さまざまな福祉の問題について、学生自身があらかじめ、新聞や雑誌等により、事前調査を行い、その実態について学ぶ。			復習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、レポート（２０％）、授業態度（３０％）					
教 科 書	特に指定しない。					
参 考 文 献	『保育者のための相談援助』（小林育子・小舘静枝・日高洋子、萌文書林） 『演習・保育と相談援助』（佐藤伸隆・中西遍彦、みらい） 『社会福祉援助技術』（松本寿昭 編著、同文書院） 『相談援助の理論と方法Ⅰ』（社会福祉士養成編集委員会、中央法規）					
注 意 事 項	授業を妨げる行為(私語・携帯電話等)については、本人確認の上、席替え、その他の処置を講ずる。					

授 業 科 目	保 育 相 談 支 援		単位数	1	担当教員	小室 泰治
講 義 の 内 容	保育相談支援の意義と原則について理解し、保育の特性を生かした支援とは何か、事例の検討や演習を通して考えていく。					
到 達 目 標	1 保育者が相談支援を行う意義を説明できる。 2 保育相談支援の実際方法を解説することができる。 3 保育所など児童福祉施設における保護者支援について説明ができる。 4 自己理解を深め、保育者としての自分自身のあり方を考える。					
授 業 計 画	第 1 回	保育相談とは何か 保育相談の意味や意義について学ぶ				
	第 2 回	保育相談支援における原理と原則 人間への尊厳を重視した支援の原則を理解する				
	第 3 回	保育ニーズの多様化と相談援助・支援 保育相談支援は相談援助技術を活用したもの				
	第 4 回	保護者の養育力向上支援 保護者の養育力を支援するためには保育者の資質が重要であることを学ぶ				
	第 5 回	児童虐待防止への支援 事例をととして、児童虐待の防止策と支援のあり方について学ぶ				
	第 6 回	子育て家族の生活課題 孤立化した子育ての現状の解決策と子育て支援センターの役割について学ぶ				
	第 7 回	保育者の姿勢 子どもの最善の利益と福祉の重視について理解する				
	第 8 回	発達障害と保育 保育所における特別な対応を要する子どもと家庭への支援を学ぶ				
	第 9 回	保護者支援の実際 計画、記録、評価、カンファレンスを理解する				
	第 10 回	保育所における保育相談支援の実際 グループワーク 子育てに関する相談事例をととして、傾聴のあり方を理解する				
	第 11 回	保育所における保育相談支援の実際 グループワーク 子育てに関する相談事例をととして、傾聴と受容のあり方を理解する				
	第 12 回	子育て家庭への支援機関との連携 地域にある相談事業の関係機関について学ぶ				
	第 13 回	育児ストレス 育児ストレスの要因を分析し解消方法を考える				
	第 14 回	連絡帳 連絡帳での相談と助言を考える				
	第 15 回	障害児施設、母子生活支援施設等における相談支援 まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 日ごろからニュースや新聞報道に目をととし、子育てに関する悩みなどについて把握しておくこと。			復習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、課題（１０％）、発表（２０％）、授業態度（１０％）					
教 科 書	『保育のための相談援助・支援』（須永進編著、同文書院）					
参 考 文 献	『子育てアドバイス実践ノート』（日本子育てアドバイザー協会、ぎょうせい出版） 適宜プリントを配布する					
注 意 事 項	後半はグループワークで事例研究を討議し、その結果を発表してもらうので、積極的に発言できるよう心掛けること。					

授 業 科 目	保 育 相 談 支 援		単位数	1	担当教員	齋藤 新一
講 義 の 内 容	保育士は児童の保育のみでなく、児童の保護者支援も業務となっている。保育相談支援とはどのようなものか、何故、保育相談支援が必要なのか、保育相談支援はどのような技術を用いて、また、どのように展開して行なっていくのか。保育相談支援の援助内容と方法、及び支援を行った後の自分たちの保護者支援の効果測定・評価方法について事例を通して学習していく。さらに、保育所以外の児童福祉施設の保護者支援についても学習していく。					
到 達 目 標	・ 保育相談支援の意義・原則について理解する。 ・ 保護者支援の基本を理解する。 ・ 保育相談支援技術について理解する。 ・ 保育所以外の児童福祉施設の保護者支援について理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	保護者に対する保育相談支援の意義				
	第 2 回	保育相談支援の原則、保育士の業務と保育相談支援(1)				
	第 3 回	保育士の業務と保育相談支援(2) 保育相談支援と相談援助の違いと相互関連性				
	第 4 回	保育相談支援の基本 1 (子どもの最善の利益と福祉の重視/子どもの成長の喜びの共有)				
	第 5 回	保育相談支援の基本 2 (保護者の養育力の向上支援/保護者との信頼関係の構築/地域の関係機関の連携)				
	第 6 回	保育相談支援の展開過程				
	第 7 回	保育相談支援の実際 1 (演習: 保育相談支援の方法と技術)				
	第 8 回	保育相談支援の実際 2(演習: 保育相談支援の方法と技術)				
	第 9 回	保育相談支援の実際 3(演習: 保育相談支援の方法と技術)				
	第 10 回	保育相談支援の実際 4(演習: 環境を通じた保育相談支援)				
	第 11 回	保育相談支援の実際 5(演習: 記録技法)				
	第 12 回	保育相談支援の実際 6(演習: 記録技法)				
	第 13 回	保育所での日常場面に於ける保育相談支援				
	第 14 回	児童福祉施設における保育相談支援の実際(演習)				
	第 15 回	保育相談支援のまとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 授業に関連した事例などについて、学生自身があらかじめ新聞・雑誌等での事前調査を行う。			復習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施 (○) する／ () しない 筆記試験 (5 0 %)、レポート (2 0 %)、授業態度 (3 0 %)					
教 科 書	特に指定しない。					
参 考 文 献	『保育相談支援』(柏女霊峰・橋本真紀、ミネルヴァ書房)、『保育相談支援』(小林育子、萌文書林)、『保育所における家庭支援』(金子恵美、全国社会福祉協議会)、『保育所保育指針解説書』(ひかりのくに) その他の文献・資料等を参考・引用とする場合はその都度紹介していく。					
注 意 事 項	授業を妨げる行為(私語・携帯電話等)については、本人確認の上、席替え、その他の処置を講ずる。					

授 業 科 目	教 育 原 理		単位数	2	担当教員	松木 久子
講 義 の 内 容	教育や学校を単純に事象的そして経験的にのみとらえるのではなく、より本質的に「教育」や「学校」を理解するために必要な基礎的知識や考え方を習得することを基本的な目標とします。なぜ教育が必要か・女性と子どもにとって教育とは何か・幼稚園や保育所（園）がどのように成立してきたかについてより理解を深め、自分なりの教育観を形成し主体的に教育について考えていく力を身に付けていけるよう指導します。					
到 達 目 標	教育についてマスコミが取り上げている事柄をうのみにするのではなく、批判的にとらえられるような理解力を養えるように力をつける。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション：講義の受け方と諸注意				
	第 2 回	教育を受けられることは普通のことか				
	第 3 回	教育とは何か：教育の語義				
	第 4 回	教育とは何か：教育の意義				
	第 5 回	人間の特質：教育の可能性と限界				
	第 6 回	教育の歴史：学校の誕生とその歩み				
	第 7 回	近代学校の成立と性格：誰もが通える学校とは				
	第 8 回	教育制度：学校制度の発達				
	第 9 回	教育制度：戦後における改革の動向				
	第 10 回	幼稚園と保育所の誕生				
	第 11 回	幼稚園と保育所の歩み				
	第 12 回	教育の内容と方法				
	第 13 回	教育の評価：意義と方法				
	第 14 回	教育の経営：学級経営、学校経営				
	第 15 回	これまでのまとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 教科書の該当部分を熟読し、理解しておく。			復習： 新聞記事等の感想を書けるようにしておく。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、レポート（２５％）、授業態度（２５％）					
教 科 書	『教育原理』（大沢 裕 編著、一藝社）					
参 考 文 献	授業中に必要に応じて紹介します。					
注 意 事 項	教育を受けられることは普通のことなのか等、今まで常識とってきたことを、大いに疑ってほしいと思います。また、子どもを取り巻く環境について考えを深めるために、日々ニュースや新聞に接するようにしてください。また専門用語などについて、図書館を利用するなどして、積極的そして主体的に学ぶ態度をもってほしいと思います。特に、文字の読み書きには十分に慣れる必要があります。					

授 業 科 目	保 育 原 理		単位数	2	担当教員	富山 大士
講 義 の 内 容	1. 保育の制度・思想・歴史について学び、保育の意義および今日の保育のあり方について考える。 2. 育ちや学びの連続性を見つめつつ、保育の内容・保育の方法・保育の計画について学ぶ。 3. 保育・子育てに関する現状を理解し、今日的課題について考える。					
到 達 目 標	1. 保育の制度・思想・歴史の知識をベースとし、保育の意義について自ら考え理解できるようになる。 2. 就学後の姿も視野に入れつつ、保育の計画、実践、省察・評価、改善の過程の循環による保育の質の向上について理解を通して、保育の展開に関する技能の基礎が培われる。 3. 保育・子育てを取り巻く社会情勢・制度の現状について知識を得るとともに、今日的課題について自ら考える力が身に付く。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション 「保育」とは				
	第 2 回	保育の場について知る (家庭における保育・施設型保育・家庭的保育等)				
	第 3 回	保育の思想・歴史を学ぶ (西洋および日本における保育の歴史)				
	第 4 回	「保育」についての捉え方 (子どもの最善の利益・保育所保育指針の理解・子どもの理解・保育者の保育観)				
	第 5 回	保育所保育の内容 (「保育の内容」・「ねらい」と「内容」・幼稚園教育要領とのかかわり)				
	第 6 回	保育課程・教育課程を学ぶ (保育における計画とは・保育課程および教育課程の意義と視点・編成における留意事項と手順)				
	第 7 回	指導計画の構造と作成の実際 (指導計画とは・指導計画の作成と展開における留意事項・指導計画の実際・保育における評価)				
	第 8 回	子どもの健康と安全 (子どもの健康・食育・子どもの安全)				
	第 9 回	多様化する保育ニーズ (多様化する保育の形態・乳児保育について・障がい児保育・外国人の受け入れ)				
	第 10 回	保育者に求められる子育て支援 (子育て支援の概念と必要性・子育て支援の実際・子育て支援のこれから)				
	第 11 回	育ちや学びの連続性 (保幼小の連携・「幼児期」から「児童期」への育ちの連続性と非連続性・保幼小の連携の課題)				
	第 12 回	保育者のあり方 (今日の保育者に求められる姿・保育者の職業倫理・保育者の専門性の向上)				
	第 13 回	幼保連携型認定こども園教育・保育要領について (保育所保育指針および幼稚園教育要領との対比のなかで)				
	第 14 回	保育に関する今後の課題 (保育サービスの評価と苦情解決・諸外国の保育の現状)				
	第 15 回	まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： ノートの先頭頁にシラバスのコピーを貼りつけ、授業内容について毎回確認をした上で授業に臨むこと。			復 習： 授業開始時に行う前回授業内容の確認小テストに向けて、毎回の授業の復習を必ず行うこと。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、レポート（２０％）、授業態度（３０％）					
教 科 書	『新・保育原理 ーすばらしき保育の世界へー』(三宅茂夫編、みらい)					
参 考 文 献	『保育所保育指針解説書』(厚生労働省、フレーベル館)、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(内閣府・文部科学省・厚生労働省、フレーベル館)					
注 意 事 項	1) 授業の開始時に、前回授業の理解度を確認する小テストを行う。 2) ノートの先頭頁にシラバスのコピーを貼りつけて授業内容について毎回確認するとともに、ノートは丁寧にまとめて書くこと。 3) 子どもに関する新聞切り抜き記事を週に一つ以上集め、自分の考えや感想を書くこと。					

授 業 科 目	教 育 心 理 学		単位数	2	担当教員	大谷 智子
講 義 の 内 容	幼児教育において、人間の“記憶や学習のメカニズム”について理解を深めることは重要である。この講義をきっかけに、各人が教育方法や幼児に対する理解・考え方を深め、これからの教育とはどうあるべきかを考えてもらいたい。					
到 達 目 標	本講義では、こどもの発達、記憶と学習、動機づけ等いくつかの領域に焦点を絞り、保育の現場において重要な教育心理学の基礎的知識を習得することを到達目標とする。					
授 業 計 画	第 1 回	ガイダンス、導入 担当講師の自己紹介と講義の進め方、なぜ教育心理学を学ぶ必要があるのかについて解説する。				
	第 2 回	こどもの発達とは 各発達段階の特徴およびピアジェの認知発達理論、ピゴツキーの発達の最近接領域について学ぶ。				
	第 3 回	こどもの心の理解 「こころ」とは何か。愛着、こころの理論を通して考える。				
	第 4 回	気づくこと 視覚的注意とは何か、どういうメカニズムで人は注意を向けるのか。保育の視点から注意について考える。				
	第 5 回	覚えること 記憶のしくみについて概観する。身近な例や簡単な記憶実験を通じ、記憶の種類について学ぶ。				
	第 6 回	忘れること なぜ忘却が起こるのか、記憶と忘却のメカニズムについて学ぶ。また、健忘症などの症状について触れる。				
	第 7 回	学ぶこと 記憶の側面から、どうすれば記憶し続けられるか考える。				
	第 8 回	教えること 心理学における学習について学ぶとともに、行動の側面から、学習の方法について考える。				
	第 9 回	やる気のメカニズム、やる気はどうやって高まるのか 動機づけについて説明し、どうすればやる気を育むことができるのか考える。				
	第 10 回	問題解決をすること 学習分野における問題の解決方法について学ぶ。				
	第 11 回	こどもを取り巻く人間関係 仲間関係を通じて養われる社会性や道徳性について学ぶ。				
	第 12 回	学級集団 学級集団における行動や発生しやすい問題について学び、よりよい学級作りについて考える。				
	第 13 回	個人差とは 知能やパーソナリティについて学ぶ。				
	第 14 回	教育評価 学力の測定と評価について学び、評価の多様性についても考える。				
	第 15 回	第 1 回～第 14 回の総まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 講義時に配布されたプリントを参照し、 復習しておくこと。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（60％）、課題（30％）、授業態度（10％）					
教 科 書	特になし。					
参 考 文 献	講義テーマやリアクションペーパーに書かれた質問に応じて、その都度紹介する。					
注 意 事 項						

授 業 科 目	教 育 心 理 学	単位数	2	担当教員	大熊 美佳子
講 義 の 内 容	幼児教育において、子どもの発達や学習過程を理解し、子どもへの対応を考えることは非常に重要です。本講義では、教育に関わる子どもの発達、学習のメカニズム、動機づけなど教育心理学の基礎知識を習得することを目的とします。				
到 達 目 標	①教育心理学の基本用語を正確に理解する ②子どもの発達や行動を理解するために必要な心理学的視点の基礎を身につける ③教育者として必要な心理学的な関わり方を学ぶ				
授 業 計 画	第 1 回	教育心理学とは ガイダンスと導入として教育心理学を学ぶ意味、子どもにとって教育とは何かを考える。			
	第 2 回	子どもの発達① 発達とは何か			
	第 3 回	子どもの発達② 発達過程について：胎児期～乳児期			
	第 4 回	子どもの発達③ 発達過程について：タドラー期以降			
	第 5 回	子どもの発達④ ピアジェの認知発達理論，ヴィゴツキーの最近接領域などの発達理論について			
	第 6 回	学習理論① 学習とは何か			
	第 7 回	学習理論② 条件づけ			
	第 8 回	学習理論③ 社会的学習理論について			
	第 9 回	子どものやる気① 動機づけ理論について			
	第 10 回	子どものやる気② 意欲と無気力			
	第 11 回	子どものやる気③ 褒めること，叱ること			
	第 12 回	子どもの個性を理解する① パーソナリティ理論			
	第 13 回	子どもの個性を理解する② 知能について			
	第 14 回	教育方法① 教授方法について			
	第 15 回	教育方法② 評価について			
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習：	配布するプリントを中心に，各回の授業内容を復習し，疑問点があれば次回に確認すること。
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（60％）、課題（20％）、授業態度（20％）				
教 科 書	特になし				
参 考 文 献	講義の中で適宜紹介します。				
注 意 事 項	講義形式で行います。 将来教育現場で子どもに関わるために必要な知識を身につけるために，講義の内容を具体的にイメージしながら理解を深めてください。				

授 業 科 目	保 育 者 論		単位数	2	担当教員	松木 久子
講 義 の 内 容	保育者として知らなければならない基本的な事柄や実習に向けての態度形成、さらに保育者が担っている役割の範囲と負っている限界、そしてその克服という問題について理解することを目指とします。幼稚園や保育所の相違点や共通点・保育をめぐる諸問題・保育をめぐる様々な考え方等を具体的に理解することができる内容を提供し指導していきます。					
到 達 目 標	実習における心構えや、いろいろな保育観について理解を深め、自分なりの保育観を育成できる基礎力をつける。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション：講義の受け方と諸注意				
	第 2 回	現代の子どもと学校、教師				
	第 3 回	保育者という仕事の実態				
	第 4 回	日本の教職の特質				
	第 5 回	指導と懲戒：進級をめぐる日本特有の問題				
	第 6 回	指導と懲戒：体罰をめぐる事情				
	第 7 回	幼稚園教諭と保育士の類似点と相違点				
	第 8 回	幼稚園教諭の仕事の実態(1)				
	第 9 回	幼稚園教諭の仕事の実態(2)				
	第 10 回	幼稚園教諭の仕事の実態(3)				
	第 11 回	教師像の変遷				
	第 12 回	保育者としての服務と望ましい資質				
	第 13 回	子どものしつけをめぐる問題(1)				
	第 14 回	子どものしつけをめぐる問題(2)				
	第 15 回	これまでのまとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 教科書の指摘された文章を理解しておく。			復習： 復習テストを課す場合がある。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、レポート（２５％）、授業態度（２５％）					
教 科 書	『教育原理』（大沢 裕 編著、一藝社）					
参 考 文 献	授業中に必要に応じて紹介します。					
注 意 事 項	授業形態は講義形式が中心となりますが、より具体的な幼稚園教諭・保育士としてのイメージをもつために、時折映像を活用した授業も展開します。その際には、自分自身の保育者像を創造するためにも、メモを細かく取るなど真剣に取り組んでほしいと思います。専門用語などについて図書館等を利用するなどして、積極的そして主体的に学ぶ態度を形成してください。特に、文字の読み書きについては、日常的に慣れておく必要が大いにあります。					

授 業 科 目	社 会 的 養 護		単位数	2	担当教員	志濃原 亜美
講 義 の 内 容	社会福祉、児童家庭福祉の中の社会的養護の位置を理解し、特に施設における日常生活援助、施設における専門職について学びを深める。また、施設保育士の専門性と特別な配慮を要する子どもや家庭への援助について学び、さらに施設の中で行われるリービングケア、アフターケアなどの現状についても学習する。					
到 達 目 標	施設養護の体系や援助過程について理解する。レジデンシャル・ソーシャルワークの視点から施設保育士の専門性、特別な配慮を要する子どもへの援助や保護者への相談の在り方などを知る。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション				
	第 2 回	子どもの社会的養護				
	第 3 回	日本における社会的養護のしくみ				
	第 4 回	子どもの権利と社会的養護				
	第 5 回	施設養護の種類				
	第 6 回	施設養護に関わる専門職				
	第 7 回	アドミッションケアとインケア				
	第 8 回	リービングケアとアフターケア				
	第 9 回	中間レポート				
	第 10 回	家庭的養護の理念と里親制度				
	第 11 回	里親制度（V T R）				
	第 12 回	子育て困難家庭への支援行政の仕組みとソーシャルワーク				
	第 13 回	D V ケースと虐待ケースへのソーシャルワーク				
	第 14 回	母子家庭（V T R）				
	第 15 回	まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 次回の講義項目について教科書やプリントを用いて予習する。			復習： 社会福祉や児童家庭福祉で学んだ専門用語などの復習。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 筆記試験（５０％）、レポート（３０％）、課題（１０％）、授業態度（１０％） （必要に応じて小テストを行う）					
教 科 書	『子どもの社会的養護』（建帛社）					
参 考 文 献	適宜紹介する					
注 意 事 項	特別なケアを要する子どもについての書籍等を積極的に読むこと。					

授 業 科 目	社 会 的 養 護		単位数	2	担当教員	佐藤 千代子
講 義 の 内 容	年々増加傾向にある社会的養護を必要とする子どもたちの背景、社会的養護の法制度や体系、援助を行う機関や施設、児童の権利擁護、専門職の役割、援助者として必要な視点などについて理解を深めることを目的とする。また、以上のことを通して社会的養護の現状と展望についても理解を深めることとする。					
到 達 目 標	・ 社会的養護とは何か、また社会的養護が必要となる背景を理解する。 ・ 社会的養護の制度や実施体系を理解する。 ・ 社会的養護の実際、現状と展望を理解する。 ・ 援助者として必要な視点を理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	社会的養護とは何か				
	第 2 回	社会的養護の歴史的変遷				
	第 3 回	社会的養護と児童家庭福祉				
	第 4 回	児童養護の体系				
	第 5 回	施設養護の概要				
	第 6 回	家庭的養護の概要				
	第 7 回	社会的養護の制度と法体系 ①				
	第 8 回	社会的養護の制度と法体系 ②				
	第 9 回	社会的養護の基本原理				
	第 10 回	児童福祉施設の運営・管理				
	第 11 回	社会的養護を担う専門職				
	第 12 回	社会的養護の実際 ①				
	第 13 回	社会的養護の実際 ②				
	第 14 回	社会的養護とソーシャルワーク				
	第 15 回	社会的養護の現状と展望				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 難しい用語が頻繁に出てくるので、必ず予習をして講義に臨むこと。			復 習： 理解を深めるために、毎回復習をすること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、レポート（２０％）、授業態度（３０％）					
教 科 書	プリントを配布する。					
参 考 文 献	適宜紹介する。					
注 意 事 項	プリントや資料を使って分かり易い講義を行うが、分からない点があればそのままにしないで質問すること。 プリントは、ファイルにきちんと保管すること。複数回、復習を兼ねたレポートの提出を求める。 授業中の私語、飲食、携帯電話の使用は厳禁。					

授 業 科 目	発 達 心 理 学		単位数	2	担当教員	川田 三夫
講 義 の 内 容	下記の到達目標について、環境の変化が子どもの発達にどのような与えているのかも考える様にしたい。 例えば少子化で、大勢で外で遊ぶ子どもが少なくなり、反面、ゲーム等で室内で遊ぶ割合が増えている。 こういった状況の変化が、子どもの発達にどのような影響を与えるのかといったことを考えてみる。					
到 達 目 標	・発達段階ごとの基本的な発達事項を理解する。 ・各発達領域ごとの発達の概要、ポイントを理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	発達とは （遺伝と環境、成熟と学習、刻印づけ、ハーロウの実験、生理的早産、など）				
	第 2 回	発達段階 （乳児、幼児、児童の各段階、主な発達課題、0歳児の発達、など）				
	第 3 回	年齢別の発達 （1歳児の発達）				
	第 4 回	年齢別の発達 （2歳児の発達）				
	第 5 回	年齢別の発達 （3歳児の発達）				
	第 6 回	年齢別の発達 （4歳児の発達）				
	第 7 回	年齢別の発達 （5・6歳児の発達）				
	第 8 回	思考の発達① （ピアジェを中心に、自己中心性、アニミズム、など）				
	第 9 回	思考の発達② （ピアジェ：感覚運動、前概念、直観の各思考、均衡化理論、など）				
	第 10 回	言葉の発達 （言葉の機能、内言と外言、喃語・初語・片言、一語文、など）				
	第 11 回	描画の発達 （各発達段階、描写上の特徴と問題点、色の問題、など）				
	第 12 回	自己概念の発達 （自我・パーソナリティ等に関連する理論、フロイト、エリクソン、など）				
	第 13 回	知覚の発達 （知覚と認知、体制化、感情や欲求の影響、など）				
	第 14 回	情動の発達 （情動の分類、ブリッジスの年齢別発達、かんしゃく、嫉妬、など）				
	第 15 回	発達障害、試験 （自閉、多動、知的障害、知能検査、など）				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 日頃から子どもや保育のことに気をつけて見聞するようにする。 トピックについての質問が適宜なされるので答えられるように努力する。			復 習： 授業4回分をまとめて、小試験の形で実施する。 その都度の復習が大切になる。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（100%）					
教 科 書						
参 考 文 献						
注 意 事 項	・授業中の私語、携帯電話、飲食は禁止。好ましくない者は注意の上退出させる。 ・授業は、レジメ、ノート、DVD、資料等をもとに行う。 ・試験は、4回に分けて小試験の形で行う。合計が100点になる。					

授 業 科 目	保 育 の 心 理 学		単位数	1	担当教員	川田 三夫
講 義 の 内 容	発達心理学の学習を踏まえ、ここではさらに演習的な学修を通して理解を深めることを目標にする。 実習も含め、保育現場に出た時に仕えるような実践的な知識、学修を目指している。 資料(テキスト、データ、文献など)を読む力を育てるということも授業の課題になっている。					
到 達 目 標	・テーマに見合った資料収集の能力を身につける。 ・レジメの作成能力を身につける。 ・発表能力を高める。 ・質疑応答能力を高める。					
授 業 計 画	第 1 回	発達理論、発達観、児童観、保育観などのテーマ （説明、発表、質疑、など）				
	第 2 回	発達段階(発達過程)、各段階の特徴、子どもの心理などのテーマ （説明、発表、質疑、など）				
	第 3 回	身体・運動の発達などのテーマ （説明、発表、質疑、など）				
	第 4 回	情緒の発達などのテーマ （説明、発表、質疑、など）				
	第 5 回	知覚・認知の発達などのテーマ （説明、発表、質疑、など）				
	第 6 回	言葉の発達などのテーマ （説明、発表、質疑、など）				
	第 7 回	知的能力の発達などのテーマ （説明、発表、質疑、など）				
	第 8 回	遊びの発達などのテーマ （説明、発表、質疑、など）				
	第 9 回	友だち関係、社会性の発達などのテーマ （説明、発表、質疑、など）				
	第 10 回	人格の発達などのテーマ （説明、発表、質疑、など）				
	第 11 回	道徳性の発達、今日的な問題や課題などのテーマ （説明、発表、質疑、など）				
	第 12 回	発達障害、保育現場での関わり方などのテーマ （説明、発表、質疑、など）				
	第 13 回	測定・評価(理論、各種テストなど)などのテーマ （説明、発表、質疑、など）				
	第 14 回	子ども理解と保育実践[PDCA]などのテーマ （説明、発表、質疑、など）				
	第 15 回	特定のテーマについての振り返り （説明、発表、質疑、など）				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： ワード、エクセルの技能を高める。 資料を読み解く能力を高める。 話術、説明能力を高める。			復習： 指摘を受けた改善点を反省して次回に生かす。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（60％）、課題（10％）、発表（30％）					
教 科 書						
参 考 文 献						
注 意 事 項	・毎回、所定のグループ毎に発表する。その都度4段階で評価される。(発表は4回を予定している) ・レジメの作成、説明の仕方、質疑などが総合的に評価される。					

授 業 科 目	教 育 社 会 学		単位数	2	担当教員	小堀 哲郎
講 義 の 内 容	教育社会学は、現代社会と密接な関係にある〈教育〉というものに、社会学という学問的立場からアプローチをするものである。特に、この講義では、保育者を目指す学生に対して、毎回具体的な〈保育〉や〈子ども〉に関する話題を取り上げるので、現代の子どもが置かれている状況に理解を深めてほしいと思う。今年度は「地域」と「子ども」の関係を中心に講義する。					
到 達 目 標	① 子どもが置かれている現代の社会状況を理解する。 ② 社会的存在としての子どもを多面的に理解する。 ③ 社会学的思考を身につける。					
授 業 計 画	第 1 回	地域（社会・文化）に生きる（育つ）子どもたち				
	第 2 回	地域社会の人間関係				
	第 3 回	ファミリーサポートセンター				
	第 4 回	子ども会				
	第 5 回	学童保育				
	第 6 回	地域スポーツ				
	第 7 回	三世代交流―新しい地域社会のために				
	第 8 回	三世代交流―見えてきた課題				
	第 9 回	生活科・総合的学習				
	第 10 回	P T A 活動				
	第 11 回	人生儀礼からみた子どもの成長				
	第 12 回	祭囃子の伝承				
	第 13 回	寝屋制度				
	第 14 回	子どもの貧困				
	第 15 回	まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習：教科書に沿って進めるので、当該箇所を読んでおくこと。			復 習：子どもを取り巻く問題について、社会的に考えてみること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（60％）、レポート（40％）					
教 科 書	『地域に生きる子どもたち』（小堀哲郎編著、創成社） 教科書に沿って進めるので、当該箇所を読んでおくこと					
参 考 文 献	授業中に適宜紹介する。					
注 意 事 項	○ 遅刻・早退は3回につき1回の欠席とし、授業回数の3分の2以上の出席がない場合には、期末試験を受けることができない。 ○ 毎回の授業終了時に 500 字程度の「授業内レポート」を作成し、評価に算入する。					

授 業 科 目	臨 床 心 理 学		単位数	2	担当教員	伊藤 明芳
講 義 の 内 容	臨床心理学は応用心理学の一つである。臨床心理学は心の悩みを解決し、人間を幸せにする学問ともいわれている。 現代社会にはさまざまな心の問題が存在する。私たちが、人の心を理解しようとしたり、心の問題に向き合おうとしたりするとき、臨床心理学はそれらの試みをサポートしてくれる。 本講義では、臨床心理学の基礎的知識の習得と現場で生きる臨床心理学の実践的能力の育成を図る。さらに、保育者自身の心の安定と成長にもアプローチしたいと考えている。					
到 達 目 標	臨床心理学の主要理論の基礎的を習得し、それらを使って、子どもや大人の心の問題理解と支援に役立てられるようになること。					
授 業 計 画	第 1 回	1. イントロダクション 臨床心理学とは何か				
	第 2 回	ロールプレイによる実習				
	第 3 回	2. 臨床心理学の心の捉え方と心理療法 精神分析				
	第 4 回	行動主義				
	第 5 回	人間性心理学				
	第 6 回	3. 心の発達				
	第 7 回	4. 心と脳				
	第 8 回	5. 心理アセスメント				
	第 9 回	6. 心の問題の理解と対応				
	第 10 回	7. 子どもの心の問題				
	第 11 回	8. 発達障害				
	第 12 回	9. 心の病気				
	第 13 回	10. 家庭支援と他者・他機関との連携				
	第 14 回	11. 保育者自身のメンタルヘルスを考える 臨床心理学の理論の活用				
	第 15 回	今後へのアドバイス				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 事前にテキストの該当箇所を読んでおくこと。			復 習： 学んだ知識の定着を図ること。理解が困難な場合は遠慮なく担当教員に尋ねること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（60％）、課題（40％）					
教 科 書	『事例で学ぶ 保育のための相談援助・支援～その方法と実際～』（須永進[編著]、同文書院）					
参 考 文 献	他の参考図書等については、講義の中で必要に応じて適宜紹介する					
注 意 事 項	講義を中心におこなう。実際の事例などをあげ、受講生にわかりやすい内容を心がけたい。 受講者には自ら学び考える意欲をもって授業に参加する態度が求められる。					

授 業 科 目	臨 床 心 理 学		単位数	2	担当教員	今水 豊
講 義 の 内 容	保育園や幼稚園において相談のニーズが増える昨今、先生が子どもや保護者を理解し、良好な援助関係を築くために、臨床心理学は有用な分野である。臨床心理学とは、心理的問題に悩む人を援助するための学問である。いわば、心の問題を抱えている人の痛みを共有し、援助に活かす試みである。授業では、心理的問題のとりえかたや心理療法の実践について論理的・実践的に学ぶことによって、心の痛みを共有することを目的とする。					
到 達 目 標	本科目では、 ・臨床心理学的な育ちの理解 ・精神的障害の理解 ・心理療法の理解 ・自身の課題の把握 を到達目標とする。					
授 業 計 画	第 1 回	Ⅰ 臨床心理学とは何か				
	第 2 回	Ⅱ 自他を認めるグループワーク				
	第 3 回	Ⅲ 心の発達 社会心理的発達				
	第 4 回	Ⅲ 心の発達 親子関係の発達				
	第 5 回	Ⅳ 心理アセスメント アセスメントとは何か				
	第 6 回	Ⅳ 心理アセスメント アセスメントの体験				
	第 7 回	Ⅳ 心理アセスメント 自己を分析する				
	第 8 回	Ⅴ 心理的問題 うつ病				
	第 9 回	Ⅴ 心理的問題 不安障害				
	第 10 回	Ⅴ 心理的問題 統合失調症				
	第 11 回	Ⅵ 心理療法の実際 精神分析				
	第 12 回	Ⅵ 心理療法の実際 来談者中心療法				
	第 13 回	Ⅵ 心理療法の実際 認知行動療法 1				
	第 14 回	Ⅵ 心理療法の実際 認知行動療法 2				
	第 15 回	Ⅵ 心理療法の実際 ストレスマネジメント				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 普段から臨床心理学に関する記事やニュース、話題を意識しておくことが望ましい。			復 習： わからない内容や疑問に思うことは、授業後質問して理解すること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、課題（３０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書	適宜、資料を配布する。					
参 考 文 献	授業にて適宜紹介する。					
注 意 事 項	講義形式の他に、体験的な学習も行う。 援助場面では、人の話に耳を傾け、その心情を理解する謙虚な態度が不可欠である。 その姿勢を身につけるためにも、授業をしっかり聞き、理解するという構えを求める。					

授 業 科 目	情 報 機 器 利 用		単位数	1	担当教員	金 宰郁
講 義 の 内 容	本科目では、幼児教育における「教育の方法及び技術」について、基礎的な理論と教育の方法を支援する情報機器（コンピュータ）そして教材の活用について理解を図ります。 具体的には、以下のとおりです。 ①教育の方法、指導方法及び教育課程の原則について、その基本を理解すること。 ②情報機器及び教材の活用について、具体的な表計算ソフトの操作を通じて理解すること。					
到 達 目 標	表計算ソフトの基本機能及び応用機能を身につけ、今後大学における研究および卒業論文、即ち、幼児教育に関するデータを集計や分析できることを目標としています。					
授 業 計 画	第 1 回	この授業科目に関するガイダンス				
	第 2 回	表計算ソフト「Excel」の基礎(1)：基本操作（文字入力等）、文書の保存・読み込み、その他				
	第 3 回	表計算ソフト「Excel」の基礎(2)：ワークシートの編集、ワークシートの書式設定、その他				
	第 4 回	表計算ソフト「Excel」の基礎(3)：簡単な数表の作成、数値データ・文字データの相違、データの編集（挿入・削除・移動）、編集シートの調整（セルの幅・高さの変更、罫線の付加など）、その他				
	第 5 回	表計算ソフト「Excel」の基礎(4)：グラフの作成				
	第 6 回	表計算ソフト「Excel」の基礎(5)：グラフの設定の変更 1				
	第 7 回	表計算ソフト「Excel」の基礎(6)：グラフの設定の変更 2				
	第 8 回	「Excel」の応用(1)：セル番地の絶対参照と相対参照				
	第 9 回	「Excel」の応用(2)：関数の利用 1（IF 関数など）				
	第 10 回	「Excel」の応用(3)：関数の利用 2				
	第 11 回	「Excel」の応用(4)：関数の利用 3				
	第 12 回	「Excel」の応用(5)：データ処理の応用 1				
	第 13 回	「Excel」の応用(6)：データ処理の応用 2				
	第 14 回	「Excel」の応用(7)：データ処理の応用 3				
	第 15 回	「Excel」の応用(8)：実践データの処理				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 表計算ソフトの基礎知識（定義）を事前に調べてから、教科書の例題および課題を解いてみる。			復習： 教科書の例題および当日の課題をもう一度解いてみて確認する。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題（50％）、発表（10％）、授業態度（30％）					
教 科 書	『文科系学生のための情報活用』（立野貴之、共立出版）					
参 考 文 献	『知りたい操作がすぐわかる Excel2013 全機能 Bible』（高橋慈子・八木重和、技術評論社）					
注 意 事 項	出席時間数が授業時間数の 3 分の 2 以上であり、かつ、課題、発表、平常点等の成績を総合して合格と判断された場合、所定の単位が与えられます。					

授 業 科 目	情 報 機 器 利 用		単位数	1	担当教員	榎本 功子
講 義 の 内 容	パソコンの基本的な操作方法と、よく使われるアプリケーションソフトの使い方は、社会人として必要不可欠なものである。幼児教育の現場においても、園だよりやクラスだよりなど、さまざまな印刷物を作成したり、教育上必要な情報収集などのスキルが求められる。					
到 達 目 標	本講ではまず、エクセルによるさまざまな文書や表計算のスキルを習得するとともに、より高度な文書作成スキルを身につける。					
授 業 計 画	第 1 回	簡単な表作成。				
	第 2 回	連絡名簿を作る。				
	第 3 回	便利な機能オートフィルを学ぶ。				
	第 4 回	円グラフや棒グラフの作成				
	第 5 回	カレンダーを作る（クリップアート、オートシェイプの活用）				
	第 6 回	デジカメや携帯で写真を撮り、パソコンに取り込み、保存する。				
	第 7 回	パソコンで簡単に写真を修正・加工する。その写真をエクセルに取り込む。				
	第 8 回	シートのコピーを学ぶ。				
	第 9 回	シートをまたいだコピーなどについて学ぶ。				
	第 10 回	表計算のしかた。				
	第 11 回	引き算、掛け算、割り算など。				
	第 12 回	簡単な関数の使い方。				
	第 13 回	住所録の作成①				
	第 14 回	住所録の作成②				
	第 15 回	便利なアプリケーションソフトについて。				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 実践的な授業なので、未経験者も経験者も、スキルアップを目指して積極的に取り組むこと。			復 習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題（70％）、授業態度（30％）					
教 科 書	授業に合わせたプリントを配布予定。					
参 考 文 献	必要に応じて随時紹介する。					
注 意 事 項						

授 業 科 目	障 害 児 保 育		単位数	2	担当教員	佐藤 千代子
講 義 の 内 容	この講義では、知的障害・身体障害（視覚・聴覚、肢体不自由）、言語障害に加え、昨今、殊に保育実践の場で注目され、適切な支援や指導が求められている発達障害を取り上げ、その特性や支援のあり方、技法を学ぶこととする。また、学校や関係機関との連携、家族支援の大切さや障害児を巡る課題についても学ぶこととする。					
到 達 目 標	・ 障害児保育の歴史的変遷、制度や法律を理解する。 ・ 障害児保育の対象となるさまざまな障害を理解し、現場で対応できる力を身につける。 ・ 保護者への支援、関係機関、学校との連携について学ぶ。 ・ 障害児保育の現状や障害児を巡る課題について理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	ガイダンス ― 障害児保育について			第 16 回	言語障害児の理解と援助
	第 2 回	障害の理解 ― 障害の定義と分類			第 17 回	気になる子どもの理解と援助 ― 被虐待児
	第 3 回	障害児保育の理念と形態			第 18 回	気になる子どもの理解と援助 ― 緘黙な子ども
	第 4 回	障害児保育の現状と課題			第 19 回	集団活動・生活習慣の援助 ― 基本姿勢
	第 5 回	わが国の障害児保育の歴史			第 20 回	集団活動・生活習慣の援助 ― 遊びと集団活動の援助
	第 6 回	知的障害児の理解と援助 ①			第 21 回	集団活動・生活習慣の援助 ― 基本的な生活習慣の援助
	第 7 回	知的障害児の理解と援助 ②			第 22 回	保育計画の作成 ― クラス全体の保育計画の作成
	第 8 回	肢体不自由児の理解と援助			第 23 回	保育計画の作成 ― 個別の保育計画の作成
	第 9 回	視覚・聴覚障害児の理解と援助			第 24 回	保護者・家庭への支援 ― 「障害の受容」と子育て
	第 10 回	広汎性発達障害の理解と援助 ①			第 25 回	保護者・家族への支援 ― 兄弟と親の関係
	第 11 回	広汎性発達障害の理解と援助 ②			第 26 回	関係機関との連携 ― 障害児に関わる福祉・教育施策
	第 12 回	注意／欠陥多動性障害（ADHD）の理解と援助 ①			第 27 回	関係機関との連携 ― 障害児に関わる機関
	第 13 回	注意／欠陥多動性障害（ADHD）の理解と援助 ②			第 28 回	関係機関との連携 ― 就学の手続きと小学校との連携
	第 14 回	学習障害（LD）の理解と援助 ①			第 29 回	就学前の障害児を巡る課題
	第 15 回	学習障害（LD）の理解と援助 ②			第 30 回	障害児の就学先を巡る課題
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 専門用語や医学的用語がたくさん出てくるので、混乱しないように予習をきちんとすること。			復習： 理解を深め、1つひとつが身につくようしっかり復習すること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（50％）、レポート（20％）、授業態度（30％）					
教 科 書	『保育者養成シリーズ 障害児保育』（林 邦雄・谷田貝公昭[監修]／青木 豊[編著]、一藝舎）					
参 考 文 献	適宜紹介する。					
注 意 事 項	分からない点については、そのままにしないでどしどし質問をすること。複数回、復習を兼ねたレポートの提出を求める。 ボランティアなどに参加し、日ごろから障害児（者）に関わる機会をもってほしい。 授業中の私語、飲食、携帯電話の使用は厳禁。					

授 業 科 目	障 害 児 保 育		単位数	2	担当教員	齋藤 新一
講 義 の 内 容	障害児保育とはどのようなものか、障害児の障害特性と行動特性の違い、基本的身辺自立技能の獲得方法、TEACCHプログラムの考え方による自閉症児支援、問題行動の捉え方やその解決方法、家族支援の在り方、関係機関との連携・協力について学ぶ。					
到 達 目 標	・ 知的発達症、自閉症スペクトラム、限局性学習症等の発達障害についてその特性と指導法を学ぶ。 ・ 障害児の問題行動をどのように捉え、どのように対応していくか、その支援方法を学ぶ。 ・ 障害児支援は家族との一貫した支援が不可欠であり、どのように家族支援を行っていくかを学ぶ。 ・ 障害児支援を行うための関係機関との連携について学ぶ。					
授 業 計 画	第 1 回	ガイダンス(学習の狙い、学ぶべき内容)			第 16 回	ダウン症の理解(ビデオ)
	第 2 回	現在の障害児者問題の現状			第 17 回	ダウン症の理解と保育
	第 3 回	障害児保育の仕組み①			第 18 回	注意欠如・多動性障害児の理解と保育
	第 4 回	障害児保育の仕組み②			第 19 回	限局性学習症児の理解と保育
	第 5 回	知的障害児の理解と保育			第 20 回	演習:問題行動の理解
	第 6 回	演習:基本的身辺自立技能習得支援の実際①			第 21 回	演習:問題行動に対する対処方法①
	第 7 回	演習: 基本的身辺自立技能習得支援の実際②			第 22 回	演習:問題行動に対する対処方法②
	第 8 回	自閉症児の理解と保育(ビデオ)			第 23 回	演習:問題行動の捉えと支援方法の立案
	第 9 回	DSM－5 による自閉症スペクトラム			第 24 回	障害を持っていけることを考える
	第 10 回	演習:自閉症児の理解と保育①			第 25 回	演習:総合的事例演習
	第 11 回	演習:自閉症児の理解と保育②			第 26 回	家族支援
	第 12 回	演習:自閉症児の理解と保育、構造化③			第 27 回	学校教育への引き継ぎ
	第 13 回	演習:自閉症児の理解と保育、構造化④			第 28 回	関係専門機関との連携の意義とその連携先①
	第 14 回	演習:障害児の事例検討			第 29 回	関係専門機関との連携の意義とその連携先②
	第 15 回	前期のまとめ			第 30 回	後期のまとめ
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：現在の社会の中で起きている、さまざまな障害児問題について、学生自身があらかじめ、新聞や雑誌等により、事前調査を行い、その実態について学ぶ。			復習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、レポート（２０％）、授業態度（３０％）					
教 科 書	特に指定しない。					
参 考 文 献	『よくわかる障害児保育』（尾崎康子他、ミネルヴェア書房）、『発達障害白書』（日本発達障害連盟） 『保育白書』（全国保育団体連絡会） その他の文献・資料等を参考・引用とする場合はその都度紹介していく。					
注 意 事 項	授業を妨げる行為(私語・携帯電話等)については、本人確認の上、席替え、その他の処置を講ずる。					

授 業 科 目	社 会 的 養 護 内 容		単位数	1	担当教員	志濃原 亜美
講 義 の 内 容	施設養護や里親など社会的養護の実際について学び、社会的養護における児童の権利擁護や保育士等社会福祉施設従事者の倫理について、また、ソーシャルワークの技術など専門的技術などを体系的に理解する。 さらに、個々に応じた支援計画の作成、記録の書き方、自己評価についても具体的に学ぶ。					
到 達 目 標	今まで学んできた社会福祉関連の知識や、施設実習で学んだ施設の実態などを話し合いや発表等の方法で体系的に理解し、自ら考え、発表し、問題意識を持つことで、社会的養護に関わる人や施設利用者について総合的に考える力を養う。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション				
	第 2 回	施設実習を振り返って				
	第 3 回	障害をもつ人の生活実態				
	第 4 回	社会的養護の実際①				
	第 5 回	社会的養護の実際②				
	第 6 回	テーマ選定				
	第 7 回	グループレポート作成				
	第 8 回	グループ発表内容の決定				
	第 9 回	グループ活動①				
	第 10 回	グループ活動①				
	第 11 回	グループ活動①				
	第 12 回	発表レジメ提出				
	第 13 回	発表準備確認				
	第 14 回	グループ発表①				
	第 15 回	グループ発表②				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： グループ活動の時期においては、発表に必要な資料等をあらかじめ調べるなどの予習をすること。			復習： グループ発表のための準備で分からないことばや今まで習ったことはあるが忘れてしまった用語などを見直す。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（２０％）、発表（６０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書	『保育士養成課程 社会的養護内容』（光生館）					
参 考 文 献	『最新保育資料集 2015』（ミネルヴァ書房） 参考文献は適宜紹介する。					
注 意 事 項	演習を中心とする。普段から児童問題に関心を持ち、主体的に授業に参加すること。					

授 業 科 目	社 会 的 養 護 内 容		単位数	1	担当教員	佐藤 千代子
講 義 の 内 容	本講義では、社会的養護の基本的仕組み、実施体系、社会的養護を担う主な児童福祉施設の概要、そこでの子どもの暮らしを知るとともに、職員の日常生活支援、治療的支援、自立支援等について学ぶ。また、社会的養護における児童の権利擁護やその仕組み、保育士の倫理と責務についても学ぶ。					
到 達 目 標	・ 児童福祉施設の概要と施設で行われている支援の実際について学ぶ。 ・ 援助を行う際に必要となる知識や技術を身につける。 ・ 児童の権利擁護や保育士の倫理および責務について学ぶ。 ・ 社会的養護が必要となる背景について理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	社会的養護の基本的な仕組み ― 社会的養護とは何か				
	第 2 回	社会的養護の実施体系				
	第 3 回	社会的養護の決定に関する基本的仕組み ― 児童相談所				
	第 4 回	施設養護の特性および実際 ― 乳児院				
	第 5 回	施設養護の特性および実際 ― 児童養護施設 ①				
	第 6 回	施設養護の特性および実際 ― 児童養護施設 ②				
	第 7 回	施設養護の特性および実際 ― 母子生活支援施設				
	第 8 回	施設養護の特性および実際 ― 児童自立支援施設				
	第 9 回	里親制度の特性および実際 ― 里親制度と養子縁組制度				
	第 10 回	支援の計画と内容 ― 子どもの自立支援の過程				
	第 11 回	支援の計画と内容 ― 自立支援計画の作成の実際				
	第 12 回	日常生活支援				
	第 13 回	治療的支援				
	第 14 回	子どもの権利を守る仕組み				
	第 15 回	保育士の倫理と責務				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 難しい用語が頻繁に出てくるので、必ず予習をして講義に臨むこと。			復習： 理解を深めるために、毎回復習をすること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、レポート（２０％）、授業態度（３０％）					
教 科 書	プリントを配布する。					
参 考 文 献	適宜紹介する。					
注 意 事 項	プリントや資料を使って分かり易い講義を行うが、分からない点があればそのままにしないで質問すること。 プリントは、ファイルにきちんと保管すること。複数回、復習を兼ねたレポートの提出を求める。 授業中の私語、飲食、携帯電話の使用は厳禁。					

授 業 科 目	保 育 内 容 総 論		単位数	1	担当教員	井口 正彦
講 義 の 内 容	子育てをめぐる社会状況は、出生率の低下により少子化が加速するなか平成27年4月より「子ども・子育て支援新制度」が施行される。また、国は幼稚園・保育園の一体型施設「認定こども園」の推進をしている。このように、子どもに関する状況の変化がめまぐるしくあるが、行政の対応する施策以上に家庭や社会の価値観が多様化している現状を学び、理解を深めていく。					
到 達 目 標	・ 保育所保育指針に基づく保育内容等の基礎的学習を通して、乳幼児への適切な保育方法を身につける。 ・ 0歳児から就学前児童を見通した保育についての理解を深めるとともに、保護者に対する支援についても理解し、その方法を学びとる。					
授 業 計 画	第1回	オリエンテーション				
	第2回	保育現場の現状について				
	第3回	保育所と幼稚園について				
	第4回	保育所保育指針・総則				
	第5回	保育所保育指針・子どもの発達				
	第6回	保育所保育指針・6か月未満児の保育の内容				
	第7回	保育所保育指針・6か月から1歳3か月未満児の保育の内容				
	第8回	保育所保育指針・1歳3か月から2歳未満児の保育の内容				
	第9回	保育所保育指針・2歳児の保育の内容				
	第10回	保育所保育指針・3歳児の保育の内容				
	第11回	保育所保育指針・4歳児の保育の内容				
	第12回	保育所保育指針・5歳児の保育の内容				
	第13回	保育所保育指針・6歳児の保育の内容				
	第14回	これからの子育て支援について				
	第15回	これまでのまとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 次回の授業使用部分の保育所保育指針を読んでおくこと。			復 習： 配布プリントを読み返しておくこと。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（60％）、レポート（20％）、授業態度（20％）					
教 科 書	『幼稚園教育要領・保育所保育指針（原本）』（文部科学省・厚生労働省、チャイルド社）					
参 考 文 献						
注 意 事 項	配布したプリント、資料等を使って講義を行う。保育現場での事例を取り入れる。					

授 業 科 目	保 育 内 容 総 論		単位数	1	担当教員	石河 信雅
講 義 の 内 容	保育内容は「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」そして「養護」の領域があり、専門的にはそれぞれの領域を別々に学んでいる。しかし、保育実践（教育）の場面ではそれらが当然のごとく、遊びや・生活の中で一体的に進められるのである。ですから、保育内容総論は実際の保育場面で、各領域が統合して行われる實際を理解し、保育実践にいかにか臨むかを事例に基づきながら学んでいく。					
到 達 目 標	1 保育所・幼稚園（幼保連携型認定こども園）に関する基本的事項を理解する。 2 子どもの発達と保育内容との関連について理解する。 3 各領域と保育内容について理解し、実際の保育場面での在り方を理解する。 4 保育の實際を総合的に理解し、今後の学びへの目標設定を再度見直す。					
授 業 計 画	第1回	オリエンテーション：保育内容総論の学びの意義を理解する。また、講義についての受講態度や講義内容について理解し各自意欲化を図る。幼稚園・保育園の概要を知る。				
	第2回	幼稚園教育要領・保育園保育指針（幼保連携型認定こども園保育要領）に基づく基本的な内容「5領域や養護」などについて概観し、「論」と「実践」の在り方を考察する。				
	第3回	保育の実際・遊びを中心とした生活。実際の保育場面を想定し、環境構成の重要性和遊びを通して子供は成長し様々な学びをすることを学ぶ。				
	第4回	発達と保育内容。子どもの発達と保育内容との関連性を実践例を通して学ぶ。そのことにより、子どもの発達を認識し実践の場面でどのように活用するかを理解し、認識しておくことの重要性を理解する。				
	第5回	年齢相当の保育2・3歳児。各年齢の成長・発達を確認し発達にあった保育内容についてこれまでの学びを統合して考え、理解する。				
	第6回	年齢相当の保育4・5歳児。各年齢の成長・発達を確認し発達にあった保育内容についてこれまでの学びを統合して考え、理解する。				
	第7回	環境と保育について学ぶ。保育は環境をとおして行うことが基本となることを理解し、環境構成の重要性を実際の例を通して学び、理解する。				
	第8回	絵本と保育。保育場面での紙芝居や絵本の読み聞かせ・素話の方法などを実体験することにより、その在り方を学び保育場面での活かし方を考察する。				
	第9回	望ましい保育者像。保育や保育者の質について考察し、どのような保育者を目指すかを考えていく。その際、共同的な学びを行い学生同士が他のものの考え方などを知り、お互いの学びを深める。				
	第10回	保育をめぐる最近の動向。特に少子化や地域社会の在り方の変容など子どもが育つ環境は大きく変貌し、今後も社会環境の変化は続いていく。そのような変化の動向を知る方法や変化への対応について考察する。				
	第11回	多様な保育ニーズ・・特に、気になる子の保育について学ぶ。近年幼児の社会も様々な外的要因から幼児の育ちに大きな影響が見受けられる。気になる子への保育の在り方を実践例をとおして学ぶ。				
	第12回	保幼小の連携について学ぶ。近年、小1プロブレムなどの課題が見受けられる。子どもたちは育ちの環境の変化に大きな戸惑いを見せている。子どもの育ちの環境や育ちの連続性について再考し、保幼小の連携について考察を深めていく。				
	第13回	保護者支援・地域との連携について学ぶ。核家族化などにより保護者の子育てへの支援が非常に重要になっている。支援の方法について事例をとおして学ぶ。また、地域社会との連携の在り方について事例をとおして学ぶ。				
	第14回	これからの保育に求められるもの。未来を生きる子どもたちを想像し、いまだどのような保育を行うことが必要なのかをこれまでの学びから考察し、保育の在り方を探求する。				
	第15回	まとめ・・学び続ける保育者へ・・保育環境は常に流動している。保育者はその流動性を感知し、常に学び、その学びを保育に活かしていかなければならない。今何をなすべきかを考え、行動できる保育者となれるよう自分自身を見直す。				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 講義内容について再度見直し自身で身に付けるようにする。また、関連内容について様々な方法を駆使して学びを深めるようにすること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（50％）、課題（30％）、授業態度（20％）					
教 科 書	『幼保連携型認定こども園教育・保育要領 幼稚園教育要領 保育所保育指針』＜原本＞ （内閣府・文部科学省・厚生労働省、チャイルド本社）					
参 考 文 献	講義の中で随時提示する					
注 意 事 項	教科書については、教育・保育要領や教育要領、保育指針の原本を所持していれば、それを使用する。 特にチャイルド本社のものである必要はない。					

授 業 科 目	保 育 内 容 (健 康)		単位数	1	担当教員	北洞 誠一
講 義 の 内 容	将来の子どもたちの真の自立を考えた時、保育者としてどのように考え、子どもたちに接して、働きかけたら良いかと言う課題に対して、健康面からアプローチしていきます。子どものみならず、自分自身についての健康の考え方、健康的な過ごし方、運動の必要性、食の問題等を学びます。					
到 達 目 標	自身にとっての健康とは何か？、また乳幼児期の健康とは何か？、を人間の発育発達の特徴を学ぶことにより理解する。 またそのことによって、保育者の立場としてどのように子ども達に働きかけていくかを考え理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	健康の考え方				
	第 2 回	保育内容「健康」のねらいと内容				
	第 3 回	乳幼児期の発育発達Ⅰ（身体の発達）				
	第 4 回	乳幼児期の発育発達Ⅱ（情緒・社会性・パーソナリティの発達）				
	第 5 回	乳幼児期の運動の必要性Ⅰ				
	第 6 回	乳幼児期の運動の必要性Ⅱ				
	第 7 回	最近の子ども達の問題点				
	第 8 回	前半のまとめ 食育				
	第 9 回	食の問題Ⅰ				
	第 10 回	健康生活Ⅰ（睡眠）				
	第 11 回	健康生活Ⅱ（体温）				
	第 12 回	ビデオ学習Ⅰ				
	第 13 回	ビデオ学習Ⅱ				
	第 14 回	ビデオ学習Ⅲ				
	第 15 回	全体のまとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 課題の部分の教科書に目を通すこと。			復習： その日に行った課題に関することを、インターネットを検索するなどして、関連分野を調べておくこと。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 筆記試験（60％）、レポート（20％）、授業態度（20％） ※講義の中で必要に応じて小テストをおこなう。					
教 科 書	『新版保育内容健康』（宮下恭子編、大学図書出版）					
参 考 文 献						
注 意 事 項	授業妨害行為（私語、無駄話、雰囲気乱す事等）やコミュニケーションを故意に取らない行為に対しては、教室から退去してもらう事があります。明らかな授業放棄（他の作業に従事、長時間の睡眠や繰り返しの睡眠）に対しても退去を要請します。指示に従わない場合は、欠席扱いや試験欠格者として扱います。体調が悪く、姿勢を維持できない場合はいつでも教師に申し出ること。出欠確認後の遅刻は、授業終了後に、入室時刻を伝えて、遅刻した旨を報告すること。申告のない場合は欠席扱いとなります。受け身で授業に参加するのではなく、保育の専門家となるべく積極的に知識や思考法を吸収しようとする事。必要に応じてビデオを鑑賞します。					

授 業 科 目	保 育 内 容（人 間 関 係）		単位数	1	担当教員	丸橋 聡美
講 義 の 内 容	保育内容の領域「人間関係」は、他の人々と親しみ支えあって生活するために、自立心を育て、人とのかかわる力を養う観点から設けられている。人とかかわりは、人とかかわりの心が深く結び合い、豊かなかかわりがもてるような集団が形成されることをめざすことが必要である。 子どもが人とのかかわる力を養っていくために保育者はどのような援助や指導を行なっていけばよいのかを学ぶ。					
到 達 目 標	子どもの人間関係について理解する。子どもを捉える視点を身につける。子どもとかかわり方や援助の仕方を身につける。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション、子どもについて考える				
	第 2 回	人とかかわりとは				
	第 3 回	保育の基本と人とかかわり				
	第 4 回	人とかかわりに関する領域「人間関係」				
	第 5 回	人とかかわりの発達（0,1,2 歳児）				
	第 6 回	人とかかわりの発達（3,4,5 歳児）				
	第 7 回	子どもの生活と人とかかわり				
	第 8 回	遊びのなかで育つ人とかかわり				
	第 9 回	遊びを通して育つ子どもの基本的な人とかかわり				
	第 10 回	遊びを通して育つ子どもの基本的な人とかかわり（事例検討）				
	第 11 回	人とかかわりを育てる保育の実践				
	第 12 回	人とかかわりの育ちをみる視点				
	第 13 回	人とかかわりの育ちをみる視点（事例検討）				
	第 14 回	人とかかわりを育てる保育者の視点				
	第 15 回	領域「人間関係」をめぐる諸問題				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 授業の内容を理解し、実践（実習やボランティア活動等）に活かす。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（50％）、課題（25％）、授業態度（25％）					
教 科 書	『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』・解説書					
参 考 文 献	『家庭支援の保育学』（編著 武藤安子・吉川晴美・松永あけみ、建帛社）					
注 意 事 項	講義を中心に行なう。 必要に応じてビデオ視聴を取り入れ、資料を配布しながら進める。					

授 業 科 目	保 育 内 容（環 境）		単位数	1	担当教員	中村 陽一
講 義 の 内 容	子どもは家庭・保育所・幼稚園・地域社会などの「物的環境」「人的環境」「自然環境」「社会環境」を中で生活し、その体験を通じて、人格形成の基礎となる豊かな心情、思考力や想像力、意欲や態度などが培われる。本講は、子どもの成長にとって必要な「環境」と、保育者に求められる援助について理解することを目的とする。					
到 達 目 標	1．「環境を通した保育」の意義と、保育者に求められる援助について理解する。 2．保育内容「環境」のねらいと内容を理解する。 3．子ども自然体験と保育者の適切な援助について具体的に学ぶ。					
授 業 計 画	第1週	保育と環境－「環境を通して行う保育」の特質、子どもの発達と環境との関わり				
	第2週	領域「環境」のねらいと内容－「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」のねらいと内容				
	第3週	子どもの生活と物的環境①－保育の環境構成（保育室、園舎、園庭など）				
	第4週	子どもの生活と物的環境②－活動の展開と保育者の援助				
	第5週	子どもの生活と自然環境①－自然体験と子どもの生活、季節を感じる保育				
	第6週	子どもの生活と自然環境②－園外保育、年間計画と具体的活動				
	第7週	動物の飼育－子どもと動物の関わり、飼育動物の特徴と配慮、実践例				
	第8週	植物の栽培－子どもと植物の関わり、栽培植物の特徴と配慮、実践例				
	第9週	子どもの生活と人的環境－保育者の役割、異年齢児との関わり、地域との関わり				
	第10週	子どもの生活と社会環境－情報と生活、行事との関わり、地域や施設との関わり				
	第11週	数量や文字に関する取り扱い－子どもの生活と数、子どもの生活と文字				
	第12週	保育内容「環境」に関わる指導計画－長期の計画、短期の計画、見通しを持った環境構成				
	第13週	保育内容「環境」に関わる教育思想の変遷－子どもとは何か、子どもの自発性と遊びの大切さ				
	第14週	小学校教育への連続性－保育内容「環境」と小学校教育の「生活科」と「総合学習」への連続性				
	第15週	授業の振り返りとまとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 授業の終わりに次回の内容と予習の方法について伝える。			復 習： 授業中に示す重要事項中心に復習すること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（70％）、授業態度（30％）					
教 科 書	『幼稚園教育要領・保育所保育指針（原本）』（文部科学省・厚生労働省、チャイルド本社） 『幼稚園教育要領解説』（文部科学省、フレーベル館） 『保育所保育指針解説書』（厚生労働省、フレーベル館） 『小学校学習指導要領』（文部科学省、東京書籍）					
参 考 文 献	必要に応じて紹介する。					
注 意 事 項						

授 業 科 目	保 育 内 容（環 境）		単位数	1	担当教員	北澤 明子
講 義 の 内 容	本講では、身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」の基本的な考え方について学ぶ。また、様々な環境とかかわる子どもの具体的な事例から、子どもの環境とのかかわり方について考え、環境と主体的に関わっていくための保育者の役割について考えていく。					
到 達 目 標	① 環境を通して行う保育（教育）について理解する。 ② 幼稚園教育要領、保育所保育指針が示す「環境」の意味、ねらいや内容について理解する。 ③ 乳幼児期の発達の特性を踏まえ、子どもが身近な環境とどのように出会い、かかわっていくのかについて学ぶ。 ④ 子どもが身近な「環境」と主体的にかかわっていくための保育者の役割について学ぶ。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーションー授業の進め方・参考文献等紹介ー				
	第 2 回	保育の基本と保育内容				
	第 3 回	領域「環境」のねらいと内容				
	第 4 回	子どもの発達と領域「環境」				
	第 5 回	領域「環境」の変遷と現代社会における子どもと環境				
	第 6 回	身近な環境とのかかわり①ー身近なものとかかわりについてー				
	第 7 回	身近な環境とのかかわり②ー身近なもので実際に遊んでみようー				
	第 8 回	身近な環境とのかかわり③ー身近な自然とかかわりについて考えるー				
	第 9 回	身近な環境とのかかわり④ー自然とかかわる実践について学ぶー				
	第 10 回	身近な環境とのかかわり⑤ー身近な人とかかわりについてー				
	第 11 回	身近な環境とのかかわり⑥ー文字や記号、数量、形とかかわりについてー				
	第 12 回	身近な環境とのかかわり⑦ー情報と生活、行事、地域とかかわりについてー				
	第 13 回	教育課程、保育課程と領域「環境」				
	第 14 回	環境構成と領域「環境」ー環境構成と保育者の役割について考えるー				
	第 15 回	まとめと振り返りー授業のまとめと振り返りの中で子どもにとって環境と関わる意義について確認するー				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』を読んでくこと。			復 習： 前回の内容を確認して授業に臨むこと。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（８０％）、レポート（１０％）、授業態度（１０％）					
教 科 書	『幼稚園教育要領解説』（文部科学省、フレーベル館） 『保育所保育指針解説』（厚生労働省、フレーベル館）					
参 考 文 献	『事例で学ぶ保育内容 領域 環境』（無藤隆監修・福元真由美 他編、萌文書林）					
注 意 事 項	必要な資料やレジュメは適宜、配布する。配布されたものを１冊にファイリングして授業の際に持参するように。					

授 業 科 目	保 育 内 容（言 葉）		単位数	1	担当教員	高原 典子
講 義 の 内 容	この教科では、乳幼児の言葉の獲得過程について学ぶと同時に、乳幼児の生活における遊びや人とのかわり言葉の発達と相互的にどのように影響し合うかについて、さまざまな事例を通して理解する。また、子ども及び保護者への適切な援助ができるように肯定的な言葉かけの演習を行なう。子どもの豊かな言葉を育むための児童文化財についても、保育実技力の向上を目指し演習の機会をつくる。					
到 達 目 標	①乳幼児の言葉の獲得過程を理解し、保育者としての援助の力を養う。 ②保育者として、子どもや保護者への適切な言葉かけと表現力を培う。 ③子どもの言葉を豊かに育む児童文化財（絵本・手あそび・紙芝居・素話・わらべうたなど）について学び、保育実技力を磨く。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーションおよび乳幼児の言葉を育む児童文化財について				
	第 2 回	乳幼児の生活における言葉の機能について				
	第 3 回	「領域 言葉」について、及び音声言語以外の言葉について				
	第 4 回	乳幼児の言葉の発達① 満 1 歳頃までの乳幼児の言葉の獲得について				
	第 5 回	乳幼児の言葉の発達② 満 1 ～ 2 歳頃までについての乳幼児の言葉の獲得について				
	第 6 回	乳幼児の言葉の発達③ 満 3 ～ 4 歳の子どもの言葉の獲得について				
	第 7 回	乳幼児の言葉の発達④ 就学前までの子どもの言葉や文字の獲得について				
	第 8 回	DVD「せんせいにもきかせて」を視聴し、園生活での子どもと保育者の言葉について考察する。				
	第 9 回	乳幼児の言葉の獲得についての復習				
	第 10 回	保育実践における事例を通して、保育者の言葉かけと援助のしかたを学ぶ①				
	第 11 回	保育実践における事例を通して、保育者の言葉かけと援助のしかたを学ぶ②				
	第 12 回	保育実践における事例を通して、保育者の言葉かけと援助のしかたを学ぶ③				
	第 13 回	保育者の言葉を育む演習				
	第 14 回	言葉の障害を持つ子どもへの援助について				
	第 15 回	言葉についての総括				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 次回のための予習については、前回の授業時に課題を出します。			復習： 授業中のワークシートを復習しておくこと。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（ ○ ）しない 筆記試験（ 3 0 %）、レポート（ 3 0 %）、実技（ 2 0 %）、授業態度（ 2 0 %）					
教 科 書	指定なし。教材については、授業中、必要に応じて印刷物を配布します。					
参 考 文 献	『演習 保育内容 言葉』（戸田雅美編著、建帛社）、『保育内容 言葉』（秋田喜代美ほか著、光生館） 『事例で学ぶ保育内容＜領域＞言葉』（無藤 隆監修、萌文書林）、『子どもとことば』（岡本夏木著、岩波新書） 幼稚園教育要領、保育所保育指針					
注 意 事 項	本教科では定期試験は行いませんが、単元終了ごとに小テストあるいは小レポートを行います。また第 4 週以降一人ひとり紙芝居の実演をしてもらいますので、各自よく練習して臨んでください。発表当番時に無断欠席した場合は減点になりますので、注意してください。					

授 業 科 目	保 育 内 容 （ 音 楽 表 現 I ）		単位数	1	担当教員	高崎 和子
講 義 の 内 容	保育内容の領域「表現」について、子どもの音楽表現に関する内容を中心に、その指導理念の講義と具体的な指導方法の演習を行う。理論的な部分の講義の他に実技演習を十分に行い、保育の実践転回のための基礎的な力を養う。					
到 達 目 標	・乳幼児の発達の特徴を理解し、音楽的成長を促すために必要な保育者の援助について理解する。 ・自らの感性を磨き、豊かな表現力を身につける。 ・子どもに的確な援助が行えるように、多くの教材と指導内容を身につける。					
授 業 計 画	第 1 回	領域「表現」の捉え方、領域「表現」のねらいと内容について				
	第 2 回	子どもの発達と音楽表現活動について				
	第 3 回	子どもの表現の援助者としての資質について				
	第 4 回	保育に於ける「わらべうた」あそびの意義と音楽的構造について				
	第 5 回	絵かきうたの演習				
	第 6 回	絵かきうたの創作・発表				
	第 7 回	パネルシアター（1）保育の中でのパネルシアターの効果的な活用				
	第 8 回	パネルシアター（2）うたを取り入れたパネルシアターの演習				
	第 9 回	乳児のふれあいうたあそび				
	第 10 回	生活のうた、手あそび				
	第 11 回	季節のうたあそび				
	第 12 回	行事と音楽				
	第 13 回	手あそびの創作（1）テーマの設定・作品の制作				
	第 14 回	手あそびの創作（2）作品の制作・練習				
	第 15 回	発表・まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 毎回の授業内容を復習し、自分のものになっているかを確認すること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（20％）、作品（20％）、実技（30％）、授業態度（30％）					
教 科 書	『実用こどものうた』（田口雅夫・高崎和子共編、カワイ出版）					
参 考 文 献						
注 意 事 項	・演習科目であるので出席を重視する。 ・グループによる創作活動は、自主的な態度で積極的に進めてほしい。					

授 業 科 目	保 育 内 容 （ 造 形 表 現 I ）		単位数	1	担当教員	豊泉 尚美
講 義 の 内 容	保育内容「表現」について、主に造形表現の教材研究を行います。 学生がそれぞれ自分の表現力を身につけ、子どもたちと関わるができるように支援していきます。 具体的には、実習のさい、自己紹介や部分実習の導入など応用して使えるグッズの制作、そしてパネルシアター制作を行い、発表します。					
到 達 目 標	1) 作品制作を計画的に進め、提出期日までに丁寧に作り上げる。 2) 十分に練習を重ね、子どもの前で明るく、のびのびと自分の作品を発表する。					
授 業 計 画	第 1 回	保育者の表現力について				
	第 2 回	表現するための造形教材についてーエプロンシアター・絵カード・パペットなど				
	第 3 回	自己紹介グッズ 制作（1）				
	第 4 回	自己紹介グッズ 制作（2）				
	第 5 回	パネルシアターについて（うた・手遊び・造形等を融合した総合的表現の教材として）				
	第 6 回	パネルシアター制作 （1） 作品を決める				
	第 7 回	パネルシアター制作 （2） 下絵を描く				
	第 8 回	パネルシアター制作 （3） 彩色する				
	第 9 回	パネルシアター制作 （4） 彩色する				
	第 10 回	パネルシアター制作 （5） しかけを作る				
	第 11 回	パネルシアターの演出（1） うたや手遊び、せりふの練習・姿勢や表情、声の出し方、絵の貼るかたなど				
	第 12 回	パネルシアターの演出（2）				
	第 13 回	パネルシアターの発表（1）				
	第 14 回	パネルシアターの発表（2）				
	第 15 回	パネルシアターの発表（3）				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 決められた時間内に制作が完了しない場合は、各自持ち帰り、作品を仕上げてくること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 作品（40％）、発表（40％）、授業態度（20％）					
教 科 書						
参 考 文 献	授業中に随時紹介する。					
注 意 事 項	制作に要する材料費は、自己負担とします。（パネルシアター材料費として、800 円～1700 円かかります。）					

授 業 科 目	保 育 内 容 （ 音 楽 表 現 Ⅱ ）		単位数	1	担当教員	高崎 和子
講 義 の 内 容	子どもの活動は一つの領域に留まらず、さまざまな領域に関連を持ちながら総合的に展開していくものであり、広い視野に立っての理解と実践が必要となる。 この授業では「音楽表現Ⅰ」で学んだ知識・技能を活かし、他領域と連携させながら総合的な表現活動について学んでいく。					
到 達 目 標	・子どもに的確な援助ができるように多くの教材と指導内容を身につける。 ・子どもの特性に応じた題材とその展開方法の理解を深める。 ・一つのテーマを他領域と関わりながら工夫して展開する能力を身につける。					
授 業 計 画	第1回	授業のねらいや進め方について				
	第2回	新しい子どものうたあそび（1）季節のうたあそび				
	第3回	新しい子どものうたあそび（2）じゃんけんあそび				
	第4回	新しい子どものうたあそび（3）ふれあいあそび				
	第5回	新しい子どものうたあそび（4）身体あそび				
	第6回	外国のあそびうた				
	第7回	行事と音楽				
	第8回	リズムカルなうたあそび				
	第9回	保育の中におけるリトミックの活用法				
	第10回	リズム楽器を用いたあそび				
	第11回	効果音としての音楽の使い方				
	第12回	総合的な表現活動の研究（1）表現形態・テーマの設定・イメージづくり				
	第13回	総合的な表現活動の研究（2）作品の制作				
	第14回	総合的な表現活動の研究（3）総合練習				
	第15回	発表・まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 毎回の授業内容を復習し、自分のものになっていかを確認すること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（20％）、作品（20％）、実技（30％）、授業態度（30％）					
教 科 書	『実用こどものうた』（田口雅夫・高崎和子共編、カワイ出版）					
参 考 文 献						
注 意 事 項	・演習科目であるので出席を重視する。 ・グループによる創作活動は、自主的な態度で積極的に進めてほしい。					

授 業 科 目	保 育 内 容 （ 造 形 表 現 Ⅱ ）		単位数	1	担当教員	豊泉 尚美
講 義 の 内 容	この授業では、幼児の造形表現について理解を深め、子ども一人ひとりの感性を尊重して、表現意欲を引き出すための、望ましい援助のありかたを考えます。 授業中は、学生に「様々な素材と出会って制作し、表現する」ということを子どもの側と保育者側、両方の視点に立って行うように求めます。					
到 達 目 標	・ 子どもの発達に即した造形活動の指導計画を立案できるようになること ・ 子どもの興味・関心から出発したテーマに沿って制作したり、表現したりすることの重要性を理解し、実践できること					
授 業 計 画	第 1 回	幼児の造形表現について				
	第 2 回	保育における造形活動 （1） フィンガーペインティング				
	第 3 回	保育における造形活動 （2） クレヨン・のり・はさみについて				
	第 4 回	保育における造形活動 （3） デザイナーに学ぶ「身近なものの面白さ発見」				
	第 5 回	保育における造形活動 （4） 自然と季節を感じる				
	第 6 回	幼児の発達と描画				
	第 7 回	造形活動の実践方法 （1） プロジェクト・アプローチについて				
	第 8 回	造形活動の実践方法 （2） プロジェクトを計画する				
	第 9 回	造形活動の実践方法 （3） テーマについての情報収集と話し合い				
	第 10 回	造形活動の実践方法 （4） 理解したことを表現するための制作 ①				
	第 11 回	造形活動の実践方法 （5）		②		
	第 12 回	造形活動の実践方法 （6）		③		
	第 13 回	造形活動の実践方法 （7）		④		
	第 14 回	発表の準備 ＝記録をまとめてポスターにする				
	第 15 回	発表				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：	グループワークが中心となるため、授業で予告した課題について、各グループで事前に話し合いをし、造形素材や道具を準備しておくこと。			復習：	
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（２０％）、課題（２０％）、作品（２０％）、発表（２０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書	『楽しい造形表現』（新井則夫・染谷哲夫・豊泉尚美 他、圭文社）					
参 考 文 献	『センス・オブ・ワンダー』（レイチェル・カーソン、新潮社） 『子どもたちの 100 のことば』（レッジョ・チルドレン、学習研究社）					
注 意 事 項						

授 業 科 目	保 育 指 導 方 法		単位数	2	担当教員	後田紀子・持橋章子
講 義 の 内 容	この授業を通して、幼児教育の目的や保育者の役割を知り、意欲をもって取り組めるようにする。保育者が子どもと心を通わせながら、さらに子どもの興味・関心・要求などを汲み取り、相互作用としての指導をどのように展開したらよいか、自ら導き出せるようにする。また、子ども理解、環境、遊びを通しての保育方法等の理解を深めることを目的とする。					
到 達 目 標	・保育者としての基本的な姿勢や技能を身に付けることができるようにする。 ・幼児の感性や創造性を育てるための実践的な指導力を身に付けることができるようにする。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション		第 16 回	オリエンテーション	
	第 2 回	保育方法とは何かを考える		第 17 回	児童文化財としての「影絵」	
	第 3 回	子ども理解から始まる保育方法を考える		第 18 回	影絵遊び①	
	第 4 回	環境を生かした保育方法を考える		第 19 回	影絵遊び②	
	第 5 回	保育室をデザインする		第 20 回	影絵劇制作に向けて～上演環境・方法についての検討	
	第 6 回	園庭の環境を考える		第 21 回	影絵劇制作①グループ分け・役割決め・立案	
	第 7 回	園行事の考え方と保育指導について①		第 22 回	影絵劇制作②シナリオづくり ～制作	
	第 8 回	園行事の考え方と保育指導について②		第 23 回	影絵劇制作③シナリオづくり ～制作	
	第 9 回	遊びによる総合的指導について		第 24 回	影絵劇制作④制作 ～中間仕上げ	
	第 10 回	児童文化財の活用方法①（課題）		第 25 回	影絵劇稽古⑤音楽・効果音の研究	
	第 11 回	児童文化財の活用方法②（グループワーク）		第 26 回	影絵劇稽古⑥音楽・効果音の研究	
	第 12 回	児童文化財の活用方法③（まとめ）		第 27 回	影絵劇稽古⑦演技の研究	
	第 13 回	発表		第 28 回	影絵劇稽古⑧演技の研究 ～リハーサル	
	第 14 回	指導計画と保育指導方法について①		第 29 回	影絵劇発表	
	第 15 回	指導計画と保育指導方法について② ～振り返り		第 30 回	ふりかえり ～ブラッシュアップ	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： ・課題に沿って自分なりの考えをまとめ、当日発表と提出をする。			復習： ・毎回授業後、内容のまとめと自分の課題を見つけるようにする。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（１０％）、課題（１０％）、作品（１５％）、発表（２５％）、実技（１０％） 授業態度（３０％）					
教 科 書						
参 考 文 献						
注 意 事 項	・実習期間を考慮し、授業内容の順番が変更することもある。 ・授業には積極的に参加をし、実践力を身に付けるよう心がける。 ・個人発表やグループ発表を行うため、欠席をしないようにする。 ・授業内での教材・材料等を各自で用意をすることがあるので、指示や連絡等をよく聞くこと。					

授 業 科 目	乳 児 保 育		単位数	2	担当教員	岡本 良子
講 義 の 内 容	地域の子育て支援としての乳児保育の役割と保育の実践とを結びつけて理解できることを目的とする。 授業では、まず、乳児期の成長発達と援助について乳児保育の基礎的知識を習得する。次に、乳児保育の歩みや乳児保育が必要となる背景を理解し、さらに関係機関の役割や連携について学ぶ。					
到 達 目 標	1、乳児期の子どもの成長発達と保育実践のための基礎的知識を習得する。 2、乳児保育の歴史を通して社会保障としての乳児保育の意義を理解する。 3、現在の子育て社会の問題と乳児保育の必要性を理解する。 4、様々なソーシャル・サポートとの連携に基づいた保育士の役割を認識する。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション 乳児保育とは何か		第 16 回	2歳児とそれからの成長発達と援助 （ 精神的発達と援助：言葉 ）	
	第 2 回	乳児の成長発達 保育園の 1 日		第 17 回	乳児期の基本的生活習慣と援助 （ 食 事 ）	
	第 3 回	遊び 妊娠～誕生		第 18 回	乳児期の基本的生活習慣と援助 （ 睡 眠 ）	
	第 4 回	新生児の成長発達と援助 （ 成長発達の特徴 ）		第 19 回	乳児期の基本的生活習慣と援助 （ 排 泄 ）	
	第 5 回	新生児の成長発達と援助 （ 保育内容と適切な援助 ）		第 20 回	乳児期の基本的生活習慣と援助 （ 健康と安全 ）	
	第 6 回	1～4か月児の成長発達と援助 （ 形態的成長、機能的発達・精神的発達と援助 ）		第 21 回	社会保障としての乳児保育の変遷 （戦後の社会福祉基礎構造の確立）	
	第 7 回	5～12か月児の成長発達と援助 （ 形態的成長 ）		第 22 回	社会保障としての乳児保育の変遷 （高度経済成長、社会福祉基礎構造改革）	
	第 8 回	5～12か月児の成長発達と援助 （ 機能的発達と援助 ）		第 23 回	乳児保育の必要性 （ 親になるということ ）	
	第 9 回	5～12か月児の成長発達と援助 （ 精神的発達と援助 ）		第 24 回	乳児保育の必要性 （ 子育ての現状：育児不安 ）	
	第 10 回	1歳児の成長発達と援助 （ 形態的成長、機能的発達と援助 ）		第 25 回	乳児保育の必要性 （ 子育ての現状：仕事と育児の両立 ）	
	第 11 回	1歳児の成長発達と援助 （ 精神的発達と援助：対人関係 ）		第 26 回	乳児保育の必要性 （ 子育ての現状：ひとり親家庭 ）	
	第 12 回	1歳児の成長発達と援助 （ 精神的発達と援助：言葉 ）		第 27 回	乳児保育の必要性 （ 子育ての現状：虐待 ）	
	第 13 回	2歳児とそれからの成長発達と援助 （ 形態的成長、機能的発達と援助 ）		第 28 回	社会福祉と保育士	
	第 14 回	2歳児とそれからの成長発達と援助 （ 精神的発達と援助：自我の芽生え ）		第 29 回	関係機関との連携	
	第 15 回	前期の振り返りとまとめ		第 30 回	1年間の振り返りとまとめ	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 日頃から身近な場で乳児に接したり、ニュース・新聞等で子育てに関する出来事やベビーカーのマナー等にも関心や問題意識を持つよう心がけること。			復 習： 各回で学んだ内容と広い意味での乳児保育の目的とを関連づけて考えられるように意識していくこと。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 筆記試験（70％）、授業態度（30％）					
教 科 書	授業にてプリント配布する。					
参 考 文 献	『新・乳児の生活と保育』（松本園子 編著、ななみ書房）、 『乳児保育』（CHS 子育て文化研究所、萌文書林） 『保育士のための福祉講座 ソーシャルワーク』（保正友子 編著、相川書房）					
注 意 事 項	授業中の私語、携帯電話等の使用、飲食、化粧等講義に支障となる行為は禁止する。					

授 業 科 目	指 導 技 術		単位数	2	担当教員	鹿戸一範・小口偉
講 義 の 内 容	保育現場で必要とされる指導技術のうち、特に音楽と造形について実践的に学ぶ。 〈音楽〉：多くの保育現場で実際に使用されている「生活のうた」を中心に、ピアノ伴奏、及び弾き歌いの技術を学ぶ。また、コードネームの基礎を学び、簡単な伴奏づけを実践する。 〈造形〉：子どもの実際の活動をもとにした個人・合同・共同制作を行うことを通して、環境づくりのための留意点について考察する。また、保育で取り入れられる造形的表現活動と、他領域や子どもの育ちとの関連性について理解を深める。					
到 達 目 標	①幼稚園教諭や保育士として現場で必要となる様々な「生活のうた」の弾き歌いができる。 ②コードネームを用いた簡単な伴奏づけができる。 ③表現活動や遊びを援助していくための視点（道具や素材といった物的側面と、心的側面から）の獲得と、保育者として知っておきたい指導法のためのポイントを身につける。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション（講義内容・履修上の注意等）		第 16 回	こいのぼり制作 1	
	第 2 回	生活のうた「おはよう」 ハ長調の主要三和音とコードネーム①		第 17 回	こいのぼり制作 2	
	第 3 回	生活のうた「おはようのうた」 ハ長調の主要三和音とコードネーム②		第 18 回	新聞紙での遊び 1	
	第 4 回	生活のうた「おててをあらいましょう」 ハ長調の主要三和音とコードネーム③		第 19 回	新聞紙での遊び 2	
	第 5 回	生活のうた「おやつ」 ハ長調の主要三和音とコードネーム④		第 20 回	合同制作と共同制作 1 制作のきっかけについて	
	第 6 回	検定① 「おはよう」「おはようのうた」「おててをあらいましょう」「おやつ」		第 21 回	合同制作と共同制作 2 展開について	
	第 7 回	生活のうた「おべんとう」 ヘ長調の主要三和音とコードネーム		第 22 回	幼児とえのぐ	
	第 8 回	生活のうた「おむねをはりましょ」 ト長調の主要三和音とコードネーム		第 23 回	幼児と粘土	
	第 9 回	生活のうた「おかたづけ」 三和音の種類とその他のコードネーム①		第 24 回	幼児とクレヨン、パス	
	第 10 回	生活のうた「おへんじハイ」 三和音の種類とその他のコードネーム②		第 25 回	指導教材制作 1 しかけを用いて	
	第 11 回	検定② 「おべんとう」「おむねをはりましょ」「おかたづけ」		第 26 回	指導教材制作 2 しかけを用いて	
	第 12 回	生活のうた「おかえりのうた」 コードネームを用いた伴奏づけ①		第 27 回	指導教材制作 3 気持ちを沿わせて動かし遊ぶ	
	第 13 回	生活のうた「さよならのうた」 コードネームを用いた伴奏づけ②		第 28 回	指導教材制作 4 室内装飾	
	第 14 回	生活のうた「こもりうた」 コードネームを用いた伴奏づけ③		第 29 回	季節と制作 1	
	第 15 回	検定③ 「おかえりのうた」「さよならのうた」「こもりうた」		第 30 回	季節と制作 2	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 〈音楽〉：実習や将来の現場での活動をイメージして、授業時間以外での個人練習は必ず行い、課題曲の弾き歌いを確実にできるようにしておく。			復習： 〈造形〉：授業中の制作物について振り返り、ねらいや制作手順に関することなどをノートにまとめておく。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 〈音楽〉：レポート（２０％）、実技（６０％）、授業態度（２０％） 〈造形〉：課題（２０％）、作品（２０％）、発表（２０％）、授業態度（４０％） この二つの分野の評価を合計して評価する。					
教 科 書	〈音楽〉：授業時にプリントを配布する。 〈造形〉：『保育園・幼稚園の造形あそび』（鮫島良一・馬場千晶、成美堂出版）					
参 考 文 献	〈造形〉：『造形と子ども 子どもの造形表現ドキュメント』（加藤裕之・鮫島良一・菅原順一、すずき出版）					
注 意 事 項	〈造形〉：作品の出来栄は重視しません。誠実に、積極的に取り組むこと。					

授 業 科 目	指 導 技 術		単位数	2	担当教員	遠藤 朋子
講 義 の 内 容	幼児の発達段階に沿った育ちを知り、興味・関心をひきだせるような授業方法を身につける。各教科で培った知識を総合的に活用し、保育者として必要な心構えや専門性を高め、保育現場ですぐに役立つ指導技術を習得する。 「育ての心」を通し、子どもとかかわる人としての基本を知る。					
到 達 目 標	・子どもの発達の特徴を知ると共に、子どもの興味・関心をとらえる目を養う。 ・子どもに適した絵本やおはなし等を選ぶ力をつける。 ・子どもの反応を読みとる力をつけ、実践力をたかめる。 ・人的環境として子どもの良き手本となる努力をし、保育者としての資質をたかめる。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション・幼稚園の現状		第 16 回	保育者としての資質②	
	第 2 回	幼稚園教育の基本と一日の生活		第 17 回	子どもとのかかわり（個と集団）	
	第 3 回	保育者の役割と環境設定		第 18 回	子どもとのかかわり（配慮を要する子ども）	
	第 4 回	保育者としての資質①		第 19 回	視覚教材の活用（ペープサート）	
	第 5 回	絵本とおはなしの世界を楽しむ		第 20 回	視覚教材の活用（パネルシアター・エプロンシアター）	
	第 6 回	発声練習と絵本の選び方		第 21 回	行事へのとりくみ	
	第 7 回	絵本の持つ力を考える		第 22 回	教育実習にむけて（部分実習）	
	第 8 回	おはなしの世界をめぐる		第 23 回	教育実習を終えての課題を考える	
	第 9 回	想像力を育むおはなし		第 24 回	手作り教材の作成（牛乳パック）	
	第 10 回	手遊びの場面活用法		第 25 回	手作り教材の作成（ロール芯）	
	第 11 回	手遊びの実習		第 26 回	手作り教材の作成（紙コップ他）	
	第 12 回	教材の特徴と活用方法（紙芝居）		第 27 回	手作り教材の活用方法	
	第 13 回	教材の特徴と活用方法（折り紙・新聞紙あそび）		第 28 回	手作り教材の応用と実習	
	第 14 回	教材の特徴と活用方法（ハンカチあそび・手品）		第 29 回	保護者との対応	
	第 15 回	教材の特徴と活用方法（手作りおもちゃ）		第 30 回	保育者としての資質③ （資質をたかめる）	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 発声練習をおこなう。			復習： その日に学んだことをまとめておくこと。 （後日レポートを書き提出していただきます）		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（４０％）、発表（３０％）、授業態度（３０％） ※発表には実技も含まれます					
教 科 書	『育ての心（上・下）』（倉橋惣三、フレーベル館） 『実習に役立つ保育技術』（百瀬ユカリ、創成社）					
参 考 文 献	必要に応じて紹介する。					
注 意 事 項	授業内容によって教材・材料等を各自が用意することがあるので、指示に従いそろえること。					

授 業 科 目	教 育 相 談		単位数	2	担当教員	加賀谷 崇文
講 義 の 内 容	教育相談は、家庭や幼稚園における子どものさまざまな問題について、その望ましい解決に向けて助言や援助指導を行なう実践活動である。昨今子どもの成長過程を認識せずに親になっている大人が少なからずいて解決困難な場合が生じており、教育相談活動は複雑な様相を呈してきた。 授業では、援助の前提となる子どもの発達とよく起こりえる問題を紹介していく。また、相談の実践に必要な援助技術として、心理カウンセリングなどの技法を紹介していく。					
到 達 目 標	1. 相談の方法を知ること。 2. 教育場面での相談のイメージを具体的に持つこと。 3. 子どもの心の問題に対して共感的理解を持つこと。					
授 業 計 画	第 1 回	教育相談とは何か？				
	第 2 回	教育相談の意義と歴史的背景				
	第 3 回	教育相談とカウンセリング				
	第 4 回	カウンセリングの技法①				
	第 5 回	カウンセリングの技法②				
	第 6 回	カウンセリングの技法③				
	第 7 回	子どもの発達				
	第 8 回	子どもに多く見られる心理的問題①				
	第 9 回	子どもに多く見られる心理的問題②				
	第 10 回	子どもに多く見られる心理的問題③				
	第 11 回	発達の問題①				
	第 12 回	発達の問題②				
	第 13 回	保護者の悩み				
	第 14 回	保護者との手紙				
	第 15 回	まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 幼稚園教育要領を読んでおくこと。			復習： 授業内容を振り返ること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（90％）、授業態度（10％）					
教 科 書	刊行前のため発売の決定後通知する。					
参 考 文 献						
注 意 事 項	自分自身が将来現場に出ることを想定して、当事者意識を持って授業に臨むこと。					

授 業 科 目	教 育 相 談		単位数	2	担当教員	伊藤 明芳
講 義 の 内 容	教育相談は、保育者が相談者（主に保護者）に対して、家庭や幼稚園における子どもの教育上の問題について、その望ましい解決に向けて助言や援助指導をおこなう実践活動である。 背景に発達や環境の要因があると推測される子どもの問題行動から保護者の養育不安まで、相談内容は多岐にわたる。これからの保育者には保護者の心へのサポートもより意識的に求められるようになると考えられる。 本講義では、教育相談の基礎的知識の習得と現場で活きる教育相談の実践的能力の育成を図る。さらに、保育者自身の心の安定と成長にもアプローチしたいと考えている。					
到 達 目 標	カウンセリングの基本を学び、保育の実践に活かすことを考え、保育者として、多様な子どもや保護者の問題を理解して、相談者の心に寄り添う相談実践を勇気を持っておこなえるようになること。					
授 業 計 画	第 1 回	1. イントロダクション 教育相談とは何か				
	第 2 回	2. 体験から学ぶ相談に必要なこと ロールプレイ(1) [相談を受ける時の基本姿勢]				
	第 3 回	ロールプレイ(2) [意思を通じあうこと]				
	第 4 回	3. 相談実践の基本と応用 教育相談の基礎(1) [概要]				
	第 5 回	教育相談の基礎(2) [実践へのヒント]				
	第 6 回	教育相談のためのカウンセリング活用				
	第 7 回	教育相談のための心理アセスメント				
	第 8 回	教育相談のプロセス				
	第 9 回	4. 事例から学ぶ教育相談 子どもの心の発達・心の問題(1) [登園渋り]				
	第 10 回	子どもの心の発達・心の問題(2) [落ち着きなし]				
	第 11 回	子どもの心の発達・心の問題(3) [保護者の心]				
	第 12 回	5. 保育者の心の健康を育む カウンセリングの理論				
	第 13 回	エンカウンター実習				
	第 14 回	まとめ				
	第 15 回	今後へのアドバイスと試験				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 知識の定着をおこない、学んだことを実際の場面でどう活かすか考える。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（８０％）、課題（２０％）					
教 科 書	特に指定しない					
参 考 文 献	講義の中で必要に応じて適宜紹介する					
注 意 事 項	講義を中心におこなう。実際の事例などをあげ、受講生にわかりやすい内容を心がけたい。その他、ロールプレイ、エンカウンター等も取り入れ、相談やカウンセリング等の体験的な学習もおこないたい。 相談を受けて人に関わるとき、保育者には人間的かつ専門的な総合力が必要になる。そこで、受講者には積極的に授業に参加し、自ら学び考える意欲を持つことが求められる。					

授 業 科 目	教 育 相 談		単位数	2	担当教員	今水 豊
講 義 の 内 容	教育相談は、家庭や幼稚園における子どものさまざまな問題について、その望ましい解決に向けて助言や援助を行う実践活動である。もちろんその有用性は保育園においても同様である。 授業ではまず援助の前提となる子どもの発達の総まとめをする。次に子どもに起こりうる問題と相談場面の実際を紹介していく。					
到 達 目 標	よって本科目では、 ・発達を多角的に理解すること ・相談に必要な臨床心理学的な見立てについて理解すること ・援助技術の向上 を達成目標とする。					
授 業 計 画	第 1 回	Ⅰ 教育相談とは何か 相談の必要性				
	第 2 回	Ⅰ 教育相談とは何か 相談のながれ				
	第 3 回	Ⅱ 子どもの発達の特徴 発達の表の作成（身体・運動・言語の発達）				
	第 4 回	Ⅱ 子どもの発達の特徴 発達の表の作成（認知・親子関係の発達）				
	第 5 回	Ⅱ 子どもの発達の特徴 発達の表の作成（親子関係の発達）				
	第 6 回	Ⅱ 子どもの発達の特徴 発達の表の作成（社会心理的発達）				
	第 7 回	Ⅲ 子どもに見られる発達・心理的問題 A. 発達障害の実際				
	第 8 回	Ⅲ 子どもに見られる発達・心理的問題 A. 特別支援教育				
	第 9 回	Ⅲ 子どもに見られる発達・心理的問題 A. 養育者の実際				
	第 10 回	Ⅲ 子どもに見られる発達・心理的問題 B. 虐待				
	第 11 回	Ⅲ 子どもに見られる発達・心理的問題 C. 大震災と PTSD				
	第 12 回	Ⅲ 子どもに見られる発達・心理的問題 C. 心のケアの実際				
	第 13 回	Ⅳ 相談の実際 教育相談の意義				
	第 14 回	Ⅳ 相談の実際 遊戯療法				
	第 15 回	Ⅳ 相談の実際 遊戯療法の実際				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 普段から上記のキーワードに関する記事やニュース、話題を意識しておくことが望ましい。			復習： わからない内容や疑問に思うことは、授業後質問して理解すること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、課題（３０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書	適宜、資料を配布する。					
参 考 文 献	授業にて適宜紹介する。					
注 意 事 項	講義形式で行う。 教育相談では、保護者の相談ごとに耳を傾け、その心情を理解する謙虚な態度が不可欠である。その姿勢を身につけるためにも、授業をしっかり聞き理解するという構えを求める。					

授 業 科 目	教 育 相 談	単位数	2	担当教員	大熊 美佳子
講 義 の 内 容	教育相談は、家庭や幼稚園における子どものさまざまな問題について、その望ましい解決に向けて助言や援助指導を行う実践活動です。本講義では、保育者として、子どもや周囲の人々に適切な支援を行うために必要な基礎知識、技法、心得の習得を目的とします。				
到 達 目 標	①子どもの発達にともない変化するさまざまな問題を理解する ②教育相談の基礎知識を習得する ③相談実践に必要な援助技術を学ぶ				
授 業 計 画	第 1 回	教育相談とは			
	第 2 回	子どもの発達①			
	第 3 回	子どもの発達②			
	第 4 回	子どもの発達③			
	第 5 回	子どもの心と親子関係①			
	第 6 回	子どもの心と親子関係②			
	第 7 回	子どもの気になる行動と発達の問題①			
	第 8 回	子どもの気になる行動と発達の問題②			
	第 9 回	子どもの気になる行動と発達の問題③			
	第 10 回	カウンセリングの技法①			
	第 11 回	カウンセリングの技法②			
	第 12 回	カウンセリングの技法③			
	第 13 回	保護者への支援①			
	第 14 回	保護者への支援②			
	第 15 回	まとめ			
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習：	配布するプリントを中心に、各回の授業内容を復習し、疑問点があれば次回に確認すること。
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（60％）、課題（20％）、授業態度（20％）				
教 科 書	特になし				
参 考 文 献	講義の中で適宜紹介します。				
注 意 事 項	講義形式で行います。 相手の話に耳を傾けること、相手の心に寄り添うことなど教育相談において必要な心得を身につけ、将来に役立てるためにも、自分が相談を受ける立場であったら、どのように対応するかをイメージしながら授業に参加する態度を望みます。				

授 業 科 目	教 育 実 習	単位数	4	担当教員	後田紀子・北澤明子
講 義 の 内 容	教育実習は、幼稚園教諭の免許状を取得するための必須科目である。既に学習した講義、演習等の専門教育科目を総合的に整理して、幼稚園教育現場での園児、教職員等とのかかわりと実践活動を通して幼稚園教諭（保育者）としての資質を習得していくことを目的とする。				
到 達 目 標	・教育実習の意義を理解し、課題をしっかりと持ち実習に臨むことをする。 ・学校で学んだことと保育者としての能力や資質をしっかりと身に付けることができる。				
授 業 計 画	○前期：見学、観察実習・参加実習 実際の教育現場で、園児、教諭（保育者）の実践活動の状況を見学、観察をしたり、参加することにより幼稚園教育の意義、教職員の職務内容や、人的、物的環境が、実際の教育の中で、どのように活かされているかを理解する。また、 （１）一週間と一日の教育の流れを理解する。 （２）園児の活動の様子を理解する。 （３）教諭（保育者）の職務内容と教育活動を理解する。 （４）教諭（保育者）としての自覚を確認する。 ○後期：参加実習・指導実習 前期実習での体験を基に、園児と積極的に関わり、指導の実地経験を積む。学校で学んだ理論や技術を実際の現場での指導体験と結びつけ、自らの保育観、目標を確立する。 （１）幼稚園教育の実際を体験し、教諭（保育者）としての指導力、技能を身につける。 （２）教諭（保育者）の立場に立って指導計画を立案し、その指導を体験する。 （３）園児の安全、衛生面に対する配慮と措置について習得する。 （４）一人一人の園児についての理解を深め、適切な対応と指導を体験する。 （５）教諭（保育者）としての責任感、使命感を学び、園児のための環境づくりを考える。				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 実習に必要な教材研究を行う。 ピアノの練習を行う。		復習： 実習後に自身の振り返りを行い、自己課題を明確にする。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（３０％）、課題（３０％）、授業態度（３０％）、諸手続き（１０％）				
教 科 書	『実習の手引き』（実習委員会）				
参 考 文 献	必要に応じて紹介する。				
注 意 事 項	各実習園に対する注意事項の説明、提出書類の作成等を行うので、原則として欠席は認めない。また、実習提出書類の遅延、授業態度の怠惰等は「実習派遣規制基準」によって禁じられており、実習派遣ができなくなるので十分に留意すること。				

授 業 科 目	幼 児 教 育 研 究		単位数	1	担当教員	後田紀子・北澤明子
講 義 の 内 容	教育実習の準備を行う。教育実習と平行して行われる授業で、実習の目的、幼稚園の機能、幼稚園教諭の職務内容や実習手続き書類の作成について学習をする。また、幼稚園教育要領の内容を理解し、実習生として幼稚園生活に参加することをイメージする。子どもを理解し、援助の仕方に関する理解を深め、観察、参加、責任実習の段階における実習内容、実習記録、指導計画について学習することを目的とする。					
到 達 目 標	・教育実習の事前準備としての心構えをしっかりと理解し、態度や意欲を持つようにする。 ・積極的に授業に参加をし、実習の課題を明確できる。 ・保育者としての能力・資質を身に付けつることがどういうことか理解をし、実習で生かせるようになる。					
授 業 計 画	第 1 回	幼稚園教育実習の意義、目的、心得			第 16 回	後期実習の目的（参加、責任指導実習）
	第 2 回	教育実習の目的理解			第 17 回	後期実習参加の心得
	第 3 回	前期実習の目的（参加、観察実習）			第 18 回	部分、責任指導実習の留意点
	第 4 回	前期実習参加の心得			第 19 回	実習日誌の作成指導①
	第 5 回	実習手続き書類の作成指導①			第 20 回	実習日誌の作成指導②
	第 6 回	実習手続き書類の作成指導②			第 21 回	実習日誌の作成指導③
	第 7 回	オリエンテーションについて			第 22 回	指導計画案の作成指導①
	第 8 回	持ち物、身だしなみについて			第 23 回	指導計画案の作成指導②
	第 9 回	幼稚園の一日の流れと実習日誌の書き方			第 24 回	指導計画案の作成指導③
	第 10 回	参加、観察実習の留意点			第 25 回	指導計画案の作成指導④
	第 11 回	実習日誌の作成指導①			第 26 回	実習課題と準備の説明
	第 12 回	実習日誌の作成指導②			第 27 回	オリエンテーション報告書、実習報告の作成
	第 13 回	実習課題と準備の説明①			第 28 回	実習評価と反省
	第 14 回	実習課題と準備の説明②			第 29 回	教育実習全体を通しての反省
	第 15 回	実習評価と反省			第 30 回	まとめ
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 手遊び・絵本等の教材研究をする。 保育技術・方法等の知識を増やし、実践できるようにする。			復習： 授業を通し、足りない部分の補足をしっかり行う。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（３０％）、課題（３０％）、授業態度（３０％）、諸手続き（１０％）					
教 科 書	『実習の手引き』（実習委員会）					
参 考 文 献						
注 意 事 項	各実習園に対する注意事項の説明、提出書類の作成等を行うので、原則として欠席は認めない。また、実習提出書類の遅延、授業態度の怠惰等は「実習派遣規制基準」によって禁じられており、実習派遣ができなくなるので十分に留意すること。					

授 業 科 目	保育・教職実践演習（幼稚園）		単位数	2	担当教員	小堀・豊泉・後田・丸橋
講 義 の 内 容	これまでの教科に関する科目及び教職に関する科目の履修状況を踏まえ、保育者として必要な、知識及び技術を修得したことを確認していくものである。 保育現場の視点を取り入れ、保育者としての最低限必要な資質能力を明確にし、多様な演習形式によりこれまでに不足していると思われる知識、技術を各自が認識し、積極的に身につけられるような取り組み内容を展開する。					
到 達 目 標	①保育者として現場に出るために最低限必要な知識・技術を身につけること。 ②これまで授業や実習を通して学んできたことを整理し包括的に理解すること。					
授 業 計 画	第 1 回	保育・教職実践演習（幼稚園）の授業の進め方について・これまでの学修の振り返りについて				
	第 2 回	保育者の役割、職務内容、子どもに対する責任等について①（講義・レポート）				
	第 3 回	保育者の役割、職務内容、子どもに対する責任等について②（グループ討議）				
	第 4 回	組織の一員としての自覚について（講義・レポート）				
	第 5 回	保護者や地域の関係者との人間関係の構築について（講義・グループ討議）				
	第 6 回	幼児理解について①（講義・レポート）				
	第 7 回	幼児理解について②（グループ討議・ロールプレイング）				
	第 8 回	学級経営・学級経営案の作成について（講義・レポート）				
	第 9 回	学級経営について（グループ討議）				
	第 10 回	実技指導①（音楽表現）				
	第 11 回	実技指導②（造形表現）				
	第 12 回	実技指導③（身体表現）				
	第 13 回	保育内容・保育内容の指導力について（講義・レポート）				
	第 14 回	保育内容の指導力について（グループ討議）				
	第 15 回	資質能力の確認、まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 授業前に課される事前課題に取り組んでおくこと。			復 習： 継続性のある課題を行っていくので、授業内容を確実に理解しておくこと。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（５０％）、授業態度（５０％）					
教 科 書	必要に応じて資料を配布する。					
参 考 文 献	必要に応じて随時紹介する。					
注 意 事 項	毎回のテーマに沿って、講義、レポート作成、グループ討議を行っていくので、各自が積極的に取り組むこと。 毎回の内容を積み上げながら進めていくので、欠席しないこと。					

授 業 科 目	保 育 所 実 習 I		単位数	2	担当教員	丸橋聡美・富山大士
講 義 の 内 容	保育士証取得を目的とする保育実習は、保育に関する講義や演習で学んできた内容を保育所及び保育所以外の児童福祉施設等で実践するものである。保育所実習のうち前期実習が保育所実習Ⅰとなる。（後期実習は、保育所実習Ⅱとして実施）					
到 達 目 標	保育所の生活に参加し、観察や子どもとのかかわりを通して子どもへの理解を深める。保育所の役割や機能、職務倫理について学び理解する。日々の保育の展開、保育の計画や記録の仕方を体験し、実践できるようにする。自己評価をする。保育士としての業務内容を体験する。 第1学年（二部は第2学年）に12日間実施。					
授 業 計 画	第1回	実習施設について理解する				
	第2回	保育の一日の流れを理解し、参加する				
	第3回	子どもの観察とその記録より子どもを理解する				
	第4回	子どもの発達過程を理解し、子どもへの援助やかかわりを学ぶ				
	第5回	保育の計画や子どもの発達過程に応じた保育内容を学ぶ				
	第6回	子どもの生活や遊びと保育環境を学ぶ				
	第7回	子どもの安全及び疾病予防への配慮について理解する				
	第8回	保育課程の意義を理解しそれに基づく指導計画を学ぶ				
	第9回	記録に基づく省察や自己評価を行なう				
	第10回	子どもの最善の利益を具現化する方法について学ぶ				
	第11回	保育士の業務内容や職員間の役割分担と連携について理解する				
	第12回	保育士の役割と職業倫理を学ぶ				
	第13回					
	第14回					
	第15回					
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 実習で必要とされる保育技術の習得に励むこと。子どもを理解するための発達など知識やかかわり体験を増やすこと。			復習： 実習後に自身を振り返り、次の実習に向けて自己課題の達成に努める。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 実習課題（20％）、実習日誌（30％）、実習施設による評価（50％）					
教 科 書	『実習の手引き』（実習委員会）、『保育所保育指針』・解説書					
参 考 文 献						
注 意 事 項	「保育所実習研究Ⅰ」で履修した内容を実践すると同時に、保育所の指導を受け、実習生としてふさわしい言動がとれるように、日常生活において十分に留意すること。また、実習関係報告書類の提出遅延、実習中の怠惰、非行等があった場合は、本学の「実習派遣規制」によって、実習の停止、中止等が行なわれる場合があり、保育士証取得が出来ないことになるので厳重に注意すること。					

授 業 科 目	施 設 実 習	単位数	2	担当教員	小堀哲郎・志濃原亜美
講 義 の 内 容	施設実習を通して、施設の役割や機能、日々の生活の展開、利用者の理解と関係の形成、保育者としての職務内容等について实际的に学習する。 保育士証を取得するため、保育実習（必修）の中に施設実習を行なうことが定められており、保育に関する講義や演習で学んできた内容を児童福祉施設、知的障害者施設等で実践するものである。				
到 達 目 標	「福祉施設実習研究」で履修した内容を理解して実践し、実習生としてまた、社会人としてふさわしい言動がとれるようする。 福祉施設における援助者の職務内容について実践的に学び、理解する。				
授 業 計 画	実習施設の目的・機能の理解①				
	実習施設の目的・機能の理解②				
	実習施設の人的・物的環境の理解①				
	実習施設の人的・物的環境の理解②				
	施設の利用者の生活実態の把握と援助技術の習得①				
	施設の利用者の生活実態の把握と援助技術の習得②				
	施設の利用者の生活実態の把握と援助技術の習得③				
	保育士の職務内容・役割・他職種との連携の理解①				
	保育士の職務内容・役割・他職種との連携の理解②				
	施設と地域・家庭・関係機関等との連携についての理解				
	反省会・まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： あらかじめ、各自配当された施設について調べる。		復 習： 実習中、わからないことば等があれば、調べる。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 実習・施設の評価等（90％）、授業態度（10％）				
教 科 書	『最新保育資料集 2015』（ミネルヴァ書房）				
参 考 文 献	施設種別毎の「実習園資料」（本学実習資料室のもの）等を、数多く参照すること。				
注 意 事 項	「福祉施設実習研究」で履修した内容を理解して実践すると同時に、施設の指導を受け、実習生としてふさわしい言動がとれるように、十分に留意すること。 また、実習関係報告書類の提出遅延、実習中の怠惰、非行等があった場合は、本学の「実習派遣規制基準」によって、実習の停止、中止等が行なわれる場合があり、保育士証取得ができないことになるので注意すること。				

授 業 科 目	保 育 所 実 習 II		単位数	2	担当教員	丸橋聡美・富山大士
講 義 の 内 容	保育士証取得を目的とする保育実習は、保育に関する講義や演習で学んできた内容を保育所及び保育所以外の児童福祉施設等で実践するものである。保育所実習のうち後期実習が保育所実習Ⅱとなる。					
到 達 目 標	保育所実習Ⅱの目標は、保育所の保育を実際に実践し、子ども理解、かかわりの視点の明確化、指導計画の作成・実践など保育士としての資質・能力・技術を修得する。また、子どもの保育及び保護者支援、地域の子育て家庭への支援について総合的に学び、保育所の役割や機能について理解を深める。 後期実習は、主に参加・責任実習である。前期実習で学んだ基本的内容を踏まえ、積極的に保育活動に参加し、保育の理論と技能を総合的に体験し実践できるようにする。自らの保育観や目標を確立する。 第2学年（二部は第3学年）に12日間実施。					
授 業 計 画	第1回	保育所の社会的役割と責任を学ぶ				
	第2回	養護と教育が一体となって行なわれる保育を学ぶ				
	第3回	子どもの心身の状態や活動の観察をする				
	第4回	保育士等の動きや実践の観察をする				
	第5回	保育所の生活の流れや展開の把握を学ぶ				
	第6回	環境を通して行なう保育、生活や遊びを通して総合的に行なう保育を理解する				
	第7回	入所している子どもの保護者支援及び地域の子育て家庭への支援を学ぶ				
	第8回	地域社会との連携を学ぶ				
	第9回	保育課程に基づく指導計画の作成・実践・省察・評価と保育の過程を理解する				
	第10回	作成した指導計画に基づく保育実践と評価を行なう				
	第11回	多様な保育の展開と保育士としての業務、職業倫理を理解する				
	第12回	保育士としての自己の課題を明確化する				
	第13回					
	第14回					
	第15回					
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 実習で必要とされる保育技術の習得に励むこと。保育に関する知識・体験を増やし、実践できるようにする。			復習： 実習後に自身を振り返り、自己課題の達成に努める。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 実習課題（20％）、実習日誌（30％）、実習施設による評価（50％）					
教 科 書	『実習の手引き』（実習委員会）、『保育所保育指針』・解説書					
参 考 文 献						
注 意 事 項	「保育所実習研究Ⅱ」で履修した内容を実践すると同時に、保育所の指導を受け、実習生としてふさわしい言動がとれるように、日常生活において十分に留意すること。また、実習関係報告書類の提出遅延、実習中の怠惰、非行等があった場合は、本学の「実習派遣規制」によって、実習の停止、中止等が行なわれる場合があり、保育士証取得が出来ないことになるので厳重に注意すること。					

授 業 科 目	保 育 所 実 習 研 究 I		単位数	1	担当教員	丸橋聡美・富山大士
講 義 の 内 容	この保育所実習研究Ⅰは、保育所実習に平行して行われる授業であり、実習の目的、実習施設の機能、保育者の職務内容や、実習手続書類の作成について学習し、実習参加意識の高揚、各自の実習課題と事後の学習目標を立てる等、保育実習の意義を高めるものである。					
到 達 目 標	保育実習の意義・目的・内容を理解し、自らの課題を明確にする。子どもの人権と最善の利益の考慮などを理解し、実習の計画、実践、観察、記録、評価の方法について学び実践できるようにする。実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、新たな課題や目標を明確にする。					
授 業 計 画	第1回	保育実習、保育所実習について				
	第2回	保育所実習の目的理解				
	第3回	前期実習の目的（参加、観察実習）				
	第4回	前期実習参加の心得				
	第5回	実習手続き書類の作成指導（配当資料）				
	第6回	実習手続き書類の作成指導（調査書）				
	第7回	オリエンテーションについて				
	第8回	持ち物、身だしなみについて				
	第9回	保育園の一日の流れ、実習中の注意事項				
	第10回	参加、観察実習の留意点				
	第11回	実習日誌の作成指導				
	第12回	実習日誌の作成				
	第13回	実習課題と準備の説明				
	第14回	部分実習指導計画案について				
	第15回	実習の総括と自己評価				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 実習で必要とされる保育の知識や保育技術を学び、習得に励む。ボランティア活動などの実践の中で子どもとのかかわり体験をするように努める。			復 習： 自己課題の達成に努める。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題・レポート（60％）、授業態度（30％）、諸手続き（10％）					
教 科 書	『実習の手引き』（実習委員会）、『保育所保育指針』・解説書					
参 考 文 献						
注 意 事 項	各実習園に対する注意事項の説明、提出書類の作成等を行うので、原則として欠席は認めない。また、実習提出書類の遅延、授業態度の怠惰等は、「実習派遣規制」によって禁じられており、実習派遣ができなくなるので十分に留意すること。					

授 業 科 目	保 育 所 実 習 研 究 Ⅱ		単位数	1	担当教員	丸橋聡美・富山大士
講 義 の 内 容	この保育所実習研究Ⅱは、保育所実習に平行して行われる授業であり、実習の目的、実習施設の機能、保育者の職務内容や、実習手続書類の作成について学習し、実習参加意識の高揚、各自の実習課題と事後の学習目標を立てる等、保育実習の意義を高めるものである。					
到 達 目 標	保育実習の意義・目的を理解し、総合的に学ぶ。実習や既習の教科の内容や関連性を踏まえ、保育の全体的計画に基づく具体的な計画や保育実践力を身につける。保育士の専門性と職業倫理を理解する。実習の総括と自己評価を行い、保育に対する課題や認識を明確にする。					
授 業 計 画	第 1 回	後期実習の目的（参加、責任指導実習）				
	第 2 回	後期実習参加の心得				
	第 3 回	部分、責任指導実習の留意点				
	第 4 回	実習日誌の作成指導				
	第 5 回	実習日誌の作成（乳児クラス）				
	第 6 回	実習日誌の作成（幼児クラス）				
	第 7 回	指導計画案の作成指導				
	第 8 回	指導計画案の作成（乳児クラス）				
	第 9 回	指導計画案の作成（3 歳児クラス）				
	第 10 回	指導計画案の作成（4・5 歳児クラス）				
	第 11 回	実習課題と準備の説明・作成				
	第 12 回	オリエンテーション報告書、実習報告書の作成				
	第 13 回	実習の総括と自己評価				
	第 14 回	子ども観、保育観の確立と職業倫理について				
	第 15 回	課題の明確化				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 実習で必要とされる保育の知識や保育技術を学び、習得に努める。			復 習： 自己課題を明確にする。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題・レポート（60％）、授業態度（30％）、諸手続き（10％）					
教 科 書	『実習の手引き』（実習委員会）、『保育所保育指針』・解説書					
参 考 文 献						
注 意 事 項	各実習園に対する注意事項の説明、提出書類の作成等を行うので、原則として欠席は認めない。また、実習提出書類の遅延、授業態度の怠惰等は、「実習派遣規制」によって禁じられており、実習派遣ができなくなるので十分に留意すること。					

授 業 科 目	福 祉 施 設 実 習 研 究		単位数	1	担当教員	小堀哲郎・志濃原亜美
講 義 の 内 容	この授業は、施設実習の前後に行なわれるものである。事前授業では実習の目的、実習施設の機能、保育者の職務内容、および実習手続き書類の作成等について学習し、実習心得を身に付け、実習参加意欲の高揚を図るとともに、各自の実習課題を確立する。 実習後授業は、実習報告会の参加、実習報告書と実習アンケートの作成等を通して、自己の適性を見直し、保育者としての使命感や人権意識等を考え今後の学習課題を設定する。					
到 達 目 標	福祉施設実習の事前準備及び事後報告を行い、意欲的に実習に取り組む姿勢を養う。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション				
	第 2 回	施設実習の意義を理解する				
	第 3 回	実習施設の配当発表及び各実習施設の理解				
	第 4 回	居住型福祉施設の生活実態を知る（V T R）				
	第 5 回	実習生調査書の清書				
	第 6 回	実習日誌の書き方				
	第 7 回	児童福祉の相談機関、施設の概要①				
	第 8 回	児童福祉の相談機関、施設の概要②				
	第 9 回	施設実習の様子、実習生の動き方を学ぶ				
	第 10 回	実習に挑む心得①				
	第 11 回	実習に挑む心得②				
	第 12 回	実習に向けての最終確認				
	第 13 回	実習評価と反省				
	第 14 回	実習報告会の参加（代表者）				
	第 15 回	実習報告書の作成				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習：派遣施設が決まったら、自主的にその施設機能や利用者について予備学習を行う。			復 習：予備学習の補足をする。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験：実施（ ）する／（○）しない レポート（３０％）、授業態度（７０％）					
教 科 書	『保育士をめざす人の福祉施設実習』（みらい）					
参 考 文 献	適宜紹介する					
注 意 事 項	各実習園に対する注意事項の説明、提出書類の作成等を行うので、原則として欠席は認めない。また、実習提出書類の遅延、非行・怠惰等は、「実習派遣規制基準」によって禁じられているので十分に留意すること。 ◎派遣施設が決まったら、自主的にその施設機能や利用者について予備学習を行うこと。					